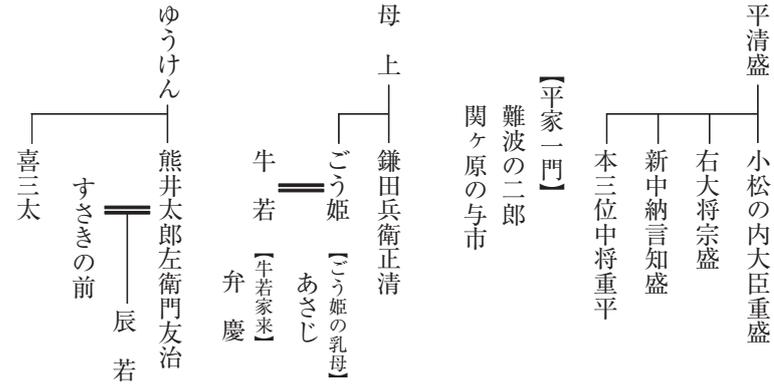


国指定重要無形民俗文化財 尾口のでくまわし

熊井太郎孝行之巻

「熊井太郎孝行之巻」登場人物図



あらすじ

源平の合戦に勝利した平清盛は太政大臣となつて天下を治め、息子の重盛は内大臣、次男宗盛は右大将、三男知盛は中納言となり、平家一門は我が世の天下を謳歌していた。そこへ近在の百姓達が大早敷で苦しんでいるので折衝をしてくるようになると直訴される千人切りの辻斬りを調べてほしい、という訴えが届く。清盛は源氏の残党のしわざであろうと怒るが、重盛はそれよりも早敷対策の方が先と意見し、国々の神社に祈禱の使いを立てることにした。

さて、源義朝に仕えていた鎌田兵衛の妹ごう姫は雨宿りに立ち寄った牛若丸と話して以来恋心を募らせていたが、会う機会もないうままに時が過ぎていくだけであった。ところが、母親から五条の橋に千人切りが出没するという噂を聞き、牛若丸に違いないと思つて、乳母といっしょに兜を着け、男の姿に変装して五条の橋へ向う。そこへやはり千人切りを退治するためにやってきた比叡山西塔の僧武蔵坊弁慶もやってきて、千人切りの牛若丸と三つどもえの立ち回りになる。が、やがて、ごう姫は牛若丸の思いから、また、弁慶も牛若丸に会うためにここにやってきたことがわかり、弁慶は牛若丸の家来になり、ごう姫も牛若丸と夫婦となつて、四人は若宮八幡宮へ参詣することになった。

小松の内大臣平重盛は家来を引き連れて住吉大明神へ参詣に向かったが、その途中人々が飢饉のために飢えに苦しんでいるのを見て悲しく思い、せめてもと銭をめぐんでい。そこへ幼い子供を連れて老人（熊井太郎の父うけん）と辰若が重盛に面会を乞い、家宝の刀を差し出して、しかるべき値で引き取ってほしいと願う。この刀が名刀であることを見て取った重盛はこの刀は家宝として大事に持っているべきだととし、金十両とともに返す。老人は喜んで帰っていくが、帰り道で重盛の家来関ヶ原の与市に襲われ、名刀も金も奪われてしまった。

一方、京都郊外の山崎にわび住まいをしている熊井の家では、主の太郎左衛門友治が病に臥せているところへ、弟の喜三太とその妻のすさきの前が山から帰ってきて見舞い、父の行方を尋ねる。喜三太はすさきの前が生活のために髪を切って売ったことを知り、いまの境遇を悲しんでいると、そこへ父うけんが辰若の手を引いて帰って来て、重盛の家来の狼藉ぶりを語って憤る。敵討をとはやる喜三太を友治はひき止め、頼朝から届いた回状のことを語り、ともに源氏の侍となつて都へ上ることになった。

一方、住吉神社に参拝した重盛は、その祈りの甲斐もなく大風で神木も並木もみな倒れてしまふのを目の当たりにして、平家の命運の尽きたことを悟り、心静かに帰って行くのであった。重盛が住吉神社に参詣したときの不吉な出来事は、都の人々の間に噂としてたちまちひろがっていた。弁慶はこれ幸いと、平家を擁護する立て札を作り、六波羅をはじめ都のあちこちに立てた。

一方、平家一門では春日大社に詣でた知盛と伊勢神宮に詣でた宗盛がそのお祓いの品を持ち帰っていたが、重盛は住吉明神からは神慮のものがあつたと語り、清盛に向かい政道の誤りをただすよう諫言し、聞き入れない清盛と争いになる。その後、春日大社の祓いの品も伊勢神宮の祓いの品も燃え上がり、重盛の言葉の正しさが証明される。

そこへ弁慶の立てた立て札についての報告があつてきたので、知盛は犯人を知らせたものには金五百枚を与えるという立て札をその横にたてさせる。さて、都へ上がった友治と喜三太兄弟は、この立て札を見て、いよいよ源氏の世の近いことを悟るが、戦に出たあとの家族の行く末を心配し、いろいろと思案の末、兄友治が犯人となつて喜三太に訴人させ、金五百枚を得る計画を立てる。喜三太は兄を死なせることになると反対し、なかなか承知しなかつたが、友治が、言うことを聞かぬと自害すると言いつ張つたので、やむなく兄を訴人する。関ヶ原の与市が派遣され、兄弟は与市の持つ刀が熊井家に伝わる家宝の刀であることに気づくが、金五百枚を得るのが先と我慢し、友治はしばらく獄に繋がれた。

弟の喜三太は金五百枚を持って家に帰るが、友治の妻のすさきの前に金の出所を聞かれ返事につまり、兄からの手紙を渡す。そこにはくわしい仔細は書かれておらず、妻子への別れの言葉があるだけであった。すさきの前は夫が死んでしまったと思ひ込み、自分も死のうと、夜中、父うけんや辰若に書き置きを残して家を出る。やがてうけんと喜三太はすさきの前がいなことに気づき山中を探しまわりますが、時すでに遅く山奥で自害していた。そこではじめて喜三太は、父に金五百枚を得るために友治と仕組んだ狂言であることを話し、辰若を連れてともに都へ向つていった。友治は六条河原に連れ出され与市の手で処刑されようとしていた。そこへ喜三太らの一行がやってくる。やがて首を討たれようというところに弁慶が斬り込んできて、友治を救い出し、家宝の刀も奪い返す。弁慶は立て札を立てたのは自分であるといひ、友治、喜三太兄弟が源氏譜代の臣と知ると、ただちに牛若と対面すべくその館に向かうことになった。

弁慶のはからいにより熊井親子は牛若と対面がかない、ともに平家討伐の相談をする。そして、弁慶の提案で、奥州の藤原秀衡を頼ることになり、一行は奥州へ下ることになり、牛若とごう姫の道行になる。牛若とごう姫が弁慶・熊井親子を待っているところへ勤め帰りの関ヶ原の与市一行がやって来る。与市はごう姫の美しさに心を奪われ、牛若が源氏の御曹司であるとも知らず家来になることを強要する。あまりのしつこさに牛若も腹を立てその身分を明かして与市勢と争っているところへ、弁慶と友治・喜三太兄弟が追いついてきて、大立ち回りとなり、与市と一行を討ち取ってしまう。そして、一同は、門出のよいはなむけになつた、源氏再興のしるしであると喜びつつ、ともに奥州に下つていくのであった。

登場人物解説

○平清盛 平家一門の総帥。太政大臣を経て、治承二年現在、出家して「先の関白浄海」と称している。

○小松の内大臣重盛 平清盛の長男。慈悲深い人物で、父の専横を諫める。

○右大将宗盛 平清盛の二男

○新中納言知盛 平清盛の三男。

○難波の二郎 平家一門の武将。

○関ヶ原の与市 平家一門の武将

○鎌田兵衛正清 源義朝に仕えた武将。平治の乱に敗れたあと、義朝とともに尾張まで逃げ落ちたが、国内海莊司長田忠致により、義朝とともに討たれた。

○母上 鎌田兵衛正清の母。都近くにごうの姫と住み、源氏再興の機をうかがっている。

○ごう姫 鎌田兵衛正清の妹。牛若丸に一目惚れし、以来恋い慕っている。ごうの姫。午王姫・郷姫などの漢字があてられている。

○あさじ ごう姫の乳母。

○牛若 源義朝の八男。

○弁慶 比叡山西塔の僧兵。のち、牛若の家来となる。

○熊井太郎左衛門友治 源氏譜代の侍。平家の世になったため父や妻子・弟らと山中に隠れ住み、源氏再興の機会をうかがう。

○すさきの前 友治の妻

○喜三太 友治の弟

○辰若 友治の息子

○ゆうけん 友治・喜三太の父



- ① その事があってのち。古浄瑠璃の段のはじまりによく用いる形式化した文句。
- ② インド舎衛国の須達長者らが釈迦とその弟子のために寄進した僧房。釈迦説法の場所として知られ、七層の伽藍で壮麗を極めたという。この無常院の鐘は有名であった。その後、五世紀初め法隆寺七世紀に玄奘三蔵が尋ねたときには荒廃していたという。以下「盛者必衰のことわり」まで『平家物語』の最初の部分の引用。
- ③ 仏教の考えで、すべてのものは常に変化しつづけて止むことがないということ。
- ④ 釈迦の涅槃（臨終）の臥床の四方に二本ずつあった木。涅槃のときに、それぞれが合体して一樹となり、すべて白色に変わったという。
- ⑤ 仏教の考えで、この世は無常だから今来えていてもいつかは衰えるときが必ずあるのは当然だということ。
- ⑥ 奈良時代末から平安時代初頭の天皇。七九四年に都を奈良から平安に移した。平氏は恒武天皇の皇子を祖とする。
- ⑦ 八代後の子孫。
- ⑧ 安芸の国の長官。「安芸」は旧国名で、今の広島県の西部。
- ⑨ 平安末期の武將。保元平治の乱後太政大臣となる。娘徳子を高倉天皇の皇后とし、その子安徳天皇の祖父として皇室の外戚となり、一門みな高官となって栄える。晩年、以仁王の挙兵、南都北嶺、源氏の蜂起などに会い、没後まもなく嫡流は滅亡する。
- ⑩ 保元元年（一一五六）平治元年（一一五九）に起こった二つの内乱。保元の乱は皇室の内部・摂関家藤原家内部の勢力争いで、このとき武家の平氏・源氏に力を借りた。その後勢力を得た平氏・源氏の両者が争い、平治の乱となった。
- ⑪ 平安末期の源氏の武將。義朝は為義の子。保元の乱で為義は崇徳上皇方について敗れて斬られ、義朝は後白河天皇について勝利を得て左馬頭となったが、清盛と不和になり藤原信頼とともに平治の乱を起したが、敗れて殺される。
- ⑫ 罪をせめて罰すること。
- ⑬ むすめ。特に、身分のある人のむすめ。
- ⑭ 高倉天皇。平安末期の天皇。
- ⑮ 皇后と同資格のきさき。新しく立后したきさを皇后と区別するという。
- ⑯ 中宮という高位にのぼることをいう。
- ⑰ 太政官は、中央行政機関である八省と諸國を総管し、國政を総括する最高機関。太政大臣はその最高位にある官。
- ⑱ なりあがり。次第に立身して。
- ⑲ 仏門に入って修行すること。
- ⑳ 天皇を補佐して政務を行なう重職。
- ㉑ 名乗った。
- ㉒ 貴族のむすこの称。
- ㉓ たくさんの「あいらつしやいます」「おわす」は「いる・ある」の尊敬語。
- ㉔ かぎりない。

熊井太郎孝行の巻 初段

① さてもそののち。② 祇園精舎の鐘の聲、③ 諸行無常の響きあり、沙羅双樹の花の色、④ 盛者必衰のことわり、人としてまぬがるべき道もなし。されば事は小より起こつて必ず大に及び、国家の治乱ありとかや。

ここに恒武天皇八世の後胤、安芸守平の清盛、保元平治の乱れに為義義朝を誅罰せしめ、あまつさえ息女を高倉の中宮にそなえ、その身は太政大臣に経上がり、入道して先の関白浄海とぞ号しける。公達あまたおわします。長男小松の内大臣重盛、二男右大将宗盛、三男新中納言知盛、本三位中将重平、その外子孫の繁昌きわもなし。さて又、天下の執権には悪七兵衛景清越中の二郎兵衛盛繼、上総の五郎兵衛忠光、伊賀の平内左衛門業景、その外数百の家の子郎党。昼夜の終始ひまもなく、厳しく守護し奉る。しかりといえども、入道相国おごり日々超過し、万民苦しみ、世の嘆きをもわきまえ給わず、昼夜酒宴に長

「祇園精舎の鐘の聲、諸行無常の響きあり、沙羅双樹の花の色、盛者必衰のことわり」これは有名な『平家物語』の最初に出る言葉ですが、人としてこの道理を逃れることはできません。物事は、小さな事から出発し、大きな出来事になっていくもので、国家が治まったり、乱れたりするのも、そのような流れのなかにあるものなのです。

さて、恒武天皇八代の後胤、安芸守平清盛は、保元平治の乱で為義・義朝を誅罰し、そのうえ、娘を高倉天皇の中宮にし、自分は太政大臣の位に昇りました。その後出家し入道となつて、いまは、先の関白浄海と名乗っています。たくさんいる子供達のなかでも、長男は小松の内大臣重盛、二男は右大将宗盛、三男は新中納言知盛、さらに本三位中将重平などもいて、子孫の繁昌ぶりは際限がありません。そのうえ、執権として天下の政務にあつている悪七兵衛景清、越中の二郎兵衛盛繼、上総の五郎兵衛忠光、伊賀の平内左衛門業景ら以下数百に及ぶ家来たちが昼夜のひまなく厳しく一門を守護しております。しかし、入道は、昼も夜も酒宴を催し、その贅沢ぶりは目に余るものがあり、天下万民が苦しみ嘆いておりました。まことに栄華に酔うものた

- 26 大事な職務を行なう者。
27 武家社会で、主家の一族と従者。一団とみなしていうときの語。
28 そうではあるが。
29 平清盛のこと。「相国」は太政大臣のこと。
30 程度がはなはだしいこと。

- 1 西暦一七七八年。
2 長期にわたり雨がふらず、農作物に必要な水がかれてしまうこと。ひでり。
3 あおうなばら。
4 ああ。強い悲哀の気持を表すことば。

- 5 今の京都市西方の仁和寺・龍安寺一帯の山地。
6 今の京都市、鴨川の東に連なる丘陵。

- 7 奉行所。

- 8 目の上の人に申し上げること。
9 ます。語末に用いて丁寧な気持ちをあらわす補助語。自分に関する目を上の者に述べるときに用いる。
10 常食に用いる五種類の穀物。米・麦・粟（あわ）・豆・黍（きび）または稗（ひえ）など、諸説ある。

- 11 慣例のとおり。

- 12 雨乞いを祈願するときの神。
13 稲の種籾を苗代にまく。

- 14 国家的行事として行なう神社への祈祷。

- 15 歎き悲しむこと。

- 16 いまわしい。

じ暮らさるる、栄華の程こそおろかなれ。

そもそも頃は治承二年の事かとよ。天下大きに早魃し、百日に余って一滴もこぼさず。近国ともに草木を枯らし、蒼海深しといえども、塩の満ち干も定かならず。あっぱれ国土の患いやと、悲しまざらんはなかりけり。

かかる所へ西山東山、近郷の百姓ども、おいおいに馳せ参り、御白洲に畏まり、

「おそれながら言上申し上げ候。この度の大日照りゆえ、耕作心にまかせず、雨露の恵みなければ、五穀成就仕らず。それにつけ、我々ども心を碎き、かたのごとく雨乞い仕り候えども、竜神感応これなく、なお照りまさる日の下に、いづくに種を下ろすべきとも存ぜられず。あわれ天下の御祈祷なされ下されなば、有難くござ候わん」と、言葉を描えて言上す。

入道つくづく感嘆し給い、
「これまたゆゆしき騒動なり。いかがあらん」

と御相談ある所へ、洛中の老若、御白洲に畏まり、御訴訟申し

ちの様子というものは、いつの世にもおろかなものでございます。

時は、ちょうど治承二年。天下に大旱魃があり、百日あまりの間、一滴の雨も降りませんでした。都近くの国々では、草木は枯れ、海の潮の満ち干さえも一定せず、国土が病んでいるといつて悲しまないものはありませんでした。

そこへ、都近くの西山東山の百姓どもが集まってきて、六波羅の白洲にかしこまって、「おそれながら申し上げます。この度の大日照りのため、思うように田畑を耕やすことができず、雨露の恵みもありませんから、どの穀物もまともに育っておりません。それで、私どもも、いろいろと相談し、いつものように雨乞いをいたしました。竜神がいつこうに應えてくれる様子がなく、日差しは、ますますはげしく照りつけるばかりでございます。これ以上、なにをすればいいのか、全くわかりません。なにとぞ、朝廷で雨乞いの御祈祷をしてくださるようお願いいたします」と、言葉を描えて申し上げました。清盛入道は、おどろいて、「これまた大変なことである。さてどうしたものであろう」と相談しておりますところへ、また、京の老人や若者が御白洲にやってきて訴えてきました。

- ① そのこととでございませう。「さ」にあり」の丁寧語「さ」にぞうろう」の転、目上、または親しくない相手に用いる。
- ② 男の子をののしっている語。
- ③ 京都で、五条通りが鴨川を横切るところにかかると橋。牛若丸と弁慶が戦った伝説がある。
- ④ 腕試しなどのために誓いを立てて千人を斬り殺すこと。
- ⑤ 「する」の謙讓語。
- ⑥ 嚴重に。
- ⑦ 罪人を取り調べること。

- ⑧ いらつしやう。「ます」は「いる」の尊敬語。
- ⑨ なるほど。
- ⑩ 仏教で、天の魔王のこと。「波旬」は悪魔の名。
- ⑪ しわざ。
- ⑫ そうでなければ。
- ⑬ 浪人をいやしめて言う語。「浪人」は、仕える主人がない武士。
- ⑭ 乱暴。狼の寝ていたあとの草がひどく乱れていることからいう語。
- ⑮ 賊や罪人などを亡ぼしたりつかまえたりするために派遣される人。「べし」はここでは意志・決意をあらわす。
- ⑯ 「言えは」の尊敬語。
- ⑰ 「笏」東帯着用のとき右手に持つて威儀を整えた板片。備忘のため裏に式次第を書いた紙片をはった。
- ⑱ 貴人の命令。おことば。
- ⑲ 子供をののしっている語。
- ⑳ 武力によるいきおい。
- ㉑ 「さしおく」は放つておく意。「給いて」は尊敬を表わす。
- ㉒ いま目の前にある。当面する。
- ㉓ お考えになり。「御……なされ」は尊敬を表わす。
- ㉔ そうなさるのがよいでしょう。「候はん」は丁寧な推量を表わす。

あげたき由訴うる。

「いかなる事ぞ」

とお尋ねありければ、町人謹んで、

「さん候。何者とは存ぜず、十五六なるわっぱにて候が、毎夜五条

の橋へまかりいで、千人切りを仕る。夕べも十六人、先の夜も

二十人、ある日は五人三人、毎夜往来を妨げ申し候。きつと御

詮議あそばされ下されよ」

と謹んで言上す。

入道大きに立腹ましまし、

「何様それは天魔波旬の所為か。さもなれば源家方の素浪人め

らが、身の置き所なきままにかかる狼藉なしつらん。急ぎ討手

をさし遣わすべし」

と、大きに怒つてのたまえば、重盛しやく取り直し、

「御錠にては候えども、それ程の小童がいかなる武威を振るう

とも、そも何事のあるべきぞ。まずそれはさしおかせ給いて、

さしあたりたる天下の騒動御思案なされ、しかるべく候わん」

と謹んで申さるる。

「何事であるか」

と聞きましたところ、町人たちは、

「何者か素性はわからないのですが、十五六

歳くらいの小僧が、毎夜五条の橋にあらわれ

て、千人切りをいたしております。昨夜も十

六人、その前の夜も二十人というふうには、毎

晩、五人あるいは三人と、夜ごとに通行を妨

げられてまことに迷惑をしております。なん

とか、調べ上げて、懲らしめてくださいませ

ようお願いします」

と申し上げました。入道は大いに立腹し、

「なに、それは天魔かなにかのしわざという

のか。いやいや、源氏の素浪人めらが、する

こともないまま、そのような狼藉をはたらい

ておるのである。すぐに、討手をつかわす

ように」

と、大そう怒つて言いましたが、内大臣重盛

は、持つていた笏を取り直しながら、

「ご命令ではございませうが、それくらいの子

供がどんなに刀を振り回したところで、何が

- ①もともと。
- ②お思いになり。「思い」の尊敬語。
- ③理由。
- ④ある人に代って神仏へ参詣すること。また、その人。おつかわしになるのがよい。「らる」は尊敬を表わす。
- ⑤和泉国のこと。今の大阪府の南部。
- ⑥今の大阪市住吉区住吉にある神社。住吉大社海上守護と開運の神として信仰される。
- ⑦平清盛の長子。屋敷が京都の小松谷にあったのでこう呼ばれる。『平家物語』では文武にすぐれた温和な人物として登場する。
- ⑧天照大神宮。内宮。今の三重県伊勢市五十鈴川上にある神宮。天皇の祖先神とされる天照大神を祭る。
- ⑨平宗盛。平清盛の三男。
- ⑩今の奈良市春日野町にある神社。春日大社。藤原氏の氏神。
- ⑪平知盛。平清盛の子。壇ノ浦の戦いに敗れたとき、「見るべき程の事は見つ」と言い残して入水したことで知られる。
- ⑫清盛の代わりに役目をつとめることをいう。こまでにしておいて。
- ⑬『保元物語』に源義朝の第一の郎党として登場する人物。義朝に殉じた。
- ⑭義経の御室。「午王妃」「郷姫」「京姫」と書くこともある。
- ⑮つらいときによいしょにいってくれる友。大切にす。
- ⑯生母にかわって育てる女。うば。
- ⑰月日の流れはとめることができず、どんどん過ぎて。
- ⑱源義朝。
- ⑲源義経の幼名。
- ⑳一時的な。偶然的。
- ㉑形だけの。
- ㉒その場限りで、本気でないこと。
- ㉓あさはかき。
- ㉔波の荒い磯。「有り」とかける。
- ㉕夜毎に。「波」「よるよる」は「荒磯」の縁語。
- ㉖むやみに。「ひたす」。
- ㉗たすねたく。「まほし」は希望を表す語。
- ㉘「思う」の尊敬語。
- ㉙教え。
- ㉚ひとりごとを言う。「給い」は敬語。
- ㉛けなげだ。
- ㉜あやまちや欠点をなおすように忠告してさしあげ。「いさめ」は目上の人に用いる。また「参る」は謙譲語。
- ㉝無駄に。

入道「げにも」と思し召し、

「申さるる所いわれあり。しからば国々の神社へ代参立てらるべし」

とて、泉州住吉大明神へ小松の大臣重盛、天照大神宮へは右大將宗盛。なんと春日大明神へ新中納言知盛。いずれも天下の御代官として、路次の行列はなばなく、思い思いに代参あり。

これはさておき、ここに哀れを留めしは、鎌田兵衛正清の御母上や妹君、ごうの姫にて諸事の哀れを留めたり。憂き時つるる友もなく、常に労る者としては、乳母のあさじばかりなり。つながぬ月日数そいて、姫君今ははや十六才になり給う。つらき中にも恋風や、過ぎにし夏の頃かよ、源氏左馬守義朝の八男、牛若君と申せしがこの所を通らせ給い、ただかりそめの雨やどりに、託言ばかりのたわむれを、女心のはかなさは、忘るる暇も荒磯の、波のよるよる懂れて、そぞろにこの君愛おしく、尋ねまほしく思すれど、母のいましめ恐ろしく、一人ごちたき給いける志こそやさしけれ。されども乳母がいさめ参らせ、むなしく月日を送らるる。

入道も「そのとおり」と思い直し、「重盛の言う通りじゃ。では、早速、諸国の神社へ祈祷のための使いを出すことにしよう」

ということになりました。和泉国の住吉大明神へは小松の大臣重盛が、伊勢の天照大神宮へは右大將宗盛が、南都奈良の春日大明神へは新中納言知盛が、それぞれ、清盛の使いとして、はなばなく行列を仕立てて、向かうことになりました。

さて、話はかわって、いま、つらい境遇に置かれているのは、鎌田兵衛正清の母親と正清の妹午王姫であります。このつらい時に、いっしょにいてくれる友もなく、いたわつてくれるのは乳母のあさじだけです。時のたつのは早く、午王姫はもう十六歳。そういう境遇にあつても、恋心は芽生えてくるもので、この前の夏のある日、源義朝の八男の牛若君という方がここを通り過ぎて、ほんのしばらく雨宿りをしたのでしたが、そのときのやさしい言葉が忘れられず、以来、昼も夜も恋しく思うようになったのです。あの若君の行方をたずねて探し出したとは思っても、母に叱られるのもこわく、一人さびしくその悩みを語るだけです。その心根は若い女らしくやさしいものでありますが、乳母からも、あきらめるしかないといさめられて、空しく月日は過ぎていくばかりでした。

- ①年寄ることを、波が重ねて寄るのたとえたと語。
- ②源義朝の乳母であった。従って蒲田正清と義朝は乳兄弟の関係。
- ③これまでのこととこれからのこと。

- ④不審だ。わけがわからない。
- ⑤おもいがけない。
- ⑥様子。
- ⑦理解できないので。

⑧ひどく。

- ⑨私。室町時代以後、女性の自称。
- ⑩ほかのことではない。

- ⑪わが主君。
- ⑫死後満十二年目に行なう仏事供養。

- ⑬あなた。軽い敬意を表す。
- ⑭世が世ならば。今の世でなく、栄えていた時代ならば。「まします」は「ある」の尊敬語

- ⑮たくさんの。
- ⑯盛大な。

⑰これほど。

- ⑱はつきりしていなくて不安だ。

- ⑲そうではあるが。しかし。

- ⑳平家の子息を公達というのに対して、源氏の子息を敬つていう語

- ㉑死者の年忌などに仏事供養を行なうこと。

- ㉒夜ごとに。毎晩。

- ㉓感心であることだ。けなげなことだ。

- ㉔姓「源」の字義により源氏をたたえた言葉。
- ㉕いよいよ勇んではやりたつ心。

身は百歳に及べども、涙は尽きぬ老いの波、袖に余りて母上は、来し方行く末思いやり、泣く泣く出させ給いしを、姫君そばに立ち寄りて、

「いぶかしや母上様。時ならぬ御涙の風情心得がたく候えば語らせ給え」

と問い給う。母はいとど涙ぐみ、

「おおその事よ、自らが涙の風情は余の義にあらず。来る正月三日こそ、我が君左馬守義朝公の十三回忌にあたり。しかれば御身の兄鎌田がためにも十三年よ。まことに君、御世が御世にてましますば、あまたの僧を供養して、ゆゆしき御弔いもあるべきに、今は平家の世となりて、かばかりつらき我々が、身の置き所もおぼつかなし。

さりながら聞き給え。武士たる者の持つべき者は男子なり。

いつぞやこの所にて雨やどりをなされたる御曹子牛若君は、父義朝公十三年忌の追善に、いかにもして平家方の者どもを、一人なりとも討たんがため、夜な夜な五条の橋に出で、千人切りをし給うと聞く。幼けれどもしおらしゃ。流れも清き源の弥猛心

一方、午玉姫の母親も、娘の思いとは別に、いままでのことやこれからのことを考えると悲しくて涙があふれてきます。姫君がそばに立ち寄り、

「母上、どうして泣いておられるのですか。

そのわけを話してください」

とたずねますと、母は泣きながら、

「いえ、この涙のわけは、他のことではありません。この正月三日は、我が君左馬守義朝公の十三回忌。ですから、そなたの兄鎌田兵衛正清にとつても十三年になります。いまが源氏の御代であれば、たくさんの僧をよんで、盛大な仏事を執り行なうところですが、無念なことに、今は平家の世、我々の身の置き所もない有様です。しかし、よく聞きなさい。武士たるもの、持つべきは男ですよ。いつぞやここで雨やどりをなされた源氏の御曹子牛若君は、父義朝公十三年忌の追善のために、なんとかして、平家方の者どもを、一人でも討とうと、毎夜毎夜五条の橋に出ていき、千人切りをしておられるとか。幼ないとはいえ、なんとも頼もしい限りです。

①かわいそうなことだなあ。
②慈悲心がなく、むごい者。

③殺され。
④生きていても意味がない。

⑤「かわ」は強調のための語。

⑥ささげよう。

⑦ご安心下さい。

⑧戦って殺し。

⑨連れて行け。

⑩とんでもないことだ。
⑪気が狂われたのですか。「ばし」は強調のため
の語。

⑫不審だ。わけがわからない。
⑬お考えはどのようなのですか。

⑭お聞きになり。「聞き」の尊敬語。

ぞ頼もしき。

これについて不憫やな、鎌田はさて男子二人持ちながら、邪険な者の心ゆえ、父と一緒に害せられ、後に残る者としては、あるに甲斐なき妹や、老いの身ばかり残りいて、何をかは正清が供養に奉ぜん」と、またさめざめと泣き給う。

ごうも涙に暮れながら、

「御心やすく思し召せ。女なりとも自らが、平家方の者どもを一人なりとも討ち止めて、兄正清の供養に奉ずべし。まずこなたへ」

と御手を取り、奥の一間に入れおいて、密かに乳母を招き寄せ、「さてさて嬉しや、自らが思いし事こそ叶いたり。その五条の橋とやらんへ自らを具して行け」

とのたまえば、あさじ御顔うちながめ、

「のう軽忽や。気ばし違わせ給うかや。女の身として暗き夜に行かんとは心得ず。まず思し召しはいかに」とあれば、姫君聞こし召し、

そういう話を聞くと、残念なのが我が家です。鎌田正清には二人も息子がありませんが、父と一緒に殺されてしまい、後に残されたのは、老いた私と妹のそなたばかり。わが夫の供養になにをしてさしあげればいいのか」と、またさめざめと泣くのでした。

午王姫ももらい泣きをしながら、「御安心下さい。女とはいえ、この私が、平家方の者を、一人でも二人でも討ちとって、兄正清の供養といたしてみせます。とりあえず、奥の方に」

と母の手を取り、奥の一間に入れおいたあと、こっそりと乳母を招き寄せて、

「まあ、嬉しいこと。私の願いが叶えられそうですね。その牛若殿が出没されるといふ五条の橋とやらへ、私を連れて行ってくれぬか」といいました。乳母のあさじは、じつと姫の顔を見つめ、

「なんとまあ、はしたない。気でも違われませんでしたか？ 女の身で、暗い夜に出ていくなどとはどういうことですか。いったい、何を考えているのですか」とたしなめました。が、姫は、

①前々から。以前から。

②どうにかして。

③どうせ。

④牛若自身に殺されたなら、
⑤もとの望みである。

⑥遅くなる。
⑦早く早く。

⑧身仕度。

⑨かつこう。

⑩戦いに必要な七種類の道具のひとつ。足・刀・太刀・弓・矢・幌(ほろ)・兜(かぶと)など、内訳については諸説ある。
⑪男。
⑫うっかりしてしそこなうな。

⑬さても。それにしても。
⑭いかに立派な男らしい男に見えることを言う。

「ああ愚かなり。あさじ、御身もかねがね知るとく、牛若君

の御事を忘る間もなく恋い焦がれ、いかにもしてと思えども、

行方知らねば力なし。今母様の御物語に、五条の橋にまします

とや。とても焦がれて死する身なれば、その所へ尋ね行き、千人

切りの数に入り、愛おしき牛若の御手にかかれれば本望なり。も

し御心ましまして、召し使わせて給わらば、女なりとも御供

申し、平家方の者どもを、一人なりとも討ち取って、兄の為に

奉ずべし。時刻移ればおそなわる。早とくとく

とせき給う。あさじも今は力なく、

「してこのままは行かれまじ。出で立ちはいかに」

と問いければ、

「はあ、誠にこのさまにては行かれまじ。さて何とがなせん。

おお、よき思案をめぐらせたり。ここに兄様の鎧兜のあるな

れば、七つ道具を取り持ち、夫に化けて行くべきぞ。ぬかるな

あさじ」

「おお、まかさんせ」

と鎧うち着せ奉り、さつても似合うた男伊達。

「なんと愚かなことを。あさじや、私が前々

から牛若君のことが忘れられずにいるのは、

そなたも知つてのとおり。なんとかしてお会

いしたいと思うが、行方がわからぬので、ど

うにもできないでいたのです。が、いま母上

の御話で、毎夜毎夜、五条の橋に出てこれら

るといふ。焦がれ死にするくらいなら、そこ

へ尋ねて行き、千人切りの一人として、斬ら

れたとしても、愛しい牛若様の手にかかつて

のことなら、本望というもの。もし気に入っ

てくださって、そばに置いてもらえるならば、

女であっても、御供をいたし、平家方の者ど

もを、一人でも討ち取って、兄の為の供養に

したいと思います。おそくなつてはなりません

ぬ。早くいきましよう」

とせきたてます。あさじもやむなく案内する

ことになりました。

「しかし、このままの格好では行けないでし

よう。どうしましようか」

「たしかに、このままでは無理だが……、ど

- ①「初瀬」は奈良県桜井市にある地名。観音信仰で有名な長谷寺がある。
 ②京都市を流れる川。
 ③死出の山は冥土にあるという険しい山のこと。そこに向かう旅路ということで、死を覚悟して出発すること。
 ④花の名。「言う顔」にかける。

- ⑤鎧の札(さね)を黒いかわひもでつづり合わせた大形のよろい。
 ⑥武将が着る、装具が完備した正式の鎧。
 ⑦身仕度が少し崩れているようす。
 ⑧刃先が広くなってそりかえった刀で、長い柄をつけたもの。
 ⑨手に提(さ)げ持つて。
 ⑩(戦うための)身仕度をととのえ。
 ⑪なんとなく。

- ⑫あちらの方。
 ⑬思った通り。
 ⑭橋や縁側のふちに腰の高さほどに渡した横木。人が落ちないように設けたてすり。
 ⑮地のうすい絹の衣。
 ⑯頭からかぶつて。
 ⑰さては。

- ⑱左手。弓を持つ手の意。
 ⑲右手。馬の手綱を持つ手の意。
 ⑳とりついて。すがりついて。
 ㉑じゃまなことだ。

- ㉒二メートル。一尺は約三〇センチメートル。「ゆたか」は十分あるの意。
 ㉓もと、押しかけて行く意。無礼な。
 ㉔若いやつら。軽んじた言い方。
 ㉕夜ごとに。毎晩のように。

一度出て、二たび帰らぬこの庵。初瀬にまがう加茂川や、死出の旅路と夕顔の、五条の橋へと出でらるる。川風もはや吹けすぐる橋の面、川岸高く夕波の、景色はそれが夜風の、夕べ程なき秋の風。光り輝く月の夜に、着たる鎧は黒皮の、おどしにおどす大鎧、七つ道具の差し物を、しどけなげに負いなして、長刀たずさえ出で給えば、乳母も続いて装束し、そぞろ浮き立つ我が心。露に玉ちる白波の立つより渡る橋板を、さも荒けなく踏みならせど、脅そう人もなかりけり。

ややありて彼処を見れば、案のごとく誰とも知れず、欄干に寄り添うて薄絹かざきおわします。姫君乳母目と目を見合わせ、「すわや、これぞ」

と走り寄り、弓手馬手よりとり付きて、「のう千人切り。御手にかからん志にてこれまで参り候なり。うととうしや。この絹を取らせ給え」

と引きのくれば、思いもよらぬ七尺ゆたかの大の法師。両眼稲妻のごとくにて、二人の人々取つて押さえ、

「やあ、推参なる小冠者ばら。この頃夜な夜な往來を妨ぐるは、

一度出たら、二度とは帰らぬつもりこの庵を出て、二人は賀茂川に向かい、あるいはこれが死出の旅路かと思いつつ、五条の橋へとやってきました。川風が吹き過ぎ、橋から見える川面には夕波が立ちさわいでいます。夜風が吹き、秋の風のなか、光り輝く月が出ている夜です。その橋の上を、午王姫は黒皮おどしの鎧に七つ道具を持ち、長刀をたずさえ、乳母といっしょにやってきました。恋しい人に会えるかと思うとなく心も浮き立ちます。心はやるままに橋板を荒々しく踏みならしてみますが、誰もあらわれません。

しばらくして、向こうの方を見ますと、予想どおり、誰かはわかりませんが、薄絹をかぶつて欄干に寄りかかっている人がいます。姫は乳母と目を見合わせ、「あれが、牛若君だ」と走り寄つて、両手にとりすがり、「千人切りをなさつているとか。その手にかつて死ぬ覚悟でここまでやってきました。じゃまになりますから、この絹を取つてください」

と言いつつ薄絹を引きのけますと、意外にも、七尺以上もある大男の法師で、両眼は稲妻のように輝いていました。二人をすぐにつかまえて、

「やあ、無礼なやつらじゃ。この頃、毎夜毎夜往來を妨げておるのは、おのれらじゃな。」

- ①町人を軽んじた言い方。
 ②大変間違っているだろう。
 ③京都府と滋賀県の境にある山。京都を守る霊山として有名。東の中腹に延暦寺がある。
 ④東塔、横川（よかわ）とともに比叡山三塔の一。六つの谷がありいくつもの堂があったが、弁慶がいたのは西塔の中堂の釈迦堂であるという。
 ⑤平安末・鎌倉初期の僧。源義経の従臣で、安宅の関で義経を救い、衣川の戦いで討死したという。

- ⑥そそう。失礼。
 ⑦絶対に。

- ⑧きつと。さては。

- ⑨くわしい事情。

- ⑩すばやく。
 ⑪思い始め。思いつき。

- ⑫武家時代、女が自分をへりくだって言う語。

- ⑬ふるえながら。

おのれらにてありけるよな。町人風情を悩ましたるとは拔群違
 うべし。我はここ比叡山西塔、北谷に隠れなき武蔵坊弁慶と
 いう者なり。掴み殺して捨てん
 と言えは、乳母、

「のう人違いなり。聊爾はしなさるるな。女にて候ぞ。必ず後悔
 し給うな」

と、二人一緒に言葉を揃えのたまえば、弁慶つくづく見て、

「ふふ。声を聞けば女なり。姿を見れば夫なり。これにはいか
 さま子細あるべし。様子を語れ」

と引き起こせば、その時姫君ため息をほつとつき、

「いかが言いてよからん」

と、案じ患い給いしが、ちやくと思ひ出し、

「恥ずかしながら妾はこの辺りの者なるが、この所の千人切り
 に父を討たせ、あまり腹の立つままに、女なるとも一太刀恨
 み、父の供養に奉ぜんため、これまで参り候えども、思いも寄
 らぬ坊様に押さえられたよ、恥ずかしや」

と、ふるいふるいうち笑い、顔うち赤めて申さるる。

が、わしは、そういう町のものに迷惑をかけ
 たりはせぬ。わしは、あの比叡山の西塔、北
 谷に隠れない武蔵坊弁慶というものじや。
 おまえらごときはすぐにつかみ殺してやる
 わ」

「いや、人違いでございます。早まってはな
 りませぬ。われらは女でございます。後悔な
 さいませぞ」

と、二人一緒に言葉を揃えていますので、
 弁慶はつくづくながめて、

「なるほど、声を聞けば女じゃのう。が、そ
 の姿は男ではないか。これはきつとわけがあ
 るのであろう。話して聞かせてくれ」

と引き起こしたので、姫はほつとため息
 をつき、どう言えばいいかしばらく思案して
 おりましたが、すぐに思いついて、

「私はこの辺りに住むものでございます。こ
 の橋で父が千人切りのために討たれました。

あまりにも腹立しく思ひまして、父の供養の
 ために、女なりとも、せめて一太刀、あびせ
 ようとここまでやってきたのですが、思いが
 けずあなた様に取り押さえられてしまいました
 た。まことにお恥ずかしい次第です」

と、ふるえながらもちよつと笑い、はずかし
 そうに顔を赤くして言いました。

①安心なさい。
②今すぐにもここへ。

③「緋」ははなやかな赤色。鎧の札(さね)を緋色の革ひもや組紐などでつづり合せたよろい。
④源氏で代々伝えている名刀の友切丸。もと「鬚切」といった。
⑤白色の着物。
⑥大声。
⑦「言う」の尊敬語。

⑧無意味に切ると刀が汚れる、ということ。

⑨仲間。ここでは「やつ」の意。

弁慶聞いて、

「さてはさにてましますか。愚僧もその千人切りを従えんため、宵より待つこそ久しけれ。心やすかれ、今にもこれへ来るべし。討つて本望遂げさせん」

と、言いも果てぬに足音す。

すわやと見れば牛若は緋緘の鎧を着、源氏重代友切丸。弓手の脇に白衣を取りて引きかずき、大音上げてのたもうは、

「いかにそれなる往來の者。我深き念願ありて、夕べまでに九百九十九人切り。今一人にて千人に及べり。見れば汝ら三人あり。刀汚しに三人までは切るべからず。その中にも運のつきたる輩、一人出よ」

とのたまえば、弁慶聞いて、

「ええ。推参なる小冠者や」

と飛んでかかれば、ごう袂にすぎり、

「のう、しばらく待たせ給え。して、あの者を何とかなされ候ぞ」

弁慶聞いて、

それを聞いて弁慶は、

「そういうことでありましたか。愚僧も、その千人切りを成敗しようと、宵より待つておったのです。が、ご安心なされよ。もうすぐここに来るはずです。私が討ち取つてそなたにも敵討の本望を遂げさせて進ぜましようぞ」

と、言い終らないうちに足音がしました。「すわ、来たか」と見ますと、牛若丸が緋緘の鎧を着、源氏重代の友切丸を腰に差し、弓手の脇には白衣を手を持っていきます。大声で、

「そこにいる往來の者たちよ。私には深く願う次第があつて、昨夜までに九百九十九人を切り、もう一人で千人になるところじゃ。見ればそなたたちは三人いる。が、三人も切る必要はない。運のないやつ一人でよい、ここに出てくるがいい」

といますので、弁慶は怒り、

「ええ。生意気なこわっぱめ」

と飛んで出ようとします。が、午王姫はそのたもとにすがつて、

「いや、しばらくお待ちください。で、あの者をどうするおつもりでしょうか」

これを聞いた弁慶は、

① そうかもしれない。

② みなまで言わず。

③ 身をお互に攻撃を避ける。

④ 刀を両手で握って頭上高く構え、拝むようなかたちで斬り下ろすこと。

⑤ 「とり直して」を強めた言い方。

⑥ 刀で足を横から払うようにして斬ること。

⑦ まっすぐに伸ばすことをせず。

⑧ とんだりはねたり、危ないところを逃れたりかくれたりして。

⑨ 有名な。
⑩ 蝶や鳥のようなので。「鳥翼」は鳥のこと。

⑪ もてあまして。

⑫ 残念である。

⑬ 細切れ。

⑭ 柄を長く持つて。

⑮ 人を見下したり憎んだりしたときの言い方。
⑯ 腕に覚えのある強いやつ。

⑰ 手下。

「この長刀にてただ一打ちに」

と申せば、ごう聞いて、

「おおさま候わん。さりながら、同じくは生け捕りにして給わるまじきや」

「おおよすき事。只今くつて参らせん」

と、言いもあえず、長刀を水車にくるりくるりくるると、振ってかかれればそむけて外し、拝み打ちにさつくと打てば、右の方に飛び違う。おっとり直して裾を払えば、踊り上がって足をもためず、中を払えば頭を地につけ、跳んつ跳ねつ、抜けつ紛れつ、秘術を尽くしてしばしが程こそ戦いけれ。

さすがに名を得し武蔵なれども、蝶鳥翼のごとくなれば、しばしあぐんで見えたりしが、

「これ程の小冠者めを討ち漏らしては口惜しし。微塵になさん」と長刀柄長く、おっとりのべてかかりしを、牛若心に思し召せば、

「きやつは不思議の痴れ者なり。いかにもして生け捕りにし、降参させ、下人にせばや」

「この長刀で一打ちに斬るつもりじゃ」

「なるほど、そうしたいところでしょうが、ここは、生け捕りにしてただけぬものでしようか」

「おお、それはたやすいこと。すぐに、縛りあげてやろう」

と、言うやいなや、長刀を水車のようにくるくるくる振りまわしてかかっていきました。が、牛若の方は、たくみに外し、拝み打ちにさくつと斬りかかっていくと、右の方に入れ違いに飛んでいきます。刀を取り直して裾を払えば、踊り上がって足が見えませんが、胴をねらうと、頭を地面につけるほどにしてよけ、跳んだり跳ねたりして、秘術の限りを尽くして戦いました。が、いくら豪腕で知られた武蔵坊とはいえ、蝶や鳥のように身軽に身をお互にさわりますので、少々攻めあぐねているようでした。それでも、

「これほどの若者を討ち漏らしては無念。かならずつかまえてみせるぞ」

と気を取り直し、長刀を上げて、とびかかっています。牛若の方はというと、

「こいつは、なかなかの腕の坊主じゃ。なんとか生け捕りにして、降参させ、家来にしたいのもの」

- ①受け身。守る立場。
②優勢な勢いについて。
③間をおかずつげざまに。

- ④そそっかしい人。
⑤僧が自分を謙遜して言う言葉。
⑥土台石。

- ⑦死に際。
⑧心に仏の姿や功德を思い、仏の名を唱えること。浄土教ではこれにより極楽浄土に行けるという。

- ⑨力で相手の体の自由を奪うこと。
⑩女たち。ごう姫とあさじのこと。

- ⑪協力せよ。

- ⑫じよせい。

- ⑬なさないことですね。

と、わざと受け太刀に見え給えば、弁慶勝に乗って、たたみかけて討ってかかれれば、ごうははつと思ひ、乳母もろとも弁慶に討ってかかる。

弁慶振り返って、

「やれ、粗相者。愚僧なるわ」

と言うひまに、牛若礎を踏み落とす、両足取って引き倒し、馬乗りにならんと乗り、

「さあ今が最期ぞ。念仏申せ」

とありければ、弁慶下より、

「愚僧をかく手ごめにするもの、人間にてはよもあらじ。やれ女房ども、折り合え」

と呼ばわれれば、姫も乳母も弓手馬手より走りつけ、

「のう牛若様、許させ給え」

と取りつけば、牛若見給ひ、

「見れば女性の身として、我が名を呼ぶは心得ず。誰人なるぞ」

とありければ、

「うたてやな。見忘れさせ給うかや。鎌田が妹のごうにて候が、

と思ひ、わざと攻めを受けるばかりで、かかっていたりはしません。弁慶はそれに乗じて、たたみかけるように斬りかかっていきます。牛王姫は牛若が不利と見て、乳母といっしょに弁慶に斬りかかりました。弁慶は振り返って、

「やい、この粗忽者。わしじゃ。愚僧じゃ」

と言っている間に、牛若が飛びかかり、両足を取って引き倒し、馬乗りにならんと乗って、

「さあもう最期だ。観念せよ」

と言いますと、弁慶は下から、
「わしをこのように手ごめにするとは、こいつは人間ではないな。やい、女どもよ、出てこい」

と叫びました。姫も乳母も両側から駆け寄り、

「牛若様、許してください」

と取りつきました。牛若は二人の出で立ちを
ごらんになり、

「見れば、女の身。なのに、私の名を呼ぶとは不審。そなたは誰じゃ」

と聞きました。姫は、
「ああ、なげかわしい。お見忘れでございませうか。鎌田正清の妹の牛王でございます。」

①殺して下さい。

②自分の思いをくどくどと言う。

③承知した。

④ほめたたえる言葉。
⑤でなければ。
⑥わたし。男が用いた自称。
⑦取り組んで、自分の下に押さえ込む。
⑧あなたさま。敬意をこめた言い方。

⑨それだけを一心に思っておりまして。

⑩ありがたく思います。

⑪あなた。敬意をこめた言い方。

⑫「八幡」は八幡宮のこと。八幡宮の若宮の意。八幡宮は源氏の守護神。

いつぞやの雨やどりに託言ばかり仰せられしを、誠と思ひ明け暮れと、恋い焦がるる悲しさに、とても叶わぬ恋ならば、御手にかかり死なんがため、これまで参り候に、まず自らを害して給わり候え」

と、抱きつきてぞ口説きける。

その時弁慶、

「さては御身は牛若子にてましますか。ここをゆるめて給われ申したき事の候」

「心得たり」

と牛若、引き起こして問い給えば、弁慶涙をはらはらと流し、

「あつぱれ牛若君にてあらずんば、それがしをかく組み敷くべき者覚え。愚僧は西塔の武蔵坊弁慶と申す者にて候。御身様にめぐり合はんそのために、この年頃心を尽くし候なり。家来になされ下されなば、かたじけなく存ずべし」

と謹んで申しければ、

「さては武蔵か、嬉しやな。我もおことを聞き及び、めぐり合わんと尋ねしに、これまたどうじゃ。若宮八幡のお引き合わせ

いつぞやの雨やどりに、ほんのしばらくお話しをしたではございませんか。以来、その言葉を頼りに、明け暮れ恋い焦がれておりましたが、どうせ叶わぬ恋ならば、あなたさまの手にかかって死のうと、こうしてやって参ったのです。弁慶様を討つ前に、まず私を討つてくだされ」

と、抱きついて訴えました。その時、弁慶が、「では、あなた様は、牛若様でしたか。しばらく、手をゆるめてくだされ。お話ししたいことがございます」

「わかった」

と牛若が弁慶を引き起こしてわけを聞きまして。弁慶は涙をはらはらと流しながら、

「なるほど、牛若君であれば、わたくしを組み敷くのも当然でございます。私めは、比叡山西塔に住む武蔵坊弁慶と申す僧でございます。あなた様にめぐり合うために、長年、苦勞をしてきました。ぜひ、家来にしてくださいませ。お願いでございます」

と丁寧にお願ひしました。

「おお、そなたが武蔵坊か。なんと嬉しいこと。わしも、そなたのことを聞いて、はやく会いたいとさがしておった。これは、どうやら、若宮八幡の神のお引き合わせであろう。

① 承知し。謙譲の言い方。

② 主君を敬って言う語。

③ ④ 日本の国土。
相手にするに十分力がある者。

⑤ けなげなようす。感心なようす。
⑥ おろかな僧。僧が自分を謙遜して言う語。
⑦ 間に立つて橋渡しする人。

⑧ 八幡神をまつた神社。欽明朝のときはじめて宇佐神宮に八幡神がまつられた。八五九年に清和天皇が岩清水八幡宮に分霊し、諸源氏の氏神として尊崇される。その後源頼朝が鶴岡八幡宮に分祀してから八幡信仰が全国の武士や庶民の間に広まった。

なり。家来となりて共々に、おごる平家を亡ぼすべき思案を頼む」

とありければ、弁慶「承り、

「御心安く思し召せ。我が君とそれがし、心を合わす程ならば、日本秋津島がその内に、手に立つ者のあるべきか。喜び給え、ごうの姫。志の殊勝なれば、愚僧が即ち仲人なり。主従夫婦の結びの神、まずまず当社へ参詣せん。いざこなたへ、こなたへ」

と、四人うち連れそれよりも、八幡宮へと参らるる。

まことに源氏の末繁盛。めでたかりとも、なかなか申すばかりはなかりけり。

ぜひ家来になつてくれ。そして、いっしょに、おごる平家を亡ぼすべき手を考えることにしようではないか」

この牛若の返事を聞いて、弁慶は、

「御安心ください。我が君とそれがしが心を合わせれば、この日本にかなうものがあるとは思えませぬ。お喜びください、午玉姫。そなたもまことに立派な心がけでいらつしやる。愚僧が仲人になりました。さあ、ここで、夫婦の契りをおすがよい。主従夫婦の結びの神に祈るため、まずは八幡宮に参詣することにした。さあ、こちらへ」

まことにこれで源氏の将来の繁盛は約束されたようなもの、なんともめでたいことになりました。

熊井太郎孝行の巻 二段

- ①さて。物語などの始まりの常套文句。
 ②国家が長く栄えるようにの意。
 ③ただとていく道。
 ④摂津国墨江郡(今の大阪府の一部)一带にあつた松林。歌枕。「心が澄み」をかける。

- ⑤京都市にある地名。
 ⑥淀川は琵琶湖を水源とし、桂川・木津川を合せ、大阪平野を流れ、大阪湾に注ぐ川。
 ⑦京都府八幡市の石清水八幡宮のふもとあたり
 の地名。淀川に臨む。
 ⑧なみひとりの。普通の。
 ⑨農作物がみならず、食物が欠乏して飢え苦しむこと。
 ⑩まわり全部。
 ⑪干上っているようす。
 ⑫(あるはずのものがなくて)心さびしい。
 ⑬こじき。
 ⑭茅(かや)や菅(すげ)などの茎や葉を編んで作った雨具。
 ⑮やしなう。
 ⑯歩くこと。歩行。

- ⑰うる。「つかれる」もうえる意。
 ⑱わめく。

- ⑲あきれるほどの。ひどい。
 ⑳人間世界。

- ㉑泣きながら。
 ㉒自分の手で。
 ㉓善根・功德のために僧や貧しい人々にものをほどこす。
 ㉔「ひく」は行なう意。
 ㉕慈善を行ない、金品をほどこすこと。

①さるほどに小松の内大臣重盛は、国家長久御世万歳の祈りのため、路次の行列さわやかに、君が心も住吉の、松に花咲く藤の森、淀の川波うち渡る、橋本辺に着き給う。御乗り物の簾をかかげ、世の有様を見給うに、ただ大方の飢饉ならず。四方の景色もかれがれに、人の心も何となく、いとそうぞうしき風情にて、野に伏したりし乞丐人、あるいは腰に蓑を巻き、石を枕に伏すもあり。老いたる親を肩にかけ、盲目たる夫を育む女もあり。腰抜け足立たず、行歩かなわぬ輩ども、道の巷に伏しまるび、飢えにつかれておめく声、哀れというもあまりあり。

重盛つくづくと御覧じて、

「さて、あさましき人界かな。これと言うも天下の政道おろそかなるゆえ、かかる嘆きを見ることよ」

と、涙ながらに御袖の下よりも、金銭銀銭取り出させ給い、手づから施行をひかせ給えば、「あら、ありがたの御報謝や」と、

さて、小松の内大臣重盛は、この国が長く久しく栄えていくようにとの祈禱をするために、はなやかな行列をつらね、住吉神社に参詣しました。藤の森を越え、淀川を渡って、橋本の近くに到着しました。そこで乗物の簾をあげ、世の有様をがらんになりましたが、あたり一带は、飢饉のために、疲れきっております。人の心も何とはなしにものさびしい様子で、野に伏す乞食がいたり、蓑を巻いて石を枕にしているものがあります。年老いた親を肩にかけ、目の見えなくなつた夫を世話している女もいます。腰が抜け足が立たなくなつて、歩けぬのたちは、道のはしに横になつており、飢えつかれて、うめき声をあげています。そのさまは、あはれともなんとも、言いようがありません。

重盛公はその様子をじつと御覧になつて、「なんとあさましいことではないか。天下の政治がうまくいっていないために、民百姓がこんなにも苦しむことになるのだ」と、涙を流し、御袖の下から金銭や銀銭を取り出して施しをしました。それをいただいた人々はみな、

「あら、なんとありがたいこと」と、重盛を拜んでおりました。

- ①元気がなく。
- ②紙で作った衣服。厚手の和紙に柿シブを引いて乾かし、揉んで柔らかくして作る。
- ③屋根のついた箱形の座席に人を乗せ、底面に取り付けた二本の長柄を肩にかついで腰のあたりで支えたりして運ぶ乗物。

- ④おそれ多いことですが、身分の高い人に意見を述べるときなどに使う。
- ⑤政治を行っている身分の高い人。
- ⑥訴えること。

⑦皆まで聞かず。

⑧無礼だ。

⑨大勢が押し合って騒げば。

- ⑩乱暴。
- ⑪おのおのがた。みなさん。
- ⑫判断力がない。
- ⑬年長の人を父母のように尊び、若い人には親切にするのがよい。『礼記』の言葉による。

- ⑭昔の人。
- ⑮鎌倉時代、遠国の重要な地に置かれた役所の長官で、行政・裁判・軍事に権力をふるった。
- ⑯呼び寄せなさい。自尊敬語。

⑰…なさり。尊敬を表わす補助語。

おが 拜まぬ者こそなかりけれ。

かかる所へ年の頃六十路に余る老人、しおしおとちぎれ紙衣の裾を結んで肩にかけ、幼き若の手を引いて、御輿近く立ち寄り、

「おそれながら上へ御訴訟申したき事の候。御取り次ぎ頼み奉る」

と申しければ、侍ども聞きもあえず、

「やあ、推参なり。乞丐人の風情にて御前近く立ち寄るは何事ぞ。それ討ち払え」

とひしめけば、重盛聞こし召され、

「やれ、狼藉なり、方々。見れば一人は老人、一人は東西わかぬ幼子なり。老いたるを以て父母とうやまえ、幼きを見て哀れむべし。これ古人の言葉なり。その上探題と見て訴訟せんと言を叶わぬと言は、これ誤りなり。それ、近う召せ」とあり。

かしこ 畏まつて御前に出す。

しげもりたいめん 重盛対面ましまし、

そこへ、年の頃は六十をこえた老人が、ちぎれた紙衣のすそを結んで肩にかけ、小さい子の手を引きながら、重盛の乗っている輿近くにやってきました。

「おそれながら、訴えたいことがございます。お取り次ぎをお願いいたします」

と言いましたが、侍たちは取りあわず、

「無礼なやつ。乞食のなりをして、重盛公のそば近くに立ち寄るとは何事。すぐに追い払え」

と騒ぎたてました。すると、重盛は、その声をお聞きになり、

「これ、乱暴をしてはならぬ。見れば一人は老人、一人は幼い子供ではないか。年取った人は、父母と思つて敬い、幼い子は哀れまねばならぬと古人も言っているではないか。しかも、われら一行が六波羅探題の役人だと見て訴えようというのに、なぜけしからぬという。おまえたちは、間違つておる。その老人をここへ呼べ」

と家来を叱りました。そこで、老人がかしこまつて重盛の前に出ますと、重盛がじかに対面します。

①うやうやしく。

②そのことでございます。待ち受けていた質問に答えるときの言葉。

③私。

④主家を去り、禄を失った武士。

⑤でございます。「ある」の丁寧語。

⑥以前相当な身分だったのに落ちぶれてみずばらしくなつて。鷹が尾羽をいたためみずばらしくなることから言う。

⑦毎日の暮らし。生計。

⑧つらい。

⑨いつ死ぬかわからない。

⑩大切に取扱うこと。

⑪他人の親切な心という尊敬語。

⑫代金。

⑬目上の人に申上げること。
⑭ひらいて見ること。

⑮京都三条の刀工。平安・中世初期の代表的名工として知られる。謡曲「小鍛冶」は宗近が一条天皇の宝刀「小狐丸」を鍛えたことを題材にする。

⑯打ちたえた武器。ここでは刀。

⑰干将は中国古代の呉の刀工で、莫耶はその妻。干将・莫耶の二名剣を制作したという。

⑱平宗盛の所有する名刀の名。のち家来の平悪七兵衛景清に譲られる。

⑲身につけている。

⑳名刀の名。桓武天皇の時代、大神宮（伊勢神宮）から遣わされた八尺余りある大鴉の羽から出てきたという。後に平将門・藤原純友らの反乱鎮圧に向かう平貞盛が天皇から与えられ、以後平家一門の重宝となった。

㉑すばらしい。

㉒貴重な宝物。

㉓きつと。

㉔由緒ある。

㉕せつばつまったこの時。

「いかに老人、訴訟とはいかなる事ぞ」

①つつし
②謹んで、

「さん候。それがしはこの辺りの浪人者にてござ候。長々尾羽

を打ち枯らし、朝夕の営みさえ絶え間がちなる憂き身の上に、

子を二人持つてござ候が、一人は存命不定に相思い申すにつ

け、何とすべき様もござなく候。数代身を放たず、重宝仕り

候えども、この太刀を君へ差し上げ奉らん。御芳志に価を下し

給わりなば、ありがたく存じ奉るべき」

と、涙とともに言上す。重盛、この太刀を取つて御披見ある

に、

「三条小鍛冶宗近が打ち物。干将莫耶が打ちたる剣か。今当代

にしては、右大将宗盛のあざ丸か。我今ここに帯したる小鳥と

いうとも、これにはいかでまさるべき。あつぱれゆゆしき重宝

や」

と褒めさせ給いて、

「いかに老人、その方この太刀を持つこと、いかさま故ある浪人

ならん。尋ねたきものなれども、この期に及んで問うとも言う

「ご老人、訴えとはどういうことじゃ」
老人はかしこまって申し上げました。

「はい。私は、この近くに住む浪人者でございます。長年の貧乏暮らしで、朝夕の食事さえ満足にはできない暮らしですが、二人の子を持つております。ところが、その一人が病にかかりまして、困っております。そこで、

代々我が家に伝わってきた宝ではございますが、この太刀を重盛様に差し上げたいと思

います。そのお志として、なにがしかの金子を

いただけるとありがたいのでございますが」

涙ながらに申し述べる姿に心を打たれた重盛

は、この太刀を取つてじっくりとながめまし

た。そして、

「これは、三条小鍛冶宗近が打った刀。干将

莫耶が打った剣にも劣らぬ名剣じゃ。当代で

いえば、右大将宗盛の持つてあるあざ丸や、

いまわしの差している小鳥にまさるとも劣ら

ぬほどの名剣じゃ」
とお褒めになり、

「ご老人、そなたがこの太刀を持つていると

は、どうやらわけのある浪人であろう。その

わけを尋ねたいところであるが、いまいくら

尋ねたとて、答えはすまい。

①身にしてみてもありがたいことに。
②貨幣の単位。

③慈悲は主人や目上から下さるものである、の意。

④旧国名。今の岐阜県の南部。

⑤人前をはばからず、勝手気ままにふるまうこと。

⑥きわめて都合のよいこと。

⑦「うばいとる」の略。
⑧あつぎとなる子。
⑨追っかけ。
⑩文句を言うようなら。
⑪はやくはやく。「とく」は「はやく」の意。

まじ。かく貧しくなるまでも携えたる太刀なれば、さこそ惜しくや思わらん。御子どもにも譲りたからん。価を何ほどにても得さすべし。刀はその方所持すべし」

と、かたじけなくも御手ずから、黄金十両賜わりけり。

老人、「あらかたじけなし」と押し戴き、

「慈悲は上から下さるとは、かかる事をや申すらん。ありがたし、ありがたし」

と、孫の手を引き立ち帰れば、はや御輿はそれよりも、住吉さしてぞ急ぎける。

これはさておき、御供のその中に、美濃国の住人関ヶ原の与市とて、傍若無人の悪人なるが、この有様をつくづく見て、家来の者を密かに招き、

「ただ今の素浪人が持ったる太刀は、まさしく小鍛冶が打ち物と仰せられし。これ究竟の事にてあり。我当家に名を振るうといえども、未だよろしき太刀を持たず。この刀を奪い取りて、嫡子犬ぼうに得さすべし。急ぎばっかけ奪い取るべし。異議に及ばば踏み殺せ、はやとくとく」

そこまで貧しくなっても持ち続けていた太刀であるから、手放すのはさぞ惜しいことであろう。また、子どもに譲りたいとも思っている。金子の方はいくらでも渡してやるが、刀はそなたが持っているがよいぞ」というありがたい言葉に加え、手ずから黄金十両を渡してくださったのでした。

老人は、

「ああ、かたじけないことでございます」と押しただき、

「慈悲は目上の者から下さるとは、こういうことをいうのでしよう。ありがたいことです」

と、孫の手を引いて、帰っていきましました。重盛の御輿も、そこから、住吉神社をさして急いだのであります。

さて、このときの御供の行列のなかに、美濃国の住人関ヶ原の与市という、気まま放題の悪者がいました。この様子を見て、家来の者をこっそりと招きよせ、

「あの素浪人が持っている太刀を、重盛公はまさしく小鍛冶が打った刀とおおせられたはず。これは好都合じゃ。わしは、平家方では少しはその名を知られているとはいえ、まだよい太刀を持っておらぬ。あの浪人の刀を奪い取って、息子に持たせることにしよう。急いで追いかけてゆき、奪い取ってこい。抵抗したら、踏み殺せばよい。さあ、はやく行け」と言いつけました。

①命知らず。
②世間や組織の枠に収まらない者。ならず者。

③主君の命令。

④不服を言うなら。

⑤納得できない。

⑥そのうえ。悪い事柄を累加する気持ちで使うことが多い。

⑦ほったらかして。無視して。
⑧武士の従者。若い。屈強の侍。

と言いつければ、^①死生知らずのあぶれ者ども、^②何のわきまえもなく取って返し、

「いかにそれなる乞^{こつ}丐^{がい}人。御上意^{ごじようい}なるに、その太刀も、黄金もろとも、この方へ渡すべし。異議^{いぎ}に及ばば切^きって捨^すてん」とひしめけば、老人^{ろうじん}聞いて、

「こは心得^{こころえ}ず。まさしく上より一たび下し賜^{たま}わるこの黄金^{おうごん}を戻せとや。あまつさえ我が太刀^{たち}を渡せとは心得^{こころえ}ず」

と打ち捨^すてて行^ゆかんとするを、若党^{わかつう}ども飛^とびかかり、

「ええ、推参^{すいさん}なる老いぼれめや」

と、踏^ふみ倒^{たお}し押^おし伏^ふせ、刀^{かたな}を取^とって刺^さすもあり、懐^{ふところ}押し分け黄金^{おうごん}取^とって握^{にぎ}るもあり。「こは狼藉^{ろうぜき}や」と、起^おき上^あがらんとし給^{たま}えば、またたき伏^ふせ、散々^{さんざん}に打^うちさいなみて帰^{かえ}りしは、さて情^{なさ}けのうこそ見^みえにけれ。

無残^{むざん}やな。幼^{おきな}き者^{もの}、何^{なに}のわかちもわきまえず、

「のう悲^{かな}しやおおじご様^{さま}、起^おきさせ給^{たま}え」

と泣^なきかかれればいたわしや、おおじごはようよう起^おきて見^み給^{たま}えば、髪^{かみ}はあらわにひき乱^{みだ}れ、紙^{かみこ}子の裾^{すそ}も引^ひきちぎれ、

命知らずのあばれ者たちは、言われたとおり引き返し、

「その乞食^{こじき}、御上意^{ごじようい}によって、その太刀も黄金^{おうごん}もわれらに渡せ。言うことを聞かぬと切^きってしまふぞ」

と叫^こびました。老人^{ろうじん}はこれを聞いて、「これはなんと、わからないことをおっしゃるのですか。まさに、重盛^{じゅうせい}様よりありがたくくださったこの黄金^{おうごん}を戻せというのですか。そのうえ、私の太刀^{たち}を渡せとは、納得^{なつとく}できませぬ」

と、無視^{むし}して行^ゆこうとするのを、家来^{けらい}たちが飛^とびかかり、

「ええ、生意気^{せいき}な老いぼれめ」

と、踏^ふみ倒^{たお}し押^おし伏^ふせて、刀^{かたな}を取^とりあげ、懐^{ふところ}を引きあけて黄金^{おうごん}をとりだしました。

「これはなんと乱暴^{らんぼう}な」

と、起^おき上^あがろうとしましたが、さらになぐりつけ、散々^{さんざん}に打^うちつけて帰^{かえ}っていききました。なんともかわいそうな有様^{うさま}でした。

幼^{おきな}い孫^{まご}は、何がどうなったかもわからず、「あれ、かわいそうに、おじいさま。起^おきてください」

と泣^なきながら、声^{こゑ}をかけます。老人^{ろうじん}はなんとか起^おきあがりましたが、髪^{かみ}は乱^{みだ}れ、着^きていた紙^{かみこ}子の着^き物の裾^{すそ}も引^ひきちぎれています。

⑩痛ましいことだ。

⑪おじいさま。祖父^{そふ}の意^いの「おおじ」に敬意^{けいぎ}を表^{あらわ}す。「い(御)」「様」の付^ついた語。

① ゆかり。手づる。

② 「しのぐ」はのりこえる意。

③ 病氣。

④ はれやかに。

⑤ 奥方。社会的に地位のある人の妻に用いる語。

⑥ 言い終わらないうちに。
⑦ 榮えていた。

⑧ ともに高級な織物。

に見えけれども、医療にかからんにも人家へだてて便りなし。山嵐をしのがんにも、衣薄くて防がれず。あるに甲斐なき世の中を、恨みて暮らすぞ哀れなり。

かかる所へ弟の喜三太、たきぎを取りて山より帰り、庵の内へつと入り、兄が枕に立ち寄りて、

「今日の違例はいかが渡らせ給うぞ」

と問いければ、太郎左衛門枕をもたげ、

「いついつよりも今日は違例もようやく軽く覚ゆる。心安く思われよ」

喜三太承り、

「まことに御顔色、今日はいつに変わりてうるわしく見え候。

して父上や御内方はいづくへ行かれ候ぞ」

「されば父上は、小松殿今日この街道を通り給うと聞き、辰若に行列を見せんため連れ行き給う。また女房は今日の営み整えんと、とくより出しが未だ帰らず」

と、言いも果てぬに、いたわしや、すさきの前、世にありしその時は、ただかりそめの物詣でも、綾や錦を身にまとい、花

病に伏せつていて、命もあぶないくらいなのですが、医者にかかろうにも、人里離れた田舎です。呼びようがありません。山から吹き下ろす嵐をしのぐとしても、薄い衣では防ぎようがありません。ほんとうに心細い生活で、ただ、世を恨んで暮らすしかないでした。なんともあわれなことであります。

そこへ、弟の喜三太がたきぎを取って山から帰ってきました。庵の内へ入り、兄の枕元に立ち寄って声をかけます。

「兄者、病氣の具合はどんなものじゃ」

と問いますと、太郎左衛門は枕から起き上がり、

「今日は少し軽くなったように思われる。安心してくれ」

という返事。喜三太はそれを聞いて、

「ほんとうに、顔色はいつもよりもいいように見えますなあ。ところで、父上や奥方はどこへ行かれましたか」

「父上は、小松の内府重盛殿が今日この街道をお通りになると聞いて、孫の辰若に行列を見せようと連れて行きました。また、女房の方は、今日の食事の準備に早くから出ておつて、まだ帰らぬようじゃ」

と、言い終らぬうちに、妻のすさきの前が帰ってきました。以前は、ちよつと外出するにも綾や錦を身にまとい、花と呼ばれたもので

①「帷子」は夏用のひとえの着物。

② 禪に帰依して悟るところがあつたという女性父の留守を言葉で言わず、野菜籠を持って立ち去ることで示したが、不完全な言葉でなく全身の動作で事を示すという禪の精神を表したものだということ。
③ 目のあらい竹籠。

④ ひきとめて。

⑤ 髪を切り払いなさり。髪はかもし(そえ髪)などの材料として売ることができた。

⑥ 思いがけないことに驚き、その場が急にいらけてしまうこと。

⑦ 声高に。
⑧ おつしやるな。「み：そ」は禁止、「のたまう」は「言う」の尊敬語。

⑨ 具合が悪いことです。

⑩ たて。軽いつつ方法。
⑪ あなた。軽い敬意を含む。
⑫ 私。
⑬ なさげなく。やるせなく。

⑭ 髪がたくさんある意。
⑮ お金にかえ。売り。

と呼ばれし身なれども、今は貧者の身となりて、上帷子の裾か
らげ、手には小袋たずさえて、庵に帰る有様は、かの唐土の
靈照女、目籠を市に運びしも、かくやとばかり思われて、い
とど哀れに見えにけり。

喜三太迎いに立ち出て、

「遅く帰らせ給う。今日は兄友治の違例も軽く候えば、喜び給
え」

とうち連れて、庵の内へ入り給う。後姿をつくづく見て、喜三太
御袂を控え、

「のう、見れば御髪扱わせ給うが心得ず。何ゆえ切らせ給うぞ」
と、興ざめ顔に問いければ、姫君小声になりて、

「のう、音高くなのたまひそ。語るにつけても便なやな。もは
や今日の煙を立つべきようもなし。御身様や自らはいかにもし
て暮らすべきが、おおじご様や辰若があじきなく思し召さば、
さぞや夫の友治殿、いとど病氣も重るべきかと、これのみ悲し
う候いて、明け暮れ千筋と思しい髪を、商人に代なし、今日の
営み整え候。不憫と思し召せや」

したが、いまはこうして貧しい身となつてしま
いましたので、上着の裾をからげ、手には
小袋を持ち、庵に帰る有様は、目籠を売つて
父に尽くしたという唐土の靈照女の姿を思わ
せませす。その貧しい有様はなんともあわれに
見えました。

喜三太はすぐに迎えに出て、

「お帰りが遅かつたようですね。兄者の具合
は、少しよいようです、お喜び下され」

と連れだつて、庵のなかへ入りました。その
後姿を見て、喜三太はすすきの前の袂を取り、
「髪をお切りになつたのですか。なにゆえ、
お切りなされた」

と、あきれた顔で聞きました。すすきの前は
小声になり、
「そんなに大声を立てないでください。わけ
を話しますから、静かに聞いてください。今
日はもう炊く米もなくなつてしまいましたの
で、私やそなたは、どうにでも我慢するとし
て、おじいさまや辰若がひもじい思いをする
のがつらく、それを聞けば夫友治殿の病も重
くなると思ひ、それが悲しさに、明け暮れ大
切にしてきたこの髪を、商人に売つて金に換
え、こうして今日の食事を整えたのでござい
ます。不憫と思つてください」

①…することができない。

②心中の思いをこまごまと述べて訴えること。

③とんでもないと思う様子。

④ようす。ありさま。
⑤重いものが倒れる音を表わす。
⑥坐つて。
⑦すっかり途方にくれてしまう。

⑧くわしいわけ。

⑨くわしく。

⑩その場ですぐに。

とて、たださめざめと泣き給う。喜三太暫くむせ返り、

「ええ、さて無念や。かくまで衰うものか。さて熊井ゆうけんと呼ばれし者の、その子供らが、親一人を育みかぬるのみならず、我々が身の上さえ暮らしかねたる。あさましや」と、口説き立ててぞ泣きいたり。

かかる哀れの折りふしに、父のゆうけん孫の手を引き、興がる体にて立ち返り、庵の内へつと入り、

「やれ子供ども、さてさて無念や。熊井の家もこれまでなり。

この老いの身の姿を見よ」

と言ひ捨て体はどうどいて声を上げてぞ泣き給う。三人の人々も互いに目と目を見合わせ、何とも物を言わずして、ただ呆れ果てたるばかりなり。

ややありて太郎左衛門起き直つて、

「いかに父上様、これは何とも心得ず。仔細を語らせ給え」

とある。ゆうけん涙を抑え、始め終わりをつぶさに語り、

「当座に死なんと思いつれども、この子が迷わん不憫さに、これまで帰りてありけるぞ。もはや生きてはいられまじ。覚悟せ

とさめざめと泣いておりました。喜三太もしばらくせき上げながら、

「なんと無念なこと。ここまでおとろえてしまふとは。かつては、熊井ゆうけんと呼ばれた者の子供が、親一人はおるか、わが身ひとりさえ暮らしかねる身分に落ちぶれてしまふとは、なんとあさましいこと」と、泣いておりました。

そういうあわれな話をしているまさにそのとき、父のゆうけんが孫の手を引いて、驚きあきれた様子をしてもどつてきて、庵のなかへ入るや、

「やあ、息子たち、ほんとうに無念なこと。熊井の家もはやこれまでじゃ。この年寄りのざまを見てくれ」

と言ひ捨て、どんとその場にすわり、声をあげて泣いておりました。その姿を見て、三人は互いに目を見かわしながら、何にも言えず、ただ途方に暮れるばかりでした。

やがて、太郎左衛門が起きあがり、
「父上、どうなさいました。なにがあつたのか、くわしく話してください」

といいました。ゆうけんは涙をこらえつつ、事の次第をくわしく語り、

「そのときは、すぐにも死のうと思つたが、この子を放り出してしまうのが不憫で、こうして帰ってきたのじゃ。が、もう、わしは生きてはいられぬ。覚悟してくれ、息子たちよ」

①よく理解できず。腑に落ちず。

よ子供^{こども}」

とて、またさめざめと泣き給う。友治も思案に落ちず、しばし物も言わざりし。その時喜三太つと立ち上がり、物も言わずかけ出ずる。友治続いて引きとどめ、

「やれ待て喜三太。いづくへ行くぞ、心得ず」

とのたまえは、

②貴人のおことば。ここは兄の言葉をさす。

「愚かの兄御の御諛やな。現在の親をあのごとくにさいなませ、

③恥知らずに平気でいるようす。
④やつら。多人数の人をいやしめて言う語。

おめおめとあられんや。その重盛の家来の奴ばら、片つ端より

⑤うらみ。

なで斬りにし、この存念を晴らすべし。そこ退き給え」

⑥無理やり。

とかけ出ずるを、是非にすがって引きとどめ、

⑦あなた。やや目下の相手を親しんで呼ぶ語。

「まず心を静めて物を聞け。もつともおことが勢いにては、千

⑧しかしながら。

に一つも本望遂ぐることあらん。さりながら思うて見よ。その

⑨無駄死に。

大勢の中へ汝一人切り込みなば、狼藉者としてかえつて犬死に

すべし。それにつけてはよきことあり。それがし次第にいたす

べし」

⑩無理に。

と無体に引きとめ、父の御前に畏まり、

⑪おはらだち。腹を立てること。機嫌が悪くなること。

「いかに父上様。御腹立はごもつともにてござ候。しかしなが

と、またさめざめと泣くのでした。

友治もどうしたらいいかわからず、しばし黙っておりました。その時、弟の喜三太がつつと立ち上がり、物も言わずにかけ出ていきました。友治はあとを追って引きとどめ、「やい、ちよつと待て、喜三太。どこへ行くのじゃ」

と聞きました。

「なにを愚かなことを聞く。自分の親をあのようにひどい目にあわせられて、おめおめと見過していられようか。その重盛の家来どもを片つ端から斬りにして、この恨みを晴らしてやるのだ。そこをどいてくれ」

と言ってまたかけ出そうとするのを、無理にすがりついて引きとめ、

「ちよつと待て。気を静めて言うことを聞け。その勢いで行けば、たしかに狼藉者の一人や二人なら斬って捨てることもできよう。が、考えてもみよ。大勢の中へそなた一人で切り込んでいけば、狼藉者呼ばわりされて、犬死するだけのことだ。が、実はな、よい話があるのじゃ。その話を聞いてから、どうするか考えようではないか」

と引き止めてから、父の御前にかしこまって言いました。

「父上。御腹立はもつともでございますが、

① 間もなく。すぐに。

② 源義朝のご息。「左馬頭」は源義朝をさす。「公達」は身分の高い人の息子。

③ 正義のために起す兵。

④ ことのおもむき。

⑤ めでたいしるし。きざし。

⑥ 地方から都へ行くこと。

⑦ 知らせ。

⑧ おわかれの御挨拶を申し上げます。

⑨ そうですか。「まします」は「ある」の尊敬語。

⑩ はっきりとした理由がない。

⑪ うまくことを運びなすつて。「遊ばす」は「する」の尊敬語。「候う」は丁寧語。

⑫ 頼もしくも。

⑬ 貴人の奥方をさす言葉。

⑭ だれ。

⑮ 「思い立ち」の敬語表現。

ら、ことのほか良き事の候いて、追付け恥をすすぐべき事のご
ざ候。御心安く思し召せ。仔細は今日いづれもお留守のうちに、
都より左馬頭殿のご公達、義兵を挙げらるるが、数代源氏の侍
なればとて、それがしをも召し寄せらるべき旨申し来たり候。
これまた運を開くべき瑞相。急ぎ都へ上り、はなばなしく戦を
し、おごる平家を亡ぼしなば、たちまち恥辱をすすぐべし。そ
の上都より追付けめでたき左右を仕るべし。いかに女房、そ
れまでは貧しくとも父上や辰若をいたわり給え。いとま申す」
とありければ、父ゆうけんもすさきの前も、
「さてはさにてましますか。それとも知らでよしなき腹を立つ
るよ。のう友治殿。後の事は御氣遣いなく。首尾よく遊ばし候
いて、めでたき左右を待ち奉る」
と、かいがいしくも北の方、父上や辰若の手を取りて、奥に入
らせ給いければ、友治・喜三太兄弟は、都の方へと上らるる。
さるほどに、道にて喜三太兄友治に向かい、
「義朝の御子にては、誰人の思し召し立ちにて候ぞ。仔細を語
らせ給え」

実は、よい知らせがまいっておるのです。今日
の恥も、追っつけ晴らすことができようか
と思っておりますので、御安心ください。と
いいますのも、父上も弟も留守のときに、都
より左馬頭殿の公達の使いが参られ、兵を挙
げられるとのこと。わが家も代々源氏方の侍
ゆえ、私をぜひ召し寄せたいということでご
ざいました。これは、われらの運が開ける吉
報ではございませぬか。急ぎ都へ上り、はな
ばなしく戦をして、おごる平家を亡ぼしたな
らば、今日の恥はすぐに晴らすことができる
はず。そうすれば、都から、めでたい知らせ
をお届けすることもできます。女房よ、それ
までは、貧しくとも父上や辰若をいたわって
くださいよ。では、さらばじゃ」
父ゆうけんもすさきの前も、
「そういうことでございましたか。それとも
知らず、無駄に腹を立てたことよのう。なあ、
友治殿。あとの事は御氣遣いなく。首尾よく
手柄をあげて、よい知らせを聞かせてくださ
れ。待つておりますぞ」
と納得し、北の方はいがいしい様子で、父
や辰若の手を取って、奥に入っていました。
さて、友治・喜三太兄弟は、勇躍、都へと
向かっていきましたが、その途中、喜三太は
兄の友治に向かって、
「義朝の御子のあなたが兵を挙げるとい
うのだ。くわしい話を聞かせてくれい」

① どうして。

② わけ。

③ うっかりと。

④ 人を殺して財産を奪うこと。強盗。

⑤ 念を押す意を表す。

⑥ 富。財産。

⑦ 大金持ち。

⑧ 尊敬されるだろう。

⑨ 住吉神社をさす。

⑩ 神前に幣をさしあげること。「幣」は木綿・麻・白紙などを細く切つて束ねたもので、木の柄を付けることもある。

と言う。友治うち笑い、

「おろかなり喜三太。何しに左様のことのあるべきぞ。それがし都へ上るいわれを語って聞かすべし。心を静めてよく聞き給え。そもそも今日日本にて、小松の内大臣重盛と呼ばるる程の人の家来が、かかる狼藉振舞う上は、世ははや乱れに及びたり。しかるを我々おろかにも政道守り、うかうかと貧しく暮らさん様もなし。都へ上り、行き来の者を切り取りせん。あわれ運尽きて、小松殿の前へ引き出されよかし。この存念を言いて晴らさん。もししおおせなば、徳付きて大福長者と仰がれん。良き事ありとはこの事ぞ」と語り給えば喜三太うち頷き、

「まことに仰せのごとく我々兄弟切り取りせば、恐らく一夜のうちにはゆゆしき長者となり申さん。急がせ給えや兄上」

「心得たり」

と兄弟ともにうち笑い、力足を踏み鳴らし、勇みに勇んでそれよりも、都をさしてぞ上りける。

これはさておき、重盛は明神の御前にて数の奉幣捧げられ、

と聞きました。ところが、友治は笑って、

「おろかことを言うな、喜三太。そんなことが本当にあると思うか。われらが都へ上るための方便に決まっておる。本当のところを話すから、心を静めてよく聞け。そもそもいまの日本で、小松の内大臣重盛と呼ばれるほどのお方の家来が、こういう乱暴狼藉をはたらくようでは、いまの世はもう乱れきつていくということだ。なのに、われらがただ御政道に従い、今までどおり貧しく暮らしていてもしょうがないではないか。都へ上り、往來の者から奪い取つてもよし、もしそれで、運が尽きて、小松殿の前へ引き出されたならそれまでのこと、こちらの思いを腹いっぱい申し上げるまでのことじゃ。もし、うまくいけば、金もうけができて大福長者といわれるようになるかもしれない。いいことがあると言つたのは、そういうわけじゃ」と語りました。喜三太はうなずき、

「たしかに、兄上の言われるように、我々兄弟で切り取り強盗をやれば、おそろく一夜のうちには大長者となりましょう。では、急ぐことにいたしましょう、兄上」

「ようし、心得た」

と兄弟はともに笑いながら、足を踏み鳴らし、勇みたつて都をさして上つていったのでした。

さて一方、重盛公は住吉明神におつきになり、その社殿で数々のぬさを奉納し、

- ① 神を慰めるための歌舞。
 ② 神へ祈って願ったり誓ったりすること。
 ③ ひっくりかえし。
 ④ すな。

はやお神楽を奏せられ、様々ご祈誓ある所に、にわか四方の景色ひき変わり、大波打って海上を覆し、浜風砂子を吹き散らし、大地揺るぎ鳴動し、明神の神木・並木の松に至るまで、皆ことごとく吹き折れて、天地も崩るるばかりなり。折節御前には筑後の守定能ありしが、

「これは興がる事どもかな。昔よりめでたき事のためしには住吉の松をこそはひかれしに、かかる事は何事ぞ。よからぬ事」と言いも果てず、各々「これは」と肝を消し、途方に暮れたるばかりなり。

その時、

神主御前に畏まり、

- ⑤ ひどく恐れること。
 ⑥ この家。平家をさす。
 ⑦ さわりがあり忘むべきこと。

「これひとえに当家の禁忌と存じ候。今一度願書を込められ、神を涼しめ奉らん」

- ⑧ 動揺なさらず。おそれあわてることはなさらず。

- ⑨ 愚かなことこの上ない。
 ⑩ 神の配慮

と口を揃えて申さるれば、小松殿少しも動じ給わず、「いやいや、さにてはなし。これ程まで正しき告げを目のあたりに見ながら、かえって嘆くは愚痴の至り。殊には神慮に背くなり。我かねがね欲するところ少しも違わず。平氏の家名これまでなり。必ず嘆くべきにあらず。成程家来の者どもも、勇

神楽を催され、あれこれとお祈りをしておりました。と、にわか四方の景色がうつつかわったようになり、大波が海に逆巻き、強い浜からの風が吹き散りました。大地は揺らぎ鳴動し、住吉明神の神木から並木の松に至るまで、すべての木々がすべて吹き折れてしまい、天地も崩れるかと思われるほどです。ちようど、重盛公の前には筑後守貞義がおりました。

「これはおかしなことがあるものでございませぬ。昔からめでたいことしるしに、住吉の松が生え、伸びていくことはいいます。これはなんでございませぬ。よくないことでございますな」

と言いつつ、途方に暮れているばかりでした。

その時、神主が重盛公の前に進み出て、「これは平家の不吉です。もう一度、心をこめてお祈りをなさってください。なんとか神のお心を鎮めたいと思っております」

と口を揃えて申しあげましたが、小松殿は少しもさわぐ様子を見せずに答えました。

「いやいや、気にせずともよい。これほどまでに正しい神のお告げを目のあたりに見ているが、嘆いたりしてはみつももない。これは神の深い配慮であります。私がかねがね思っていたところと少しも違つてはおりませぬ。平氏の家はどうかこれまで、ということのようです。嘆いてはなりません、皆の者。」

- ⑪ できるだけ。

① いっそう。

② すばらしい。

みをなして帰るべし」

と、一しおご機嫌よろしげにて、御乗り物に召されける。小松殿の御心底、あっぱれゆゆしき大将やと、皆感ぜぬものこそなかりけれ。

勇んで帰るのじゃぞ」

と、来たとき以上に機嫌のいい様子で、乗り物に乗って帰っていきました。小松殿の御心の内はまことに立派な大将にふさわしいと、感心しないものではありませんでした。

熊井太郎孝行の巻 三段

- ①さてその後。場面転換の言葉。
- ②一七八年。
- ③十二月の異称。
- ④上方では十二月十三日に正月の準備を始めること。
- ⑤正月の初子（ね）の日に蚕室を掃くのに用いたほうき。いくつもの小さな玉飾りをつけたもの。
- ⑥神の心を慰めるために清めること。
- ⑦正月に初めてかまどを使って煮炊きをすること。
- ⑧祝いの儀式。
- ⑨旧国名。今の大阪府南西部。
- ⑩大阪の住吉神社へのお詣り。前段参照。
- ⑪京の市中の物見高き口さがない、無頼の若者ども。うわさ、またそれを歌の文句などにして流す者たちと考えられていた。
- ⑫くりかえし言われる歌や言葉。

- ⑬源義経の従者。初段参照。
- ⑭源家の嫡流の子息の敬称。源義経のこと。

- ⑮自分の主人を敬愛をこめて呼ぶ語。
- ⑯めでたいしるし。
- ⑰意味内容。
- ⑱かくかくのとおり。話の内容を省略するときの言葉。

- ⑲すべてをくわしく。
- ⑳私。

かくてそののち、治承二年極月十三日。明けゆく春の事始めとて、都には上下万民もろともに、年も若やぐ玉はばき、すす取るかまどのはらいを清め、神涼しめの竈始め。その寿数々なり。しかるに今度小松の重盛、泉州住吉詣での折節、神前にて様々凶事ありし事、都に隠れなかりしかば、京童の口すさび、いかなる事かあるらんと、老若男女もろともに、こぞつて恐れをなしにけり。

武蔵坊弁慶この由を伝え聞き、急ぎ御曹司の御前にかしこまり、

「いかに我が君、いよいよ源家運を開くべき瑞相まさに現れたり。意趣はかようかよりの次第にて候」と、始終をつぶさに御物語し、

「この上にてそれがしがいよいよ味方に力をつくべき思案を出し申して候。これこれ御覧候え」

さて、治承二年十二月十三日、新年を迎えるための「春の事始め」の日、都では上下万民総出で、すす払いや、かまど払いをし、しめ縄をかけたりにして、忙しく立ち働いていました。しかし、小松殿重盛が住吉大社に詣でた折に神前で見た様々の凶事のこととは都じゅうに広まっていますので、都の人々は、どんなことが起こるのであろうかと恐れおののいて過しておりました。

武蔵坊弁慶は、この話を聞きつけると、急いで御曹司の前に行き、

「我が君、いよいよ源氏の家運が開けるといいうしるしがあらわれてきましたぞ。というのも、これこれこういう話を聞いたのでございませう」と、事情を話し、

「そこで、この機に乗じて、源氏方のものを力づける方法を考えてみました。どうか御覧ください」

- ①立て札。板札に法度(はつとこ)や掬(おきて)などを記し、人目を引くところに高くかかげた。
 ②時事や人物を諷刺・嘲弄した匿名の文書。人目につきやすい場所や権勢家の門などに貼り付けたり、道路に落としておいたりした。
 ③『太平記』巻三十に見える歌。平家の時代が長く続かない証拠としてこのまゑ住吉の松が折れたのです、の意。『詞花集』巻五の「君が代の久しかるべきためしにや神も植ゑけむ住吉の松」を踏まえた歌。
 ④屏中門が崩れ、小松が倒れるとは平氏が滅びる時が近いし、清盛は宮中から追い出してしまいなさい、の意。「堀地」は「屏中門(へいちゅうもん)」のことで、築垣(ついがき)を切つて造つた簡単な門。これを平氏に掛け、小松も重盛を暗示したもの。出典不明。
 ⑤もと、頭を地に付ける丁寧なお辞儀のこと。手紙や上書文などの末尾に書いて敬意を表す語。
 ⑥ある人。差出人の名が匿名であることを表わす。
 ⑦大胆不敵に。
 ⑧京都の地名。鴨川の東岸にあり、平家一門の邸宅があり、政務を執る役所があった。
 ⑨六波羅の平家の屋敷の表門。
 ⑩平家の主立った一族。
 ⑪活力の源。勢い。

- ⑫いかにも賢そうに。
 ⑬およろこび。
 ⑭非情に。なかなか。
 ⑮よくやった。
 ⑯いつもと違う姿。
 ⑰目立たない姿に変える。
 ⑱道筋。

とて、高札あまたに落書を書き、君の御目にかけて奉る。この歌に、

「君が代の短かるべきためしには兼ねてぞ折れし住吉の松」
 今一首には、

「へいじ崩れ小松倒るる世の中に清盛すてよ九重の内」

「頓首。さるもの」

と、ふてぶてしく墨黒に書きなし、

「この落書を六波羅の総門・旨徒の一門どもが門々に立て置き
 なば、平家はいよいよ氣を失い、隠れたる源家は力を得るべし。

しからば自ずから招かずとも、味方は日々にまさるべし。この儀はいかが思し召すぞ」

とさかさかしく申しければ、御曹司御悦喜なかなか浅からず、
 「いしくもできたり、武蔵坊。時刻移さず今宵の内にはやとくとく」

とありければ、承つて武蔵坊、あらぬ姿に身をやつし、六波羅の総門、ここやかしこの辻々に、一夜の内に立てけるは、不敵なりける次第なり。

と、たくさんの高札に、平家をからかう落書歌を書いたものを御目につけてました。

まず一首目は、
 「君が代の短かるべきためしには兼ねてぞ折れし住吉の松(平家の時代が長く続かない証拠としてこのまゑ住吉の松が折れたのです)」

もう一首目には、
 「堀地崩れ小松倒るる世の中に清盛すてよ九重の内(屏中門が崩れ、小松が倒れるとは平氏が滅びる時が近いし、清盛は宮中から追い出してしまいなさい)」

「頓首、某某」と署名してあり、これらを大胆不敵にも墨黒々と書きあげてあります。
 「この高札を六波羅の総門や平家一門の家々の門に立てておいたら、平家は氣勢をそがれ、隠れている源氏の味方のものは力を得るに違いありません。そうなれば、我々が何をしなくとも、味方になるものは日ごとに増えていくにちがいません。いかがでしょうか」と得意げに言いました。義経も喜んで、

「よくやった。よくやった。よし、弁慶、いまからすぐにこの高札を立てに行け。さあ、いそげ」

と言いますので、弁慶は、人目にたためように変装して、六波羅の総門やあちこちの辻に、一夜のうちに高札を立ててしまいました。これはまことに大胆不敵なしわざでありました。

①平清盛の出家したときの名。初段参照。
②身分の高い人の子息。

③奈良市春日野町にある神社。初段参照。
④お祓いに使った幣帛。幣帛は細く切った木綿や麻・紙を束ねたもの。神前で振って用いる。
⑤今の三重県伊勢市五十鈴川上にある神宮。初段参照。
⑥祓いの詞を神前で一万度奏して、罪を祓い清めること。

⑦「候」は丁寧を表わす語。
⑧思ってもいない。とんでもない。
⑨神のみこころによる罰。

⑩世の中。
⑪世の中が穏やかに治まること。
⑫神にささげた幣帛。

⑬気兼ねする。遠慮する。
⑭受け取りおさめる。
⑮…なさるだろう。

⑯あらゆる言葉で。

⑰正しく座り直して。

これはさておき、浄海の御前には公達残らず相詰めらるその中に、三男新中納言知盛、南都春日大明神の御はらい、台に乗せて持参あり。二男宗盛公、天照大神宮一万度の御はらい、これも同じ台に乗せて持参あり。入道装束あらため、謹んで礼拝あり。さて小松殿に向かわせ給い、

「住吉の御はらいはいかに。一緒に拝し奉らん」とあれば、重盛承って、

「さん候。このたびそれがし住吉へ参宮仕り候所に、もつての外なる神慮の咎め」

始め終わりをつぶさに相述べ、

「これと申すも、世上静謐ならざるゆえなり。神奉幣を受け

給わねば、持参致すべき御はらいもござなく候。悪きをもつて

あらたむるにはばかりる事なし。なおこの上にも御心やわらげ

られ、民を哀れみ思し召さば、祈らずとも神や納受ましまさ

ん」

と、言葉を尽くして申さるる。

入道大きに立腹ましまし、膝おしなおし、

さて、こちらは平家一門、清盛は出家し浄海入道と名乗っております。その前には一門の公達がみな集まっております。三男の新中納言知盛は、奈良の春日大明神でお祓いしてきた品々を台に乗せて持っております。二男の宗盛も、伊勢神宮でお祓いしてきた品々を同じ台に乗せて持っております。入道は装束を整え、その前で謹んで礼拝したあと、重盛に向って、

「住吉大社での御はらいの品はどうした。どうしていっしょに拝めるようにしないのじゃ」

と聞きました。重盛は、

「そのことでございますが、私が住吉大社へ参詣いたしましたところ、思いもよらず、神のおとがめを受けたのでございます」と、参詣の時の模様をくわしく報告し、

「これというの、いま、世の中がなにやら騒々しく、平穩に治まっていないためでございます。神が、我々の願いをこめた幣帛を受け入れて下さいませぬから、お祓いの品も持ち帰ることができませんでした。悪いところをあらためるにはばかりることはございません。これからは、少しやさしいお心になり、民を哀れむお心を持っていただくようになされば、祈らなくとも、神はわかってくださるはずです」

と、言葉を尽くして申しあげました。が、入道は大へんに腹を立て、座り直したうえで怒鳴りました。

①まったく。
②言い過ぎで無礼であること。

③天が人に告げ教える声。

④空手で。

⑤忠義にそむくこと。「ふぢやう（不調）」とする本もある。

⑥まちがい。
⑦目上の人の間違いをいさめること。また、それを好む性格であること。

⑧すこし。「もつて」は意を強める。
⑨けしからぬこと。「きかい」を強めた言い方。

⑩さあ。呼びかけの言葉。

⑪すさまじい勢いで怒るようす。
⑫かおいろ。
⑬血管を浮き立たせて。

⑭ほんのしばらくの間。

⑮旧国名。今の三重県の西部。

⑯内裏。天皇の居所。ここは清盛の館をさす。

⑰罪人を捜索すること。

⑱「する」の謙譲語。
⑲ゆくえ。
⑳わかりません。「知らない」の謙譲語。
㉑放っておく。

「近頃もつて過言に候。重盛何をもつてか入道が不政道とは申さるるぞ。我天声に咎められれば、伊勢春日住吉各々咎めを蒙るべし。然るに宗盛知盛ともに伊勢春日両社ともにつつがなく御はらい受けて帰りしに、その方一人神のお咎めを蒙り、手むなしくして帰りながら、汝が不忠は言わずして入道が僻事とは心得ず。今に始めぬ重盛の、親に向かつて諫言立て、いささかもつて奇怪なり。急ぎその座を立たれ候え。いかに侍ども、それ引つ立てよ」

と居丈高になり、面色筋をいららげ、こぶしを握つてのたもととき、不思議や側なる両社の御はらい内より焼け出で、たちまちに暫時の煙と燃え上がりしは、不思議なりける次第なり。入道殿を始めとし、その座にあり合う人々、何とも物を言わず、ただ呆れ果てたるばかりなり。

しかる所に、伊賀の平内左衛門成景慌ただしく駆け来たり、「何者のしわざとも知れず、今宵御所の両門にかようの高札うち置き候。随分詮議仕り候えども、その行き方を存ぜず。差し置くべき事にあらず。急ぎ知らせ奉る」

「なんと生意気なことを。何ゆえにこのわしの政治に落度があるというのじゃ。もし、本当に天がわしをお咎めになるのであれば、伊勢でも春日大社でも住吉同様の咎めを受けるはず。しかし、宗盛も知盛も、伊勢・春日両社では何事もなかったではないか。無事に御はらいを受けて帰ってきたのに、そなた一人神のお咎めをこうむり、そうやってむなしくして帰ってきたのではないか。それこそそなたの不忠の証拠。それを言わず、このわしの政治に誤りがあるためだなどはわけがわからぬ。そうやってそなたが親に向かつて生意気に諫言をしたがるのは、いまに始まったことではないが、まことに不愉快じゃ。すぐにこの場を立ち去れ。侍ども、重盛を引つ立てろ」

と居丈高になり、青筋を立て、こぶしを握つて怒鳴り散らしました。

と、そのとき、不思議なことに、そばにあった両神社のお祓いの品々から煙があがり、たちまちのうちに燃え上がってしまいました。入道殿以下、その座に居合わせた人々は、何も言えず、ただ呆然と見ているだけでした。

そこへ、伊賀の平内左衛門成景があわただしく駆け込んできました。

「何者のしわざかはわかりませぬが、今夜御所の両門にこのような高札を立てていったものがござります。いろいろ調べましたが、下手人はどこへ行つたかわかりませぬ。ほおっておくわけにもいきませんので、こうして報告のため参上いたしました」

①言い終わらないうちに。「申す」は「言う」の謙譲語。

②しだいしだいに。

③残念。

④天の魔王。仏道のさまたげをなすという。

⑤しわざ。

⑥きつねとおおかみ。

⑦中国にいる。狐に似て小さく、よく木に登り、夜なく声が狼に似ている獣。

⑧ままよ。満足ではないが仕方がない気持ちを表す。

⑨乱暴なふるまい。

⑩平家の天下が倒れることを願い、祈祷すること。

⑪また、まじないなどで呪い殺すこと。

⑫人の道にさからったひどい悪事。

⑬みやこじゆう。

⑭罪などを白状させるため体に苦痛を与えること。

⑮神社と仏塔。

⑯怒りなどのため逆上して目が血走ること。

⑰おっしやったのは。「のたまう」は「言う」の尊敬語。

⑱ああ。

⑳ご命令。

⑲果てないだろう。片づかないだろう。片づく意の「ひる」に打ち消しの推量を表わす「まじ」がついた語。

⑳賞金をかけて物事を依頼すること。また、その賞金。

㉑一日か二日。

と申しも果てぬに、町々の町人ども、

「かかる落書を仕り候」

とおいおいに訴えくる。

入道いよいよ腹を立て、

「さてさて無念や。これひとえに天魔の所為か。または狐狼野干

のしわざならん。よし何者にもせよ、かかる狼藉振舞い、天下

調伏致すこと、もつての外の悪逆なり。今宵のうちに、京洛中

の人民めらを六波羅の総門に引き寄せ、一々に拷問せよ。さ

て、国々にも使者を立て、社塔仏閣諸共にことごとく焼き払

え」

と、血眼になってのたまひしは、あっぱれおろかの御諛かな。

その時知盛進みいで、

「御諛を返すはいかがにて候えども、左様に仕り候いては人の

み多く損じて、かえつて事ひまじき様に存じ候。昔より親子

兄弟の身の上にも、欲心内であれば、言い表する習いなり。属託

をかけてお尋ね候わば、恐らく一兩日の内には明らかに知れ

申すべき」

と言い終わらぬうちに、町々の町人たちが、
「こんな落書がありました」

と次々に訴え出てきました。

入道は、ますます腹を立て、

「ええい、腹の立つ。これは天魔のしわざか、
さもなければ、狐狼野干のしわざであろう。

たとえ何者がやったにせよ、このような無礼
な振舞いで天下を呪うなどとはもつての外の

こと。今宵のうちに、京中の人間をすべて六
波羅の総門に集め、全員拷問にかけよ。また、

諸国に使者を立てて、社も塔も仏閣も、すべ
て焼き払え」

と狂ったように叫びました。まことにおろか
な命令であります。

その時、知盛が進み出て、

「御命令にそむくのはいかがとは思いますが、
ただ、そのようになされては、死人ばかり多

く出て、かえつて事は解決しないのではない
かと思われます。昔から、親子兄弟であつて

も、欲心によつては、訴え出ることがあると
いいます。懸賞金をかけて尋ね出すことにす

れば、犯人は一兩日のうちに明らかになると
思われます」

- ①なるほど。
- ②お思いになり。「思し召す」は「思し給う」よりも程度の高い尊敬語。
- ③それならば。
- ④取りさばくのがよい。
- ⑤平景清のこと。「悪」は強い意を表す。
- ⑥書き役。高札を立てた犯人を囑託で探すという事情。
- ⑦なげかわしい。

⑩陰曆十二月の異称。

- ⑪ものさびしい。
- ⑫京都の東山。
- ⑬京都にある運河。鴨川から取水し、伏見を過ぎ、淀川に通じる。慶長二年(一六二一)角倉了以が開削。本物語の時代には存在しない。
- ⑭神聖な鳥とされ、神社の境内で飼われることがある。
- ⑮神社の境内が清涼であるようす。
- ⑯夜がほのぼのと明けてくるころ。
- ⑰「祇園」は京都の八坂神社の旧称。祇園社境内とその周辺の林。
- ⑱高札の数の単位。
- ⑲古歌の形を変えて。
- ⑳忘みきらつて、笑いものにした。

㉑ 諸詠・滑稽を詠んだ卑俗な内容の短歌。

㉒ おどけながら。

㉓ (平家が滅びるように) 密教の修法を行ない。事実無根の根も葉もない。

と言葉を尽くして申さるれば、入道「げにも」と思し召され、
 「しからば左様に計ろうべし」

かしこまって悪七兵衛筆取りし、右の段々書き記し、最前の落書に相添え、また辻々に立て置かる。うたてかりける次第なり。

しかる所へ熊井の友治兄弟は、都に忍びありけるが、師走の日数ものすごき、ここぞ洛陽東山。風激しくも吹き下ろし、かもめ宿かる高瀬川。にわとり梢に羽を休め、宮居涼しきあけぼのや、祇園林にいでらるる。傍らを見てあれば、高札二おもて立ててあり。立ち寄り見れば、古雅をやつして落書を二首立ててあり。この歌の体を見るに、平氏を疎み嘲りたる歌にてあり。

「いかに喜三太。狂歌ながらも歌の様、我々が家にて末頼もしく思ほゆる」

と、戯れながら今一札を見てあれば、その言葉いわく、「そもそも今度、住吉の松の折れたる事を当家不吉のようになりなし、秘法をたくみ、無実の落書を作り、天下調伏するこ

と言葉を尽くして申しあげました。入道も納得して、

「では、そなたの言うようにしよう」

と言いました。そこで悪七兵衛が筆を取って、いまの次第を書き記し、さきほどの落書のそばに添えて、辻々に立てておきました。まことになげかわしいなりゆきであります。

さて一方、熊井友治と喜三太の兄弟は、都にこつそりと入り込んでいましたが、師走の京都のことゆえ、山からの風は激しく吹き下ろしています。かもめが飛び交う高瀬川の近く、鳥が梢に羽を休めている清浄な境内、あけぼのの祇園社の林のあたりにやつてきました。

ふと見ますと、高札が二つ立っています。立ち寄って見ると、古い歌をもじった落書の歌二首が書いてあります。歌の内容は、という、平氏をうとみあざけるものです。

「これ、喜三太。狂歌とはいえこのような落書の高札が立つとは、我が家にとって頼もしいことではないか」

と、冗談を言いつつ、もう一枚の高札を見ますと、そこにはこう書いてありました。

「このたび、住吉大社の松が折れた事を当家の不吉のようになりなし、呪いの秘法を行なったり、根も葉もない落書を作つて、天下を呪詛するとは、見捨てておけぬ大罪である。」

①仲間。

②つくづく。

③飢えて。

④確定。確實。

⑤仏教で、この世に生きている間。

⑥仏教で、餓鬼道。六道の一。地獄に次いで苦しみの多い所。ここに墮ちると、常に飢えて

⑦あなた。軽い敬意を表す。

⑧人の死は定まりないので、老若に関係がないということ。

⑩私。

⑪大事や事件を急いで報告すること。
⑫ただし。

⑬死人のからだ。なきがら。

⑭あなた。やや目下の相手を親しんで呼ぶ言葉。

とその罪最もはなはだし。たとえば親子兄弟なりとも、六波羅に参りその主を告げ、知らずともがらこれあるにおいては、たとい同罪たりともその咎を許し、属託として黄金五百枚あておこなうべきものなり。小松の内大臣重盛判」と書かれたり。

兄弟しばらく眺めしが、ややありて友治、喜三太を傍らに密かに招き、小声になりて申さるるは、

「つらつらものを案ずるに、とても我々山賊盗賊の業はかなうまじ。さある時は父上も妻子諸共、飢えにつかれて死すべき事は治定なり。しかれば今生にては、目のあたりに餓鬼の苦しみを受け、来世はなおかくのごとく、御身もさこそ思いつらん。老少不定の憂き世の中、明日をば誰か頼むべき。添い果つべき身にてもなし。しかればそれがしを、このたび落書を書きたるいたずら者と号して、六波羅殿へ注進せよ。もつとも我は敵に捕われ、屍は路徑に晒すべきが、おことはその属託の謝金を承り、後に残りし父上や妻子諸共育みくれよ。はやとくとく」

たとえば、親子兄弟であっても、犯人を知っているものがいれば、六波羅に参上し、その首謀者を密告せよ。もし、知らせたならば、たとい同じ罪を犯していてもその罪は許し、懸賞金として黄金五百枚を与える。小松の内大臣重盛判」

兄弟はしばらく眺めていましたが、やがて、友治は喜三太をそばに呼び、小声で言いました。「よくよく考えてみると、われらに山賊や盗賊ができると思えぬ。が、それができねば、父上も妻や子も飢え疲れて死なしてしまうことになるのは目に見えている。この世で目の前に餓鬼畜生のような苦しみを味わい、来世でもなお、このように生きていかねばならぬのかと思うてもたつてもいられなくなる、そなたもそうであろう。老少不定のこの世、明日生きているのが確実な人は誰もいない。また妻とも最期まで添いとげられるものでもない。だから、この私を、今回の落書高札を書いた犯人として、六波羅殿へ注進するがいい。そうすれば、わしは、敵に捕われ、屍は道ばたに晒されることになろうが、そなたは、その懸賞金の黄金五百枚を受け取って、残された父上や妻子の養育費用にあてることができよう。さあ、はやく行け」

① そうではあるが。しかしながら。

② なるほど。いかにも

③ 態度をがらりと変える。

④ むだじに。

⑤ なまいきで申しにくいが。

⑥ この場にふさわしいでしょう。そうであるのがよい意の「しかあるべし」に推量を表わす「う」がついた言葉

⑦ この時代。現代。

⑧ かしこい人。聖人に次ぐ徳のある人。

⑨ 中国の聖王。晋の成王。

⑩ 『史記』などに見える故事。周の武王の子成王が弟の叔虞に、遊びで、桐の葉を書類(又は印)に見たてて国を与えると発言した。これを聞いた太史(天子の言葉を記録する官)が、天子の言葉は必ず実現されなければならぬと進言。ために、成王は叔虞に晋を与えたという。

⑪ 捺印。または花押。

⑫ 印を押す。または花押を記す。

⑬ せっばつまって。

⑭ 訴え出る人。

とのたまえば、喜三太つくづく承り、

「よき御思案を思し召し出だされ候。さりながら老いたる親の

飢に及ぶを悲しみ、罪なくして罪に沈むはもつとも孝行ともな

りぬべし。しかしながら、手の裏返す世の中なれば、もし属託

なき時は、千度悔いてもかなわず、かえって犬死にて候べし。

はばかりながらこの思案を思し召しとまらせ給いてしかるびよ

う候」

と、言葉を尽くして申しける。友治聞いて、

「おろかなる喜三太。この小松殿は諸道に達し給いて当代の賢人

なれば、何しに偽りやあるべき。唐土の聖の君は、桐の葉一葉

を印にて、大国を下し給いし例もあり。まして日本一の重盛殿。

御判まで据えられしに、何とて変ずる事のあるべきぞ。とくと

く」

と言いつくれば、喜三太至極に迫り、

「しからばそれがしを悪人になされ。御身訴人に出させ給い、

謝金を取ってお帰りあれ。その故は御存知のごとく、それがし

は妻子とても候わず、父上の嘆かせ給うばかりなり。御身はま

それを聞いて、喜三太は、

「なるほど、それはよいお考えでございます。老いた親が飢えるのを悲しみ、無実の罪を受けて処罰されようというのはなるほど孝行といえましよう。しかし、裏切られることが多

いのもこの世の中です。もし懸賞金がもらえなかつたときは、千度悔いてもかえらぬこと、ただの犬死になるだけです。なまいきを言うようですが、思いとどまっていたらくのがよいと思います」

と、言葉を尽くして申しあげました。友治は、「馬鹿なことを言うな。この高札の主である小松殿は諸道に達しておられる当代一の賢人よもやうそを言うことはないはず。唐土の天子は、桐の葉一枚を印章がわりに大国をくださつたという例もある。まして日本一の賢者である重盛殿が、御判まで押した高札にどうしてうそ偽りを書くものか。さあ、はやく行け」

と言いつのりませ。喜三太は困ってしまい、「では、私を犯人にし、兄上が訴人して、懸賞金を持つてお帰りなされ。というのも、御存知のとおり、私には妻子がございません。死んでも父上が嘆くだけです。」

① 家名を継ぐべき子。長男。
② おさない。

③ 忠告した。

④ 仏教で、死後に行く世界。あの世。
⑤ 死者の冥福を祈って供養する。

⑥ 正義のために兵をあつめ、戦を起こすこと。
⑦ つれて。

⑧ 落ち着く先。

⑨ 手段。
⑩ 明らか。実の。
⑪ 仏教でいう五種の罪悪、父・母・阿羅漢（仏教の修行の最高段階に達した人）を殺すこと、僧団の和合をこわすことなど、諸説ある。ここでは兄を殺すことをいう。これを犯せば、絶え間なく苦しみを受けるという無間地獄に陥るといわれる。

ず総領なり。父の嘆きは言うに及ばず、まだいとけなき妻子もあり。これらが嘆きはいくばくぞや。是非とも我を」と諫めける。その時友治、

「おお、面白し。喜三太、おことには妻子もなく一人身なるに
より、後に残れとは申す。それがしは妻子を持ちしゆえ、死な
んとは言うなり。その故は、我は命を三つ持ったり。我死して
も女房・辰若を盛り立てなば、即ちこれそれがしなり。後世菩提
を弔うとても何に不足のあらん。その方は頼みすくなき一人身
を、誰に預けて死すべきぞ。その上明日にても、源家のともが
ら義兵を挙げさせ給わん時、あの辰若を盛り育て、具して出づ
る程ならば、おそらく我には劣るまじ。さある時はいつまでも
我が主君の御用に立つぞかし。おこと死して誰ありて、御辺が
代わりに主の先途を見届くべき。かれこれ以て、ただただ我を」
とのたまえば、喜三太涙を流し、
「恐れながら、いくたびもこればかりは従われず。まず思し
召しても御覽ぜよ。いかに手立てなればとて、現在の兄を殺す
五逆罪の悪人と、人に指をささるべし。ただおとなしく御身

兄上は、総領ですから、父が嘆くだけではありません。幼い子もいますし奥方もいますから、この方々の嘆きはいかばかりでしょうか。ですから、是非、私を訴え出てください」と諫めました。しかし、友治は、

「おお、面白いことを言う、喜三太よ。そなたは妻子もない一人身なるがゆえに、わしが後に残れというのだな。が、わしは、妻子を持つているゆえ、死ぬと言うのだ。というのも、わしには命が三つある。わしが死んでも女房が辰若を盛り立て、立派に育ててくれれば、即ちそれがわしということになる。後世を祈り、菩提を弔ってもらえば、それ以上何の不足をいうことがある。そなたは、あとを頼む者もない一人身。誰に死後のことを頼めるのか。その上、将来、源氏が兵を挙げるとき、あの辰若を立派に育てあげ、連れ出ることができれば、おそらくわしに劣るようなことはあるまい。そうやって、いつまでも、わしは、我が主君の御用に立てるといふわけだ。が、子のいないそなたが死んだらそなたの代わりに誰が御主君に役に立てるといふのか。だからこそ、このわしでなければならぬのだ」
と言いつ張りしますので、喜三太は涙を流し、
「いえ、申し訳ありませんが、何度言われてもこればかりは従うわけにはいきません。考えてみてください。いくら示し合わせたこととはいえ、私が訴人すれば、実の兄を殺す大悪人と人に指をさされます。どうか、あなたはここに残って、私を殺してください」

①座り直し。

②言うこと。言い分。
③従う。

④意にかなわなくても。

⑤反対せずに

⑥ひどくあせて。

⑦なにがあっても考えを変えず。「とかく」は「どこにもかくにも」の意。

⑧主従・親子・子弟の縁を切つて追放されること。

⑨同意。

⑩面目。

⑪考えを同じにする。同意する。

⑫着物の腰から上の部分を後ろへ脱いで肌を出す。「押し」は強調をあらわす。切腹するときの動作。

⑬自殺。自刃。

⑭正しいすじみち。

残りて、それがしを殺してたべ」

と手を合わせ、涙ながらに申しける。友治居直り、

「さてさて、聞き分けもなき者かな。何を申すも父上への孝行なれば。おことが申し分にもつくべきものなれども、さりながら御辺は未だ若輩者なればかかる悪事は似合わず。たとえ心に染まずとも、兄たる者の言う事なれば背くべき道にあらず。異議に及ばずはやとくとく」

と、せききつてのたまえども、喜三太とかく動ぜず、

「たとえ御勘当候ともこればかりは同心ならず。五逆罪の咎人

と呼ばれ、侍の一分捨て申す事、なかなかかない候まじ」

と申しきつて、なかなか一味すべき体もなし。

友治今は力なく、傍らに立ち寄り上帯といて押し肌脱ぎ、

すでに自害と見えしを、喜三太あわてて押し止め、

「のう兄上、物に狂い給うか」

「おお、物に狂うは誰が狂わするぞ。これ皆汝が狂わすなり。

まず心を静めて事の道理を確かに聞け。このままにては父上も我々ともに、飢えに及びて死すべきなり。しかれば汝、兄が心

と手を合わせ、涙ながらに言いました。友治は座り直し、

「さてさて、本当に聞き分けのない奴。いずれにしても、父上への孝行のためである。だから、そなたの言い分もよくわかるつもりじゃ。しかし、そなたはまだ若い。だから、こういう悪事には似合わないのじゃ。たとえ氣に入らずとも、兄の言うことに背くな。文句を言わずはやくはやく」

と、せつぱつまつて言います。が、喜三太の決心は少しも変わらず、

「たとえ、勘当されても、こればかりは納得できません。五逆罪の咎人と呼ばれ、侍としての誇りを捨てるようなことはとてもできません」

と言って、なかなかこの計画に同意する様子がありません。

友治はやむなく、傍らに行き、上帯をとりて肌脱ぎになり、自害しようとした。喜三太はあわてて押し止め、

「兄上、気でも狂ったか」

「だれのためにこんなことをすると思う。そなたが、言うことを聞かぬからじゃ。よいか、落ちて着いて事の道理をしつかりと聞け。このままでは父上も我々もみな、飢えて死ぬしかない。

①軍を起そうとする。

②なにやかやにつけても。

③ほんのしばらくの間。

④道理にかなうかなわなないかということ。
⑤詰めよられて逃れようがなく。

⑥お考え。目上の人に対する尊敬語。

⑦奥方。社会的地位のある人の妻をいう語。

にも背き、親をも殺すは汝が心一つにてはなきか。その上最前も言う通り、源家の人々重ねて旗を挙げんとき、飢えに及びて相果てなば主の先途も見届けず。何はにつけてもその方は、八逆罪にも名をまされり。左様なる道に背けるものと、片時の間も兄弟と言わるる事の恥ずかしければ、さてこそ先立ち死するぞとよ。そこを放せ放せ」

と申すにぞ、喜三太是非の道理につめられ、

「もつとも誤り申したり。何しに御意を背くべき。許させ給え兄御様」

と、ただひれ伏して泣きいたり。友治も涙を押さえ、

「心に従わんというか嬉しやな。必ずかように申すとて、我を憎しと思うなよ。命にかえてもおこたらを不憫に思うゆえなるぞ。はやとくとくとく」

と、涙にくれてのたまえば喜三太承り、

「して、御内方の御方へは何とか申し候べき。定めて我を恨み給わん。いかがはせん」

と申しければ、

だから、そなたがこの兄の言うことを聞かず、その結果、親も殺すことになるかどうかは、そなたの心次第やぞ。そのうえ、さきほども言うたとおり、さきざき源氏が再度拳兵しても、そなたが強情を張ってここで死んだりしたら、源氏の将来を見届けることもできぬ。そうなれば、そなたは、八逆罪よりも大きな罪を犯すことにならぬか。そんな道に背いた奴とほんのしばらくでも兄弟と言われるのは恥ずかしい。だから、わしは先に死のうと思うのじゃ。そこを放せ」

とまで言われては、喜三太はもはや対抗する言葉がありません。

「兄上のおっしゃるとおりです。わたくしが間違っております。もう兄上のお言葉にそむくことはいたしません。お許しください」と、ただひれ伏して泣いていました。友治も涙をこらえつつ、

「わしの言うとおりにしてくれるか。よかつた、よかつた。こう言うからといって、わしを憎いと思うなよ。そなたらを不憫に思い、命にかえても考えたからじゃ。さあ、はやく、六波羅に行け」

と、涙を流しつつ言いました。喜三太はうなずきながら、

「それでは、家の方にはどういふふうに伝えましょうか。きつと私を恨みに思うにちがひありません。ああ、どうすればいいか」と思案に暮れていますと、

①こと。次第。

②肌につけて持つて持っている守り札。
③刀一振り。「腰」は太刀を教える言葉。

④気も失うほどに。
⑤目が見えなくなり。

⑥賞金のために兄友治を高札設置の犯人として
訴入する計画。
⑦むなししいこと。むだ。
⑧かたとき。しばらく。

「おお、その段も心安く思われよ。女房の方へは、それがし文を遣うべし。女なれどもかの者は、我にまさりて孝行第一の者なれば、これ程の事をわきまえかぬる者にてなし。必ず氣遣いし候な」

と文こまごまと書きしたため、

「肌の守りと一腰を辰若に得させてたべ。時刻移ればいかなり。急げ急げ」

と申すにぞ、喜三太今は力なく「承る」とて立ちけるが、また立ち帰り、

「敵の手に渡しなば、また会う事のあるべきか。今生の生き別れも今なれば、せめての事に今日ばかりはお側に置いて給われ」と、また消え入りてぞ泣きいたり。太郎左衛門目くれ心は消ゆれども、

「ええ、おろかなる喜三太。とやかくとする内に、外より訴人の出るならば、たくみし事もいたずら事となりぬべし。片時も早くとくとくとく」

と、諫むる心に弱々と、六波羅さしてぞ急ぎける。

「おお、そのことなら、安心しろ。女房には、わしから手紙を出しておく。女とはいえ、あれはわし以上に親孝行の者じゃから、これくらいのことをわからぬはずはない。心配せざともよい」

と、この間のことをこまごまと書き、
「この手紙を届け、この肌の守りと腰に差していた刀は辰若に渡してくれ。遅くなつてはならぬ。はよう急げ」

とせかしますので、喜三太は、もうどうしようもありません。

「わかりました」
と立ちあがりましたが、また立ちもどつてき

「兄上を敵の手に渡したなら、もう会うことができないでしょう。これが、今生の生き別れ、せめて今日だけはそばにいさせてください」

と、また消え入りそうに泣きました。太郎左衛門も、目は見えなくなり心は消えているほどに悲しい思いでいるのですが、心をはげまし叱りつけました。

「ええ、おろかな喜三太め。こんなことをしているうちに、他に訴入するものがあらわれたら、我々の計画も無駄なことになってしまふぞ。はやく行け」

と、諫めましたので、しよんぼりとした気持ちで、六波羅へと急ぎました。

①訴訟を取り扱う役所。記録荘園券契所の略称。延久元年(一〇六九)、荘園整理事業のために設置されたが間もなく消滅。その後、国司と荘園領主との争いを裁く機関として再興され、さらに訴訟を取り扱う役所として機能するようになる。

②だましてとめおき。
③賊軍や罪人を亡ぼしたり捕えたりするためにつかわされる人。

④いかにも本当らしく。

⑤あいつ。いやしめて言う語。
⑥力の強い人。
⑦少人数。

⑧立派な大名。ここでは、大名は広大な所領を持ち、武家の統領として地位のある者をいう。

⑨手下の兵をよりすぐって。

⑩走ってむかう。

⑪かのところ。そこ。

⑫それ、これだ。

⑬左手。左側。

⑭右手。右側。

⑮ぎょうぎょうしい。大げさだ。
⑯つかまえては投げつかまえては投げ。
⑰きわめて力の強いこと。

御所にもなれば記録所にかしこまり、

「今度お尋ねなされ候、落書を打ちたるいたずら者、それがし

よく存じたばかり置き申し候。急ぎ討手を賜わるべし」

と、まことしやかに申しける。ご一門聞こし召され、

「さればこそ申さぬ事か。急ぎ討手を遣わすべし。それぞれ」

とあれば、喜三太重ねて、

「きやつは不思議の強力者にて候えば、無人にては叶うまじ。

その御用意なさるべし」

と申し上げる。知盛聞こし召され、

「もつともさこそあらんずらん。しからばゆゆしき大名に申し

つくべし」

とて、関ヶ原の与市に仰せつけられる。与市承り、手勢すぐ

って六十余人、喜三太を先に立て、祇園林へはせ向かう。

かしこになれば、「すわやこれぞ」と言う程にこそあれ、弓手

馬手より取り付けば、

「ものものしや」

とて友治、取っては投げ取っては投げ、手の下に屈強の兵七八人

六波羅の御所に行き、記録所のところできしこまり、

「このたびの高札に出ておりましたお尋ね者の事で参りました。落書の歌の高札を立てたけしからぬ者が誰であるか、私はよく存じております。早く討手を出していただきとうございます」

と、まことしやかに申しあげました。平家方の人々はこれを聞いて、

「やあ、思った通りじゃ。では、すぐに討手を遣わすことにしよう。それ」

と命じましたので、喜三太はさらに、

「きやつめは、たいそう力の強いものでございます。討手の人数が少なくは大変でございます。そのつもりで行かれるのがよろしいかと」

と申しあげました。知盛はお聞きになり、

「いや、そうであろう。では、名のある者に命ずることにしよう」

と、関ヶ原の与市に命じました。与市は承り、手勢のなかから六十余人を選び、喜三太を先に立てて、友治のいる祇園の方に向いました。

隠れ家の前に着くと、喜三太は、

「ここでございます」

と案内しました。一行は両側から友治を取り囲みましたが、

「大げさな奴らじゃ」

と言いながら友治は、取っては投げ取っては投げして、たちまちのうちに屈強の強者を七八人投げ倒しました。

①…してしまった。「てけり」の語勢を強めた言い方。

②現在。ただいま。

なげ倒す。されども大勢折り重なり、手取り足取り、ついに縄をぞ掛けてんげり。

ときに友治つと立ち上がり、

「何者なれば狼藉や。咎なき者をかくはするぞ」

と呼ばれば、与市聞いて、

「おのれあらざる落書を打ち、当時天下を調伏するゆえ、かく

のごとく行なり。今に思い知らせん」

と言えは友治重ねて、

「これは思いもよらぬ事を承るものかな。定めて人違いにて候べし」

時に喜三太つと出で、

「やあ、友治。それがし訴人する上は、もはや逃れはあるまじ。

覚悟せよ」

とののしれば、友治しおしおとして、

「さてはおのれが訴人よな。さてさて、人の心は頼みなきものかな。よしよし今は力なし。いかにもそれがし咎人なり。いかようにも計らい給え」

④人の心は使りにならないものだ。弟が兄を裏切り訴人することをいう。ただし、このあたりは知治・喜三太兄弟の演技で、本作品の山場の一。まよい。ままよ。

③力なくしおれ弱るようす。

が、大勢が折り重なってかかりましたので、手取り足取りして、ついに友治に縄を掛けてしまいました。が、友治はつと立ち上がり、「狼藉ものめ。誰じゃ。罪もないものに縄をかけるとは」

と叫びました。与市は、

「そなた、いいかげんな戯れ歌の高札をあちこちに立て、天下を呪おうとしたから縄をかけたのじゃ。今に思い知らせてやる」

と言いますと、友治はさらに、

「これは思いもよらぬことを聞く。おそらく人違いでございましょう」

と答えました。その時、喜三太が前に出ていき、

「やあ、友治。私が訴人したのだから、もはや逃れられぬぞ。覚悟せい」

とののしりました。友治は元気をなくした様子で、

「おまえが訴人したのか。さてさて、人の心は頼みがないもの。よしよし、こうなつてはやむをえん。いかにもわしが犯人じゃ。いかようにもするがいい」

①相手に向ってしつかり言うようす。

②いかにも。なるほど。

③強い気持ちを表れた顔。

④顔をののしっている言葉。

⑤人をうちたたくこと。

⑥予想していたこと。

⑦きらって避ける。

⑧決してあるまい。

⑨怒りがおさまるならば。「腹がいる」は腹立ちがおさまるの意。

⑩よく働く。

⑪愚か者。

⑫意地を張り通すこと。

⑬お前。目下の人。またはのしりたい相手に用いる。

と、言葉^①を放^{はな}つて申しければ、与市^{よいち}聞いて、

「いかさまきやつめが面魂^②、かかる悪事^{あくじ}をたくむべきしやつ面^④なり。眼^{まなこ}あつて口開^{くちひら}けば、いかなる悪事^{あくじ}もたくめばたくむものかな」

と、扇^{あふぎ}をもつて友治^{ともはる}が面^{おもて}を散^{さんざん}々に打擲^⑤す。思^{おも}い設^{もう}けし事^{こと}なれば厭^{⑦いと}うべきにはあらねども、わざと友治^{ともはるまなこ}眼^{みひら}を見開^{みひら}き、

「いかにその方^{ほう}、侍^{さむらい}にてはよもあらじ。繩^{なわ}をかかりて五体^{ごたい}のかなわぬ者^{もの}なれば、さぞさぞ打^うちよかるらん。打^うつて腹^{はら}だにいるならば、いか程^{ほど}なりとも打^うち給^{たま}え」

と、顔^{かお}振り上^あげていたりけり。

与市^{よいち}大きに腹^{はら}を立て、

「さてさて、口^{くち}の利^きいたる痴^⑧れ者^{もの}かな。おのれ今^{いま}強情^{こじしょう}なりとも、この与市^{よいち}が賜^{たま}わつてこの頃^{ころ}設^{もう}けしこの太刀^{たち}の鉄^{かね}の味^{あじ}わい、おのれが首^{くび}の骨^{ほね}へ参^まらすべし。昔^{むかし}より死^しに首^{くび}の物^{もの}言^いうたるためしはなし」

と、太刀^{たち}抜き出^だし、嘲笑^{あざわろ}うて立^たつたりしを見^みれば、熊井^{くまい}の家^{いえ}に伝^{つた}わつたる三^{さん}条^{じょう}小^こ鍛^{かじ}冶^じが打^{うち}物^{もの}なり。兄^{きょう}弟^{てい}の人^{ひと}々ははつと目^めもく

と、大声^{おほこゑ}で言い放^{はな}ちました。それを聞いて与市^{よいち}は、

「なるほど、きやつめの面魂^{めんこん}は、いかにもこいう悪事^{あくじ}をたくらむような面^{おもて}をしておる。眼^{まなこ}があり口^{くち}もきけるようだから、どんな悪事^{あくじ}でもやれるというわけじやな」

と、扇^{あふぎ}で友治^{ともはる}の顔^{かほ}を散^{さんざん}々に打^{うち}付けました。予想^{よそう}していたことですので、腹^{はら}を立てたわけではありませんが、わざと眼^{まなこ}を見開^{みひら}いて、「おまえはよもや侍^{さむらい}ではなからうな。繩^{なわ}をかかれて動^{うご}きのとれぬ者を、そうやつて打^うつなどして。さぞ気持ちのよいことであろう。それで満足^{まんぞく}できるならいくらでも打^うつがい」

と、顔^{かほ}を振り上^あげてわめきました。与市^{よいち}は腹^{はら}を立て、

「さてさて、大口^{おほくち}をたく愚^{おろ}か者^{もの}め。いくらでも強情^{こじしょう}を張^はつて大口^{おほくち}をたたいているがいい。この与市^{よいち}が、このたび手^てに入^いれたばかりのこの太刀^{たち}の鉄^{かね}の切^きれ味^{あじ}を、おまえの首^{くび}の骨^{ほね}に思^{おも}い知らせてやるから、覚悟^{かくご}しろよ。昔^{むかし}から、死^しんだ首^{くび}が物^{もの}を言^いうためしはないからかう」

と、太刀^{たち}を抜き、あざ笑^{あざわろ}っていました。しかし、与市^{よいち}がその手^てに握^{にぎ}っている刀^{やいば}は、熊井^{くまい}の家^{いえ}に代^か々^々伝^{つた}わつてきた三^{さん}条^{じょう}小^こ鍛^{かじ}冶^じが打^{うち}つた家^{いえ}の刀^{やいば}ではありませんか。

⑩意外なことに驚いて。

れ心消え、しばしあきれられていられしが、喜三太今はこらえかね、与市に飛び掛かからんとする所を大勢取り付き、

「こは狼藉や。何事ぞ」

とひしめけば、喜三太心を静め、仕損じては悪しかりなんと
思い、

①武家の職名。政務の一部局を担当する者。
②無礼。

「さればそのこと。あの咎人めがお奉行様へあまり慮外を申すゆえ、静めんためにて候」

と、まことしやかに偽れば、

「おお、神妙なり。まずまずきやつを引けよや」

と、さてそれよりも、知盛の御前にこそは引き出だす。知盛御覽じ、

「さてさて、憎き咎人。行すべき様もなし。思う仔細のあるあいだ、獄舎にかたく押し込むべし」

④罪人を入れておく所。牢屋。
契約なればとて、喜三太に五百枚の黄金をこそ賜わりけれ。か
たじけなしと押しいただき、東西へ別れしが、無残やな喜三太

⑤いたましいようす。
は思いも寄らぬ禄を受け、手も萎え足も弱々と、引かるる心に
歩みかね、しばしたたずむばかりなり。武き思いの友治も、今

兄弟ははつとし、目の前が真つ暗になり、しばらくあきれていました。喜三太は我慢できなくなり、与市に飛び掛かっけいきました。家来たちが大勢で取り付き、

「この乱暴者。何をやる」

と騒ぎました。喜三太は気を取り直し、この捕物を失敗させるわけにはいかならないと思ひ、「いや、そのことごさいます、あの犯人がお奉行様にも生意気な口をききますので、静めようと思ひまして」

と、まことしやかにウソをつきました。
「おお、神妙なこと。なにはともあれ、あいつを引いていけ」

というので、友治を引き立て、知盛の前に連れ出しました。

知盛は御覽になり、

「さてさて、憎い犯人じゃ。といつてすぐに処罰というわけにもいかぬ。少し考えていることもあるので、獄舎に押し込んでおけ」と言い、喜三太には約束の五百枚の黄金を与えました。

喜三太はありがたく押しただいで出てきました。かわいそうに、思いがけない大金を受け取りながら、手足も萎えてしまうような思ひでしばしたたずんでいました。気強くふるまっていた友治も、これが今生の別れと思われて、思わず後を振りむきました。

① 不思議な因縁。

② 思慮分別のないあわて者。

③ むごいこと。
④ 思い切ることができないこと。

がこの世の別れなれば、思わず後を見返せば、げに兄弟の奇縁とて、互いに目と目を見合わせ、すでに消え入り泣かんとす。友治はつたと睨みつけ、

「やれ、うろたえ者。よくもよくもかくまでは訴人してありけるよな。とても殺生する身ならば、心強くも立ち帰れ。必ず未練をふるまいて、後悔すな」

と睨みつけつつ申せども、こぼるる涙をとどめかね、泣く泣く獄舎へ引かれば、力及ばず喜三太も、涙ながらに立ち帰る。

二つ連れたる雁がねの、一つは獵師に捕らわれて、越路に帰る有様も、まことにかくやと思いやられて、見る人聞く人諸共に、「げにあわれなり。ことわりなるわ」と、皆嘆かぬ者こそなかりけれ。

そこは兄弟、互いに目と目を見合わせ、もはや消え入るばかりに泣きそうな顔をしていましたが、すぐに友治は喜三次を睨みつけ、「うろたえもの。よくもよくも、わしを訴人したな。そこまでのだから、しっかり帰れよ。未練な心を出して後悔などしてはならぬぞ」

と睨みつけながら言いましたが、こぼれる涙をとどめかねて、泣きながら獄舎へ引かれていきました。

喜三太は、どうにもしようがなく、涙にくれながら帰っていきました。連れだつて飛んでいた雁の一羽だけが獵師に捕らわれ、残りの一羽だけで巣に帰っていくときの様子がこんなふうであるうかと思いやられ、見た人も聞いた人もともに、まことにあわれな話であると悲しんでおりました。

熊井太郎孝行の巻 四段

- ① 仏教で、この世は常に移り変わり、一定の状態を保つことはない、ということ。
- ② 世間一般のありさま。
- ③ むなし。
- ④ つらい身。
- ⑤ 牢屋。
- ⑥ 竹・葦・へぎ板などで編んで作った戸。
- ⑦ ちよどそそのとき。
- ⑧ 家のそと。

かくてそののち。有為転変の世の習い、徒し憂き身のはかなさは、連れ立ち出ずる友治を、思わぬ獄屋に入れ置きて、故郷の方へ喜三太は、泣く泣く帰り、我が宿の編戸の外にたたずみて、さめざめ泣いていたりけり。その折節にすさきの前、外面に立ち出で見給いて、

「のう、喜三太殿。帰らせ給うか、嬉しや」

と、そのまま側に走り寄り、

「夫の友治殿はいかに」

とあれば、喜三太承り、

「さん候。舎兄友治は、未だ都にまかり候。まずまず、父上に対面申さん」

と、うち連れ立ちてそれよりも、庵の内へぞ入り給う。父も喜

び出で給い、

「珍しや喜三太。都の首尾はいかに」

「珍しや喜三太。都の首尾はいかに」

めまぐるしく変わるのがこの世というもの。いっしょに連れ立って都に出た兄の友治を、思いがけぬ成りゆきで牢屋にこながせることになった喜三太は、一人で泣きながらもこの庵に帰ってきて、編戸の外にたたずんでさめざめと泣いておりました。ちよどそそのときすさきの前が外に出てきて見つけ、

「あら、喜三太殿。お帰りになりましたか。うれしいこと」

と、すぐに側に走り寄ってきて、

「夫の友治殿はどうしましたか」

と聞きます。喜三太は、

「はあ、兄の友治殿はまだ都におります。その前に、父上にお会いして挨拶をしておかねば」

と、連れ立って庵のなかへ入っていききました。

父も喜んで出てきて、

「おう、喜三太。都ではどうであった」

と聞かれましたので、

⑨ おつと。

- ⑩ そのことでございます。「さこそうろう」の変化した語で、「候」は丁寧の意。
- ⑪ 自分の兄をいう語。
- ⑫ 出ております。「まかる」は謙譲の意。

⑬ 草や木で作った粗末な家。

⑭ ことのなりゆき。

- ①全軍または一軍を指揮統率する人。
②(大将の)目にとまり、会っていただき。
③おほめを受けまして。

④賞金。

⑤驚いて。

⑥立派な。

- ⑦ことわざ。黄金がくさらないのと同じように
武士の名譽も永久のものだ。
⑧社会的地位のある人の妻をいう語。
⑨いつときもはやく。
⑩…てください。尊敬の意の「たまえ」の変化
したものだ。
⑪祖父。
⑫…もできず。
⑬(暖めるために)手に息を吹きかけ。
⑭全身。体は頭・両手・両脚など五つの部分か
らなるという。

とあれば、

「さん候。都にて大将のご見参に入り、御感に預かり奉り、すなわち友治は、都に残り申され候。それにつけ、父上のさぞ貧しく思し召されんとて、黄金持参仕り候。これこれ、御覽候え」

と、かの五百枚の属託を父の御前にさし置けば、ゆうけん見より肝を消し、

「さてめでたき子供かな。まことに昔より子に勝りたる宝はあらじ。汝らを持ちし故、思いも寄らぬ老いの宝をもうけし事」

子ならずして誰のあぐべきこの金を、

「あらありがたや」

とかかえ上げ、

「まことに侍と黄金は朽ちても朽ちせぬ物ぞかし。いかに内方片時も早く辰若に衣服を整え着せてたべ。昨日今日までこの若が、寒き嵐を耐えかねて、おおじが側を離れもやらず、袖の下に入れ臥して手を吹き五体を縮めつつ嘆く姿を見る時は、おお

「はい。都では、源氏の大将にお会いし、我らのことをたいそうほめていただきました。それで、兄の友治は、都に残ることになりました。また、我らのためにと黄金を持参いたして参りました。どうぞ、御覽ください」と、あの黄金五百枚の懸賞金を父の前に置きました。ゆうけんはこれを見てびっくりし、

「なんとまあ、すばらしい子供たちじゃなあ。まことに昔から、子に勝る宝はないというが、本当に、そなたらを持つたおかげで、思いも寄らず年寄りが宝を持つことになってしまったのう」

子供なればこそこうして持ってくるこの金を、ゆうけんは「ありがたきこと」とかかえ上げ、「まことに武士の名譽と黄金とは、決して朽ちることのないものである。一時もはやく、辰若に衣服を整えて着せてやってくれ。今日まで、この子が寒い嵐に耐えかねて、わしの側を離れずに、袖の下に入って寝ておったのじゃ。手を吹き体を縮めて、寒い寒いと泣いておる姿を見ると、この爺の心も消えるような気持ちになっておったのじゃ。」

① あったが。

② 喜びでうっとりとして。

③ ひどく。ひどくの意の「いと」を重ねた「いと」との変化した語。

④ あなたさま。敬意をこめて相手を呼ぶ語。

⑤ ありさま。

⑥ 理解できない。

⑦ くわしい事情。

⑧ やっと。

⑨ 恥ずかしくて顔向けできない。
⑩ どうてい。

⑪ 始めから終わりまでのこと。全部。
⑫ 肌につけて持つ守り札。
⑬ 記念として残したもの。

⑭ 気の毒なことだ。
⑮ 貴人の妻の敬称。奥方。

⑯ 氣を失いそう。
⑰ 『曾我物語』巻九に「来てしばらくもとゞまらざるは、有為転変の里、さりとて二度かへらざるは、冥途隔生のわかれなり」とある。
⑱ 人間世界。仏教では全世界を迷いの世界六種と悟りの世界四種に分ける。人界は迷いの世界の一。
⑲ 仏教で、生ずること滅すること。生きていくことと死ぬこと。

じが心も諸共に消ゆるばかりにありつるに、思えば思えば嬉し
やな。さぞ喜三太、くたびれにてやありつらん。早とく休め」
と言いつて、孫の手を引き惚れ惚れと喜び奥に入り給う、御有様
を見奉り、いとど喜三太胸ふさがり、ただひれ伏してぞ泣き
たり。

北の方つくづく御覧じ、

「のう、いかに喜三太殿。かほどめでたきその上に、御身様の
涙の風情は心得ず。仔細を語らせ給え」

とあれば、ようように顔振り上げ、

「さてさて、面目もなき事どもかな。とても隠し遂ぐべき事な
らず」

と、始め終わりを残らず語り、肌を守りと形見の太刀、文諸共
に投げ出し、またひれ伏してぞ泣きいたり。

いたわしやな北の方、聞くより早く胸つぶれ、心も空に消
え消えと、早絶え入らんとし給うが、ようよう心を取り直し、

文取り上げて見給えば、正しき夫の御筆なり。その文に、
「来たつてしばらくも留まらざるは、もとこれ人界の住みか。生滅

ほんにうれしいこと。喜三太も、さぞや、く
たびれたことであろう。早う、休むがよいぞ」
と言つて、孫の手を引き、うれしそうに奥に
入つていきましたが、この様子を見て、喜三
太は胸がふさがれ、ただひれ伏して泣いてお
りました。

奥方はつくづく御覧になり、
「のう、喜三太殿。こんなにめでたいといっ
ておりますのに、そなたはなぜそんなに涙を
流されるのか。わけを教えてください」

「いやいや、面目もないこと。とても隠しお
おせることはできません」
と言いつつ、この次第を始めから終わりま
で残らず語り、肌のお守りと形見の太刀、そ
れから手紙もいっしょに投げ出し、またひれ
伏して泣いていました。

かわいそうに、すさきの前もそれを聞くなり
、胸はつぶれ、氣を失いそうな状態になり
ましたが、ようやく氣を取り直し、渡された
友治の手紙を開いて読みました。そこにまさ
しく夫の筆跡で、次のように書かれていまし
た。

「常に変化して一時もとどまらないのがこの
世である。

①あの世に生まれかわり、この世から離れていく別れ。

②「后会」か。
③むなしい。

④墓前で涙を流す。中国の北邙山に王侯貴族の陵墓があったことから、「北邙」を墓地の意に用いる。

⑤死んでしまった。
⑥こじき。
⑦自分を犠牲にできない。

⑧つくづく。よくよく。
⑨盛んであることと衰えていること。

⑩出世する。
⑪えん。手づる。

⑫むなしく。

⑬別れ道。

⑭草を結んで枕とし、野宿すること。
⑮植物の名。キク科の多年草。日本の山野に自生する。香気が強く、若葉を餅に入れ、また、葉を灸のもくさきにして利用する。

⑯かわい。
⑰妻のすさきの前。
⑱世に榮えさせよう。

⑲仏教で、この世に生まれ出る前の世。
⑳仏教の考え方で、現世の人の在り方の決め手は、前世での善悪の行ないの結果によるという。

㉑一本の刀。「腰」は太刀を教える語。

㉒できるかぎり。

㉓ひとかどの人物とし。

㉔それにしても。

㉕やるせないことだ。

㉖前もつて。

㉗このように。

㉘予期する。

㉙あなた。やや敬意を含む。

㉚とつくりと。よくよく。

㉛お互いに別れのあいさつをして。

をこの所にとどめがたし。去って再び帰らざるは冥途隔生の

別れ。②こうかいを誰が家にか問わん。見るも聞くも皆あだなり。

しきりに涙を北邙の露に添う。親しきも疎きも多く隠れぬ。惜

しむに甲斐なき乞丐の、身を捨て得ざるこそおろかなれ。

我つらつら世の盛衰をおもんみるに、平家は日々に盛んなり。

源氏は次第に衰えり。しかる時は我々が世に出ずべき便りもな

し。ただいたずらに飢え疲れ、道のちまたの草枕、よもぎの

もとの露霜と朽ち果てん事の悲しさに、たとえこの身はなくな

るとも、愛おしと思う辰若や、父兄弟やその方を、世にあらせ

んがその為に二つなき命を捨て、宝の為に換ゆるなり。皆何事

も親孝行の為なれば、必ず嘆く事なかれ。恨みと思ひ給うな

よ。これと申すも前世より定まる業と思し召せ。思ひあきらめ

給うべし。

この守り袋と一腰は、辰若に得させてたべ。嘆きを留めこの

若を随分育て人となし、父が代わりに立ててたべ。

さるにてもあじきなや。かねてかくとも期したりせば、庵

を出ずるその時に、御身にも辰若にも、とくと暇を乞い乞われ、

そして死というものは、突然にやってくるものであり、それを誰も止めることはできない。一度去ってしまうと二度と会うことができないのは、この世とあの世との別れである。その後誰の家をたずねても会うことはできない。見るものも聞くものもなにもかもむなし。親しい者もそうでない者もすでに亡くなつてこの世にはいない。わが身とて惜しんでもしかたのない乞食のような身であるのに、それでもなおこの世に未練が残るのは、愚かな凡人であるがためであろう。

いま、この世の中の盛衰を考えてみると、平家は日ごとに盛んになり、源氏は次第に衰えていく。そうであれば、我々が世に出る機会もなく、ただいたずらに飢え疲れ、道のほとりの雑草におく露や霜となつて朽ち果ててしまうことであろう。それを悲しく思うがために、たとえこの身は死んでも、かわい我が子辰若や父上・弟、そしてその方がいつか榮えてほしいと思つて、二つとはないこの命を捨て、宝に換えようと思つたのである。すべては、親孝行のためであるから、決して嘆かぬように。また恨まないでほしい。これもすべて前世からの因縁と思つてあきらめてほしい。

このお守りと刀は辰若に持たせてやつてほしい。悲しむのをやめ、この子をできるかぎりしっかりと育てて一人前にし、この父の代わりに世に出してほしい。それにしても、残念なことではある。前か

① いいかげんの。

② 愚かなことこの上ないこと。

③ 見たくて。「まくほしく」は希望の意、「候て」は丁寧をあらわす語。

④ (私の気持ちは) ただこれだけです。

⑤ 害があるので避けた方がよい。仏教では、この世は仏道に入るのに害のあるものが多いと考える。

⑥ 仏の道。

⑦ 西暦一七七八年。

⑧ 十二月の異称。

⑨ 自分で自分に言い聞かせ。

⑩ それにしても。

⑪ 私だって。「自ら」は身分のある女性が自分をさすのに使った。

⑫ そうむやみに。

⑬ どうして歎いていいだろうか、歎くわけにはいかない。

互いの思いも語るべきに、ただかりそめの暇乞い。長き別れとなりし世の、思うは愚痴のいたりなれど、今一度人々の御姿見まくほしく候て、これのみ悲しく候なり。かえすがえすも父上や喜三太や辰若を孝行に育ててたべ。いつまで筆をつくしても名残は尽きず候えども、事急なればかくばかり」と、一首の歌に、

「いとうべき憂き世の中は捨て果てつ今は誠の道を尋ねん

治承二年極月十三日。辰若が母の方へ。熊井太郎左衛門友治判

と、読みも終わらずそのままに、文を顔に押し当てて、ただ消え入りてぞ泣き給う。落つる涙の隙よりも、しばし心を取り直し、

「ああ、誠に嘆くまいぞよ我が心。喜三太殿の思い給わん所もあり」

と、心で心を取り直し、

「のう、いかに喜三太殿、さても夫の友治は日頃の心に違わずし、よくもかくはし給いたり。自らとても、さのみはいかで嘆

らこうなるとわかつていたら、庵を出る時にそなたにも辰若にもしつかりと別れの挨拶をし、互いの思いを語って置くべきであった。簡単に言葉をかかわりただけのあの別れが長の別れとなったことを悔むのはただの愚痴にしかならぬが、いま一度、そなたや辰若の姿を見たいと思う。それだけが悲しく心残りである。かえすがえすも、父上・喜三太・辰若をしつかりと育て、私への孝行としてほしい。どれだけ書いていても名残は尽きないところであるが、気ぜわしいので、あとは、この歌に」

と、一首の歌に最期の気持を託してありました。

「いとうべき憂き世の中は捨て果てつ今は誠の道を尋ねん(いとわねばならぬこのつらい世はもう捨ててしまった。これからは本当のほとけの道を尋ねていくことにしよう)

治承二年十二月十三日 辰若の母へ
熊井太郎左衛門友治 判

読み終わらぬうちに、すさきの前はこの手紙をそのままに顔に押し当てて気も失うばかりに泣いておりました。やがて、気を取り直し、涙をふきながら、

「ああ、嘆いてはならぬ。喜三太殿が心配しているはずだから」

と顔を上げ、
「喜三太殿、わが夫友治は、日頃の考えどおり立派な最期を遂げたようですね。わたくしもこうして嘆いてばかりはおられませぬ。

①なんでもないような様子。
②はうようにして。

③恋しいと思ひもだえ苦しみ。

④冷淡な。つめたい。

⑤この世だけでなくあの世でも夫婦でいようと
思った。

⑥尽きない名残りを惜しむことをいう慣用句。
別れを惜しみ愁猴(「猴」は猿のこと。悲し
む猿。また秋の猿ともいう)は短い手をのば
し、斑狼(まだらのオオカミ。一説に人名と
もいう)はのどをしばって泣いて引き止めよ
うとする意からという。
⑦非常に。

⑧手紙など書いたものを集めたもの。

⑨思いを晴らす方法がわからない。「やる」に
破る意をかける。

⑩涙を流してひどく悲しむ。

⑪遺書。

くべき。さぞお疲れにてましまさん。ひとまず休ませ給えや」
と、さあらぬ体(てい)にのたまえば、喜三太(きさんた)この言葉を頼りにて、ほ
うほう奥(おく)にぞ入りにける。北(きた)の方(かた)、後(あと)を見送り、そのままがつ
ぽと倒れ伏し、もだえ焦(こ)がれて泣き給う。涙(なみだ)ながらにかの文
を巻(ま)き返し巻(ま)き返し、
「さてもつれなき夫(つま)の心(こころ)かな。これ程(ほど)まで思(おも)い詰(つ)めたる事(こと)な
る、二世(にせ)と兼(か)ねたる自(みずか)らに隠(かく)し給(たま)うは何事(なにごと)ぞや。かねてよりか
くあるべきと期(こ)したりせば、愁猴(しゅうこう)が手(て)を出(い)だし、斑狼(はんろう)が涙(なみだ)にても
止(と)むべきものを。悲(かな)しやな、おおじや叔父(おじ)御(ご)をよに大(たい)切(せつ)に思(おも)
しも、友治殿(ともはるどの)と夫婦(ふうふ)一(いっ)緒(しょ)にあるゆえなり。その夫(つま)を先(さき)に立(た)
後に残(のこ)りて、自(みずか)らが何(なん)となるべき。悲(かな)しやな。嘆(なげ)けば親(おや)への
不孝(ふこう)となる。嘆(なげ)かじとすれど忘(わす)れられず。書(か)き集(あつ)めたる藻塩草(もしおぐさ)。
やる方(かた)分(わ)かぬ我(わ)が身(み)や」
と、流涕(りゅうてい)焦(こ)がれて泣(な)き給(たま)う。落(お)つる涙(なみだ)の隙(ひま)よりも、
「げに誠(まこと)、思(おも)い付(つ)きたる我(わ)が心(こころ)。かくあさましき世(よ)の中(なか)にい
つまで物(もの)を思(おも)わんより、夫(つま)諸(もろ)共(ども)に行(い)くべき」
と、思(おも)い定(さだ)めて書(か)き置(お)きし、数珠(じゆず)手に掛(か)け出(い)で給(たま)うが、

あなたは、さぞお疲れになったことでしょう。
ひとまず入って休んでください」
と、元気な様子で言いましたので、喜三太は
安心して奥に入っていました。
すさきの前はあとを見送ってからそのまま
そこに倒れ伏し、激しく泣いておりました。
そして、涙ながらに夫の遺書を何度も読み返
しながらくどくど続けるのでした。
「なんとつれない夫ではありませんか。こん
なにも思ひ詰めていたのならば、二世の契り
を結んだこの私に隠すというのはいったい何
事でしょうか。前からこういうことがあると
わかつていたら、なんとかして思いとどまる
ように説得したものを。なんと悲しいことと
でしょう。父上や喜三太殿を大切に思うのも、
友治殿と夫婦一緒に暮らしているからではあ
りませぬか。その夫に先立たれ、私一人あと
に残ったとて何になりますか。なんと悲し
いことではありませぬか。しかし、こうして
嘆いておれば親への不孝。が、嘆くまいと思
つても夫のことは忘れられぬ。ああ、この思
いをどうすればよいのやら」
泣き続けていたすさきの前は、やがて、
「しかし、いつまで泣いていてもしようがあ
りませぬ。ああ、そうじゃ。この世にこうし
て生きながらえて、いつまでも悲しみにくれ
ているよりも、夫のあとを追ってわたくしも
あの世に行くことにしよう」
と、思い決めて書き置きをし、数珠を手に掛
けて出ようとしてました。が、

①かおつき。
②見よう。「ばや」は希望を表わす。

③完全に。すっかり。
④夢ごこち。

⑤びつたりと。

⑥かわいそうなこと。

⑦冥福を祈ってください。「たぶ」は「給う」より軽い敬意を表す。
⑧いたわしいことですね。

⑨今日が別れの日とも思わないで。いつか別れの日がくることは分かっています。それが今日だとは思いません。
⑩そのうえ。
⑪両親のいない幼子。

「ああ待てしばし。今ひとたび辰若がおもざしを見ばや」

などと申し召し、奥に入りて見給えば、無残やな、幼き者お
おじの側に臥しいたるをそつと抱き、次の間へ立ちのき給えば、
幼な子はつやつや寝入っていたりしが、うつつ心に母の乳房を
押し分けひしひしと抱きつけば、母はいとど悲しくて、また絶
え入りてぞ泣き給う。

「ああ、さて不憫や。この若が今別るるをば知らずして、母ぞ
と思ひ嬉しげに何心もなく臥しけるよ。今宵離れて明日よりは
誰をか頼りにし給うべき。いかに辰若、うつつ心によくよく聞
け。今より後は、父母共にこの世にはなきぞとよ。おおじやお
じごを頼りにて、いかにもして人となり、父母恋しき折々は仏
の姿を拝み申して、よく弔いてたび給え。無残やな、この若が
いつを今日とも思わずし、あまつさえ、みなしごととなりなん事
の不憫やな。のう、辰若、今がこの世の別れなるに少しの間
目を覚まし、母が顔をも見置き給え。のう、辰若辰若」
と、顔と顔を押し当てて、伏しまろびてぞ泣き給う。されど
も辰若は深く寝入りて音もせず、幼心ぞあわれなり。母上今

「ああ、でも、もう一度、辰若の顔を見てから行くことにしよう」

と思ひ直し、奥に入っていくました。見ると、幼い辰若はお祖父さんの側に横になり寝ております。その子をそつと抱きあげて次の間へ連れて行きますと、ぐつすり寝入っていた子が、眠りながら母の乳房を押し分けてしつかりと抱きついてきます。母は悲しくて、また泣いております。

「ああ、さて不憫や。この子が、いま、母と別れ別れになることを知らず、こうして母に抱かれていられると思ひ、嬉しげに何心もなく寝ているのに、いま別れたら、明日から誰を頼りに生きていくのだろう。辰若よ、寝たままでいいからよく聞くのじゃ。今よりのち、おまえには父も母もこの世にはいないのだよ。お祖父さまやおじの喜三太殿を頼りに、なんとかして立派な大人になるのだよ。そして、父や母が恋しくなったときは、仏の姿を拝んで、私たち二人をよく弔ってくださいよ。かわいそうに、この子は母と今日別れるとは思ってもしないでしょうに。そのうえ、みなしごとにしてしまうなんて、なんとかわいそうなこと。辰若、今生の別れだよ。ちよつとでも目を覚まし、この母の顔を覚えておくれ。ねえ、辰若、辰若」
と、顔を押し当てて泣いております。が、辰若はぐつすりと寝込んでいて、泣き声もたてません。なんともあわれなことであります。

- ①無理には起さないでおこう。「まじ」は打ち消しの意志を表わす。
 ②なまじつか。中途半端に。
 ③夫の後を追って死のうと思いい立ったこと。
 ④むなししいこと。むだごと。

は思おもい直なおし、

「いやいや、い①とうは起おこすまじ。なまなかこの子こが目めを覚さまし、母ははが後あとを慕たいなば、思おもいし事こともいた④ずら事こととなりやせん。ただこのままに出いでん」

とて、涙なみだながらに出いで給たまうが、また立ち帰かえり、おおじやおおじごによそながら、心こころの内うちにて暇いとま乞こい。

「これが別わかれぞ辰たつわか若わか」

と、泣なく泣なく出いで給たまいける御おん有あり様さまこそあわれなり。

無む残ざんやな幼おき者もの、夜よの更ふくるに從したがうて寒さむき嵐あらしに目めを覚さまし、

「のう、母はは上うえ様さま。おおじご様さま」

と尋たずぬれば、おおじも驚おどろき走はしり出いで、

「やあ辰たつわか若わか、何なにしにここへ出いでけるぞ」

と、辺あたりを見みれば書かき置おきあり。不ふ思し議ぎに思おもい開ひらいて見みれば、

「夫つま諸もろ共ともに死しする」

との書かき置おきなり。ゆうけん大おきに驚おどろき、

「やれ喜き三さん太たはい⑤ずくにあるぞ。起おきよ起おきよ」

と起おこされて、慌あわてふためき喜き三さん太たは、

母はもうあきらめて、

「いや、もう無理に起おこすことはしないでおきましよう。この子が起おきて目めを覚さまし、母の後あとを慕たって追おいかけてきたりしたら、覚さ悟ごしていたことも果はたせなくなりましよう。もうこのまま出いでいくことにしましよう」

と、涙なみだながらに出いでいこうとしましたが、また戻かえってきて、ゆうけんと喜き三さん太たによそながら心こころの内うちでいとまごいをしました。

「これでお別わかれですね、辰たつわか若わか」

と泣なきながら出いでいくすさきの前の姿すがたはまことにあわれをささうものでありました。

かわいそうに、辰たつわか若わかは、夜よが更ふけてきて、寒さむい嵐あらしが入いりてきたので目めが覚さめました。

「のう、母はは上うえ様さま。お祖父おじいさま」

と言いいますので、ゆうけんも目めが覚さめ、走はしり出いでて、

「やあ辰たつわか若わか、どうしてここに出いてきたのじゃ」と言いいながら、あたりを見みますと、書かき置おきがあります。不ふ思し議ぎに思おもって開ひらいて見みますと、

「夫つまのあとを追おって死しにます」

という母はは親おやの書かき置おきです。ゆうけんはびつくりして、

「おい、喜き三さん太た、どこにいる。起おきろ、起おきろ」

と叫おびました。その声こゑに起おこされて、慌あわてふためいて喜き三さん太たは、

①これこれ。話の内容を省略するときの語。
②それほどの道のり。
③なにやかや。いろいろ。
④みちみち。

⑤非常におそろしい。気味が悪い。

⑥たとえそうだとしても。
⑦いやだと思うことあるまい。「じ」は打ち消しの推量を表わす。
⑧気にしないで。
⑨千年。

⑩今が最後。今はこれまでに。
⑪断ちたい命を断つための紐。「絆」はつなぎとめる綱。

⑫仏を敬うときに唱えることば。
⑬西方浄土にいる仏様。
⑭首をくくって。

⑮覚悟して。

⑯死んでしまったことを表わす。
⑰死に際。

⑱こんな。「かくありける」の変化した語。
⑲息のつくつかかり。

⑳ひどく動揺することのたとえ。

「何事ぞ」

と出ければ、

「かようかようの次第なり。未だ程は行くまじ。とかくは路次にて尋ねべし。まずまずこの子を抱けよ」

と、喜三太辰若抱きつつ、後を慕うて尋ね行く、深山の奥はものすごし。

「よしそれとてもいとわじな、恋しき夫や待つらん」

と、夜間の恐れもはばかり山路を分けてよじ登り、松は千歳を經るなれど、我が身は今が限りぞと、命の絆を枝にかけ、御目をふさぎ手を合わせ、

「南無や西方弥陀如来。縊れて死する自らを、夫諸共に救わせ給え。南無阿弥陀仏」

と、ただ一筋に観念し、はつとばかりの一声に、梢の露と諸共に、消えてはかなくなり給う。哀れ切なる最期かな。

「かかりける所に喜三太親子の人々は、息をばかりに駆け来たり、この有様を見るよりも、肝魂も身に添わず。喜三太やがて走りつき、抱き下ろして見てあれど、はや五体も冷え固まり、

「何事ですか」

と言いなから出てきました。

「これこれのわけだ。まだそんなに遠くへは行くまい。とにかく山路をさがしてみよう。

その前にこの子を抱いてくれ」

と言われて、喜三太は辰若を抱きながら、ゆうけんのあとを追って探し回りました。

一方、こちらはすさきの前。深夜の山奥は気味が悪いほどです。が、

「恐がっている場合ではない。恋しい夫が待っているあの世へ、はやく行こう」

と、恐れずにどんだん山路を分けてよじ登っていきます。

「ここに生えている松は千年も経っているだろうが、我が身はこれが最期」

と思ひ極めながら、命を断つためのひもを松の枝にかけ、目をふさいで手を合わせ、

「南無西方弥陀如来。いま首をくくって死ぬこの私を、夫とともに救ってください。南無阿弥陀仏」

と、一心に唱え、「はつと」という一声とともに、梢の露のように消えてはかなくなってしまうました。まことにあわれな最期でありました。

ちようどそこへゆうけんと喜三太が息せききって駆けつけて来ました。そして、この様子を見るなり、びっくりしてしまいました。

喜三太はすぐに走りより、抱き下ろしました。が、もう体は冷えて固まっています。

①このうえもなくあわれなこと。

②納得できない。
③きつと。

④かくしておくことができません。

⑤京都の地名。平家一門の邸宅がならんでいた。
以下については、三段参照。
⑥くわしく。
⑦終わりまで聞くことができます。

⑧すさきの前をさす。

⑨そうなるのは当然。
⑩自ら命を絶つこと。
⑪そうなるのは当然。道理。

⑫人をのしって言う語。「畜生」は人間に飼われる生きもので、人の道をわきまえず、恩をしらないものとされる。
⑬おまえ。相手を見下している語。
⑭疑問・推量・禁止の気持ち強めるときに用いる語。
⑮本当の。明白な。実の。

⑯怒りや悲しみのために、繰り返し足を地にこすりつけて、また踏みつける動作。
⑰こみあげてくる。

呼べど叫べど甲斐ぞなき、諸事の哀れと聞こえける。

父のゆうけん涙を押さえ、

「いかに喜三太、これは何とも合点がゆかず。いかさま仔細のあるべきに、様子を語れ」

とありければ、その時喜三太、今はつつむもつつまれず、友治が六波羅に捕られし事、始め終わりをつぶさに語れば、ゆうけん聞きもあえず、

「やれ喜三太、それはまことか、情けなや。今まではすさきの前、狂乱して死したると彼が事ばかり思いしに、何、友治も死したるとや。おお道理なり。女房が捨身したるは理なり。さぞや最期のその時に我々を恨み給わん。やれ、そこな畜生め。おのれは氣ばし違いたるか。現在の兄を殺し、これまでは帰りしな。たとえ千両万両給わるとて、未だ若木の子を先立て、明日を知らぬ老いの身の、あの黄金を何にかせん。思えば思えばうらめしや。友治返せ、喜三太。この子が母を返せや」と、あしずりしてぞ泣き給う。せきくる涙をとどめつつ、「思えば思えばおのれめは、我が嫁子の敵なり。討って捨てん」

いくら呼んでも無駄でした。なんとも悲しい有様であります。

父のゆうけんは涙をこらえつつ、

「なあ、喜三太、こんなことになった理由がわしには何とも飲みこめぬのじゃがな。これにはきつと深いわけがあるはず。詳しく話してくれ」

と言います。喜三太はもう隠しごとをするわけにもいかず、友治が六波羅に捕まえられるようになったわけからはじめて、すべての次第をくわしく語りました。それを聞いてゆうけんは、

「喜三太、それは本当か。なんと情けないこと。すさきの前がものに狂って死んだだけだと思っていたが、今の話によると友治も死んだというのか。なるほど、そうであつたら、女房がいつしよに死のうと思つたのも道理じゃ。きつと死に際には、我々のことを恨めしく思つたことであろう。この畜生め。おのれは氣でも違つたか。実の兄を殺し、よくまあここまで帰つてくれたものじゃ。たとえ千両万両もらつたとしても、まだ若い息子を死なせてしまつては取り返しがつかぬ。いつ死ぬとも知れぬこの年寄りが、あれだけの黄金をもらつてどうしようというのじゃ。ほんとうにうらめしい。友治を返せ、この喜三太め。この辰若の母を返してくれ」と、あしずりをして泣いておりましたが、やがて、涙を拭きながら、「思えば思えばおのれめは、我が嫁と子供の敵じゃ。切り捨ててやる」

① 思慮分別のない者。
② ものごとのすじみちがわからない。
③ おさな子。嬰兒。三歳くらいまでの子供。

④ 人の情。なさけ。

⑤ 人としての道を踏みはずした者。
⑥ かえって。

⑦ 謝罪の言葉。

と飛びかかれば、無残やな、辰若はおじごにすがりつき、

「のう、おおじご様、何とておじごを討たせ給うぞ。いかにおじご様、早くそこを逃げさせ給え。ああ悲しや」

としがみつけば、おおじは目もくれ身もふるい、

「やれ、うろたえ者、物を聞け。東西わかぬみどり子さえ親子の仲を悲しみて、剣も恐れず取りつきて、我に降参するぞかし。おのれは道も分きまうべき、もはや壮んの身をもつて、あわれを知らぬ無道人。見るもなかなか腹立ちや」と、また立ち上がり、切ってかかれば、幼き者、

「のう、悲しや」

と泣きわめき、母の死骸に抱きつき、

「のう母様、おおじごのおじごを殺しますに、起きて詫言し給わぬか。のう、母様母様」

と、声をばかりに叫びつつ、

「のう、悲しや母様、何とて物をのたまわぬぞ。ああ悲しや」

と嘆くにぞ、おおじも今はたえかねて、持ったる刀をがらりと捨て、

と飛びかかろうとしました。そのとき、辰若がおじの喜三太にすがりつき、

「やあ、お祖父さま。どうして叔父様を切つたりなさるのじゃ。叔父様、早くそこを逃げてください。なんと悲しいこと」

と祖父にしがみつきました。祖父は目の前が真っ暗になり、身ぶるいしながら、

「やい、愚か者め、よく聞け。なにもわからぬ幼い子でもこうして親子の仲違いを悲しんで、剣も恐れずに取りつき、わしに頼んでおる。おのれは親子兄弟の道をわきまえておる。おのれは親子兄弟の道ありながら、あわれを知らぬ極悪非道の人間じゃ。顔を見るだけでも腹が立つ」

と言っ、また立ち上がり、切りかかろうとします。幼い辰若は、

「ああ、悲しいこと」

と泣きわめき、母の死骸に抱きついて、

「のう、お母様、お祖父様が叔父様を殺そうとしているのですよ。起きていっしょに詫びてください。ねえ、お母様」

と、声を限りに叫んでいます。

「ねえ、お母様、どうして、何も言ってくださらないのですか。ああ、なんて悲しいこと」と嘆いている姿に、ゆうけんも耐えられなくなり、持っていた刀をがらりと捨て、

① 仏教で、先の悪い行ないのために落ちいる不幸な状態をいう。不運なめぐり合わせ。

② 本当に。

③ 教えたとすこと。

④ いたしました。「仕る」は「する」の意の謙譲語。

⑤ まったく。下に打ち消しの語がくる。

⑥ ことがら。わけ。

⑦ わたくし。

⑧ 二度三度。何度も。

⑨ 承知し引き受けること。承諾。

⑩ 自分で自分を傷つけて死ぬこと。自殺。

⑪ しかたなく。やむを得ず。

⑫ 御自分の手で殺して。

⑬ なすべき方法がなく。しかたなく。

⑭ 案じる。いろいろ悩み心配する。

⑮ 決してあるまい。「じ」はないだろうの意を表わす語。

⑯ 友治・喜三太の母。ゆうけんの妻。

⑰ 生きて長くこの世にとどまった。

⑱ 妻と子をたとえる語。

⑲ 自分より先に死んでしまい。

⑳ 老人である自分をたとえる語。

㉑ 生きる。

㉒ くどくどくどくちを言いたてて。

「これはいかなる因果ぞ」

と、東西わかず泣きいたり。

その時喜三太涙をおさえ、

「げにげにそれがしを御憎しみは理なり。まず心を静めて聞きしめせ。我都にてさまさま教訓 仕りに、さらに用い給わぬゆえ、

『その儀ならばそれがしを代わりに立て給われ』

と再三申し候えども、ついに承引し給わず。却つて自害をせんとしたもうゆえ、是非なくかくは仕り、とても生きてはあられまじ。御手にかけて下されよ」

と、涙とともに申しける。おおじも今はせんかたなく、

「さてさて、世の中にこのおおじほど物思う者よもあらじ。若うして主君に後れ、幾程なくて子供が母をも先に立て、生きて甲斐なき老いの身の、子供の為を思いてこそ今までは長らえしに、花も紅葉も先に立ち、古い木の枝のつれなくも、誰を頼りにあるべきぞ」

と、くどきたててぞ泣き給う。

「何の因果でこんなことになったのじゃ」

と、あたりをはばからずに泣いておりました。

喜三太は、涙をおさえつつ、

「いや、私を憎いと思うのは道理でございませぬ。しかし、とりあえず、心を静めてお聞きください。私は都で兄が私に訴人しろと言ったときには、いろいろと意見をし、反対もしました。しかし、一向に聞き入れてもらえなため、それならば、私を訴人してください、と再三申しあげたのですが、それも承知してはくたさいませんでした。逆に言うことを聞かぬと自害をするまで言い張りますので、やむなくこういうことになったわけです。しかし、こうなつては、私も、もう生きてはいられませぬ。どうぞ、手にかけて下さい」と、涙ながらに言いました。ゆうけんもこうなつてはやむをえないことと観念し、「しかし、この世で、この私ほど悲しい思いをするものもおらぬであろう。若いときは主君に先立たれ、やがて、お前たち二人の母も失ってしまった。生きている甲斐もないと思ひながら、年取つての楽しみは子供たちの将来を見届けることと今まで長らえてきたのに、花にも紅葉にも先立たれてしまったような気持ちじゃ。こんな老いほれが、これから誰を頼りに生きていけばよいのであろうか」と、しきりに嘆いていました。

① 不十分であるが、最小限：だけでも、と願う気持ちを表す語。

「いかに喜三太、せめての事に、友治が最期の体はいかに」とあれば、喜三太、

「さん候。獄屋に入り置き候を見捨てて帰り候えば、最期の体は存ぜず候」

「何、未だ殺害には及ばざるか。しからば急ぎ都へ上り、是非に申し訳を致すべし。それもかなわぬものならば、四人一緒に討たれつつ、同じ道に行くべきぞ。はやとく」

とのたまえば、喜三太「げにも」と力を得、母の死骸を納め置き、辰若を肩に掛け、おおじの手を取りそれよりも、都をさして上りしは、哀れなりける次第なり。

これはさておき、都には友治を六条河原に引き出し、難波の二郎太刀取りに相定め、検使として美濃の国関ヶ原の与市、侍 雑掌引き具し、槍長刀の鞘を外し、天下調伏の落書を打ちし咎人とて、はや西向きに引き据えしは、哀れなりける次第なり。

すでにこうよと見えし所へ、喜三太おおじ諸共に、あわてふためき割って入り、

「ところで喜三太、せめて、友治の最期の様子を聞かせてくれ」

と聞かれて、喜三太は答えました。「いや、そのことございます、兄上が牢獄に入るところまでを見届けてそのまま帰ってきましたので、最期の様子は見ておりませぬ」

「なに、では、まだ処罰されていないかもしれぬのだな。そうであるならば、急いで都へ上り、是非とも訳を話すことにいたそう。もし、それでも駄目ということになったら、四人一緒に討たれて、あの世への道を一緒に歩けばよい。はやくしろ」

という声に、喜三太も「なるほど」と、力がわいてきて、すさきの前の死骸を丁寧な葬つたのち、辰若を背負い、ゆうけんの手を取って、すぐ都をさして上っていきました。さて、どうなることでありましょうか。

さてこちらは都であります。友治は六条河原に引き出され、難波の二郎太刀取りの役に決まっており、検使役は美濃の国関ヶ原の与市です。侍や雑掌を引き連れ、槍や長刀の鞘をはずし、天下を調伏し落書の高札を立てた犯人として、もう西向きに引き据えられています。なんともあわれなありさまです。

もうこれまでというところに、喜三太とゆうけんがいつしよにあわてふために駆け込んできました。

⑤ 京都の鴨川の河原で、六条通の東の末のあたりをいう。このあたりは河原が広く、合戦や処刑の場となったりした。
⑥ 死刑が正しく行なわれたかどうかを見届けるための使者。
⑦ 旧国名。今の岐阜県南部。
⑧ 種々の雑事を扱う役人。
⑨ 引き連れ。
⑩ 相手を突きさすため、木製の長柄の先に鋭くとがった穂先をつけた武器。
⑪ 刃先が広くてそりかえった刀で、長い柄をつけたもの。
⑫ 刃物の刀身の部分を治める筒状のもの。
⑬ 平家の天下が倒れることを願ひ、祈禱すること。まじないなどで呪い殺すこと。
⑭ 時事や人物を諷刺・嘲弄した匿名の文書。人目につきやすい場所や権勢家の門などに貼り付けた。道路に落としておいたりした。このあたりの事情については三段参照。
⑮ 罪人。
⑯ 仏教で、西は極楽浄土のある方向とされる。こうだ。いままさにこのことが行なわれようとするときだ。
⑰ (強引に) 割り込んで。

① 命令を受けて事をとり行なう役目の人。

「のうのう、しばらく待たせ給え。お奉行様へ申したき事の候」
その時与市、

「何事ぞ」

と問いければ、おおじため息つきながら、

「さん候。この者はまったく左様の悪事をたくむ者にては御座なく候。長々の浪人ゆえ老いたる親の餓えに臨むを悲しみ、かくは仕り候。その上訴人と申すは、この者の弟にて、即ちこれにまかり候。この子を殺し、老いの身の何しに宝の欲しかるべき。お恐れながらこの黄金、君へ返し奉る。この者の命を助け下されよ」

と、涙ながらに申さる。与市聞いて、

「さてさて、推参なる奴ばらかな。たとえ汝が申す所誠なればとて、これ程までさし極まったる天下の政道 翻したるその例なし。その上きやつめらその悪事なきとても、あらざる事を申し上げ属託をむさぼる事、これまた以ての外悪人。盗賊にもなお勝れり。大事の斬罪 妨ぐる奴ばら、それ追い払え」
と下知すれば、おおじ重ねて、

② 自分の方から押しかけて無礼であること。

③ やつら。大勢の相手をいやしめて言う語。

④ さし迫った。

⑤ 天下の政治の道。ここでは刑を執行すること。

⑥ 急に変更した。

⑦ あいつら。いやしめて言う語。

⑧ 際限なく欲しがる。

⑨ とんでもないこと。

⑩ 首を切る刑。

⑪ じゃまをする。

⑫ 命令。

「しばらくお待ちください、お奉行様に申し上げたいことがございます」

関ヶ原の与市が、
「何事じや」

と尋ねましたので、ゆうけんは大きな息をつきながら、

「はい、この者はまったくそのような悪事をたくらむような者ではございません。長く浪人をしておりまして、親が食うにも困っておりますのを悲しんでこういうことをしたのでございます。そのうえ、訴人いたしましたのは、この者の弟で、ここに控えております。この子を殺してまでこの年老いたものが、どうして金を欲しいと思うでしょうか。おそれ多いことですが、このお金はお返しいたしますので、この者の命をお助け下さい」
と、涙ながらに申しあげました。与市は聞いて、

「さてさて、わけのわからぬことを言う奴らじゃ。たとえ汝の申すところが本当であったとしても、ここまでことがすすんできた以上、翻すわけにはいかぬし、これまでもそのような例はない。その上、きやつがそのような悪事を犯しておらぬとしても、ありもしない事を申し上げ、懸賞金をだまし取ったのは大罪であり、盗賊よりもなお悪い罪じゃ。これから大事な処罰を行なおうとするのに、邪魔をされては困る。すぐに追い払え」
と命じましたので、ゆうけんはさらに、

①あなた。やや目下の相手を親しんで言う語。

②天の魔王。仏教で、仏道の妨げをなすと考えられている。

③あなたがた。みなさん。

④殺して下さい。「給わる」は非常に敬意を払った言い方。

⑤がばつと。ここでは地面に顔や体が打ち当たるほどの勢いで急に身を伏せるようすを表わす。

⑥たおれて。

⑦なさない。

⑧自分がやったこと。無分別、または不徳の結果を反省する気持ちを含む言い方。

⑨連れてきた。

⑩いかにも。
⑪教養があり、上品なこと。

⑫お亡くなりになり。

⑬あきらめた。
⑭目の前が真っ暗になり。

⑮これはまた。「こは」を強めた言い方。

「今ははや力なし。やあ、いかに友治、さてさて、御事はいかなる天魔が入り変わり、かかる事はたくみしぞ。孝行にてはあらずして、これに増したる不孝やあらん。いかに方々、あの咎人と我々を一緒に害し給われ」

と、河原にがっばと伏しまろび、声を上げてぞ泣き給う。友治、涙を押さえ、

「さてさて、あさましき姿を御目にかけて奉る。これと申すもそれがしが身より出せる事なれば、人に恨みも候わず。はやはや帰らせ給え。いかに喜三太、何とてここまで具して来たるぞ。お供申して帰るべし」

と、さも高尚に申すとき、幼き者は走り寄り、「のう父上、何とて縄はかかり給うぞ。母様はむなしくならせ給うわ」

と、抱きついて嘆くにぞ、思いきったる友治も、はつと目もくれ心消え、

「何、母は死したるとや。こはそもいかなる事ぞ」

とて、伏しまろびてぞ泣きいたり。与市今は堪えかね、

「もうこうなつてはしかたがありませぬ。友治よ。そなたはどういう天魔に魅入られて、そのようなことを巧んだのじゃ。そんなことは孝行とはいえぬぞ。これ以上の不孝があるうか。皆様、あの咎人と我々を一緒に殺して下さい」

と言いながら河原に倒れ、声を上げて泣いておりました。友治は、涙を押さえながら、「さてさて、あさましい姿を人目にさらしたりはなさいませぬ。これというのも私の身より出たことですから、だれを恨みにも思いません。はようお帰りなさいませ。喜三太よ、どうして父上をここまで連れてきたのじゃ。お供して帰れ」

と、覚悟を決めた態度で言いました。が、辰若が走り寄り、「父上、どうして縄にかけられておりますのか。母様はお亡くなりになられたのに」と、抱きついて嘆きます。覚悟を決めていた友治もこれを聞いて目の前が真っ暗になり、「なに、母は死んだとな。これはどういうことじゃ」

とはげしく泣き伏しました。与市はもうがまがでできなくなり、

① 捕えられている罪人。

② 荒々しく。乱暴に。

③ 僧侶。出家して仏道を修める人。

④ おろかな僧。僧が自分を謙遜して言う語。
⑤ 欲しいと望み願うこと。

⑥ すじみちを通さないで無理に。
⑦ 警戒して守る役目。

⑧ 「押し取り込め」の転。とり囲んで中から出られないようにすることを強めた言い方。

⑨ これまでに聞いたことがないこと。
⑩ 乱暴者。

⑪ 突いてしとめよ。

⑫ 大勢が押し合つて騒ぎ立てれば。

⑬ 約一・二尺。一尺は約〇・三三メートル。

⑭ けなげで感心な。

⑮ 奪い返そう。

⑯ 「餓鬼」は子供の意。とてもできさうにないことをたとえたもの。

「大事の囚人。時刻うつるに。それ引き立てよ」

と、荒げなく言いつければ、侍ども、大勢取り付き引き分けたり。

その時、太刀取り後ろに回り、すでにこうよと見えし所に、見物の中より沙門一人すると走り出で、物も言わず太刀取りを突きつけ、囚人取つて引き立て、やがて縄を切りほどき、

「これお奉行、この囚人は愚僧が所望致すべし。重ねて御咎めあらば六波羅殿にて申し訳を致すべし。いざ歩めよ」

と、理不尽に連れ行かんす。与市をはじめ、警護の侍真ん中におつとり込め、

「やれ、ここな気違い坊主、前代未聞の狼藉者、一緒に討ちとれ。突きとめよ」

とひしめけば、時にかの僧、衣の下より四尺ばかりの大太刀をぬつと抜き出し、腕捲りし、

「さて、しおらしき奴ばらかな。もはやかように愚僧が手に入りたる者を奪い返さんと云うは、鬼の手にある物を餓鬼がうかがうに異ならず。道を妨げ後悔するな」

「大切な犯人だ。時間もすぎたぞ、それ、引つ立てていけ」

と、荒々しく言いつけましたので、控えていた侍たちが大勢よつてきて、引き離しました。やがて、太刀取りが友治の後ろに行き、もうこれまでかと思われたその時、見物の中から一人の僧がすると走り出で、物も言わずに太刀取りを突きつけ、友治をつかまえて引き立て、すぐに縄を切りほどきました。そして、

「これ、お奉行様、この犯人は私がもらつていきます。文句があれば、六波羅で申し開きをいたしましょう。さあ、歩け」

と、無理やりに連れて行こうとしました。与市をはじめ、警護の侍たちは、坊主を取り囲み、

「この気違い坊主め。なんという狼藉を働くのじゃ。いっしょに討ちとれ。それ、突け」と大騒ぎです。と、その僧は、衣の下より四尺ばかりの大太刀をぬつと抜き出し、腕まくりして、

「さて、愚かな奴らじゃ。このように、わしがすでに手に入れたものを奪い返そうとするのは、鬼の手にあるものを餓鬼がとうとするようなもの。邪魔をしたりして、後悔するなよ」

- ①すべてを言うまでもなく。
- ②手に届くあたり。
- ③太刀を振って、の意か。また、向きを変えて、の意か。
- ④このうえなく臆病であること。

- ⑤左側。
- ⑥右側。

- ⑦あれほど。
- ⑧まったく。下に打ち消しの語がくる。

- ⑨それにしてもまあ。「さても」を二つ重ねて意を強めている。
- ⑩僧である相手を敬った呼び方。

- ⑪はつきりせず疑わしいこと。

- ⑫したこと。
- ⑬そのような。「しかある」が短縮されてできた語。
- ⑭神仏がごらんになること。
- ⑮恐れ多い。

- ⑯八幡神をまつった神社。初段参照。
- ⑰神仏が力を加えて守ること。
- ⑱予想以上に。
- ⑲成し遂げた。

と、言いもあえず太刀抜きかざし、手元に進む奴ばらを二三人切り倒し、ふって掛ければ堪えずして、今に始めぬ臆病至極の平家の侍、

「わっ」

と言うて崩れかかる。

喜三太友治諸共に、弓手馬手へ切つてまわれれば皆散り散りに逃げ失せて、さしも広き六条河原に人げもさらになかりけり。

その時、親子の人々手を合わせ、

「さてもさても御僧様は、いかなるゆえに我々を救うて給わりしぞ」

沙門聞いて、

「おお、御不審はもつともなり。則ち今度の落書は、元来愚僧が仕業なり。しかる所に咎なくして御身を罪に沈めては、天の照覧もつたいなし。命に代えても助け参らせんため、これまで参り候に、八幡宮の御加護にて思いの外にしおおせたり。して方々は何人ぞ」

その時友治、

と、言うやいなや、太刀を抜きはなち、手元に近寄ってくる侍たちをたちまちのうちに二三人切り倒し、さらに切りかかるうとしますと、侍たちはがまんできず逃げていきました。いまに始まったことではありませんが、平家の侍の相変わらぬ臆病ぶり、で、「わっ」と逃げ散ります。

喜三太と友治もいっしょになって、右に左にと切つてまわりましたので、皆散り散りに逃げていってしまい、広い六条河原に人気はなくなっていました。

親子は、手を合わせて感謝しながら、「ところで、お坊様は、どういうわけで、我々をお救いくださったのですか」

と尋ねますと、僧は、「いや、不審に思われるのも当然。今回の落書はもともとこのわたくしがやったこと。なのに、この身は咎められず、そなたを罪に沈めてしまつては、天にそむくことになりま。それで、命に代えても助け出そうと、ここまですてきたのですが、八幡宮の御加護もあつて、思いがけずうまくいきました。ところで、あなたがたはどういう人たちですか」

①なにを隠そう。
②源義朝。初段参照。
③譜代の武士。

④源義経の幼名。初段参照。
⑤源義経の従臣。初段参照。
⑥京都の地名。「しゅじやく」「しゅじやく」の転。午王姫の館がある場所。もともと朱雀大路（しゅじやくのおおし）は、平安京の中央を走る道路であったが、平安末期になると右京は完全に衰退し、牛馬の放牧地や耕作地とするものまであらわれた。中世以後さらに農村化が進み、室町時代以後は、朱雀大路も「しゅじやく」と呼ぶことが普通となり、村の名前として用いられるようになった。
⑦貴人の邸宅。
⑧お入りになっておられます。「まします」は「ます（Ⅱ）ある・いる」の尊敬語のさらなる尊敬語。
⑨信仰する人には、神仏の加護によって御利益があるという慣用句。信あれば徳あり。
⑩正しいところがあれば天の正しい道が行なわれる。
⑪不思議な縁。弁慶と熊井太郎たちが出会ったことをさす。

「今は何をか包むべき。義朝公の御内にて、熊井ゆうけんがせがれどもにて侍う」

と、始め終わりをつぶさに語れば、

「何、熊井太郎とや。それなるは喜三太か。我こそ牛若君に今奉公し奉る武蔵坊弁慶なり。すなわち朱雀午王が館にしのでびて御入りましますなり。急ぎともない、君の御目にかけて申さん。

いざいざこなたへ」

と、うち連れ立ちて帰らるる。

「信あれば徳を得る。誠あれば天理あり。げに主従の奇縁なる

は」

と、感ぜぬ者こそなかりけれ。

「もう、何もかくすこともありません。私どもは、源義朝公の家来でありました熊井ゆうけんとそのせがれどもでございます」

と、自分たちの素姓をくわしく語りました。

「なに、熊井太郎殿か。とすると、そこにいるのは、弟君の喜三太じゃな。私は、牛若君にお仕えしております武蔵坊弁慶でございます。いまから、ひそかに朱雀野の午王姫の館にいる牛若殿に会いに行こうとしていたところですよ。いつしよについて来なされ。牛若君と対面できますぞ。さあさあ、こちらへ」と、連れ立って帰っていききました。

信あれば徳を得ることができ、誠を持つてことにあたれば、天が味方するとはこのことであります。まことに、主従の縁のなせるわざであると感心しないものではありませんでした。

熊井太郎孝行の巻 五段

- ①草ぶきの家。
- ②世の中で栄えるであろう。
- ③京都の地名。四段参照。
- ④鎌田兵衛正清。初段参照。
- ⑤熊井友治・喜三太ら。四段参照。
- ⑥ことの始めから終わりまで。

- ⑦あなた。やや目下の相手を親しんで呼ぶ語。
- ⑧前々から。

- ⑨主従としての不思議な縁。四段参照。

- ⑩止めることができないで。

- ⑪言葉のはし。

- ⑫世間に対する名誉。
- ⑬ちよとどそのとき。
- ⑭物事に感心することの尊敬語。天皇、土皇に使う。ここでは源義経に使っている。
- ⑮（目上の人から）受ける意。
- ⑯：申し上げる。謙譲の意を表す。
- ⑰気付かないうちに受けた神仏の加護。
- ⑱：どうだ。呼びかけの言葉。
- ⑲できるかぎり。
- ⑳ほかの人々よりすぐれて。

かくてそののち。御曹司牛若は、ごう親子の情けにて月もれかかる草館、いつか世に出ん、朱雀野の鎌田が館にぞおわします。かかる所へ武蔵坊、熊井親子の人々をともない御前にまかり出で、始め終わりをいちいち残らず申し上げる。君嬉しく思し召し、

「珍しやゆうけん。御事が事はかねがね母様の御物語にて聞き及びし。これというも主従の奇縁尽きざるゆえなり」

と、御喜びは限りなし。ゆうけんも嬉し涙せきあえず、

「さてさて、ありがたき御言葉の末、これまたひとえにゆうけんが長生きしたる面目なり。良き折柄に巡りあい、御感に預かり参らする、冥加の程のありがたさよ。いかに兄弟の者ども随分忠をぬきんで、君を御世に出し申せ。あらありがたや」

と、喜び合うこと限りなし。

友治兄弟も謹んで、

さて、御曹司牛若は、午王姫親子の情けにより、いつか世に出る時が来るはずと思いつつ、朱雀の里にある鎌田の館に住んでおりました。そこへ武蔵坊弁慶が熊井親子を伴って訪れてきて、すぐに、牛若の前にいき、ことの次第をくわしく報告しました。牛若はとても喜んで、

「久しぶりじゃ、ゆうけん。そなたのことは、母上のお話で前々から聞いておったぞ。これというのも主従の縁が尽きておらぬということじゃなあ」

と、親しげに声をかけました。ゆうけんも嬉しくて涙の流れるのを押さえることができません。そして、

「ありがたき御言葉の数々、これもこのゆうけんが長生きしたおかげです。しかも、御曹司御出立の時にあうことができ、親しくお言葉をかけていただき、なんと、よい巡り合わせでしょう。まことにありがたいことです。

お前たちも心を尽くし、忠義に励んで、御曹司を世に出さねばならぬぞ。ああ、本当にありがたいことでございます」

と、お互いに喜び合っておりまして。友治兄弟も、

- ①侍として受ける恩恵。
 ②その家で代々受け継ぐこと。
 ③御主君。
 ④落書の高札の罪で六条河原で斬首の刑を受けそうになったこと。四段参照。
 ⑤八幡神を祭った神社。源氏の氏神。初段参照。
 ⑥神仏が力を加えて守ること。
 ⑦めでたいしるし。

- ⑧こうして。
 ⑨考え。

- ⑩おっしゃるので。「仰す」は「言う」の尊敬語。
 ⑪お聞きして。「承る」は「聞く」の謙讓語。
 ⑫そのことでございます。目上、または親しくない相手に用いる。
 ⑬皇居のある都。京都のこと。
 ⑭率兵する。兵を集めて戦いを起すこと。
 ⑮陸奥の国の別称。今の福島・宮城・岩手・青森の四県と秋田県の一部に当る。
 ⑯都から地方へ行くこと。
 ⑰藤原秀衡。平安末期の武将。源頼朝と対立し、義経を庇護した。
 ⑱奥の方。奥州地方のこと。
 ⑲集め。
 ⑳地方から都に行くこと。
 ㉑みなさん。
 ㉒こと。

- ㉓同意した。賛成した。
 ㉔なるほどそのとおりだ。

- ㉕それならば。
 ㉖東方。京都からみて東の地方。奥州方面。

「まことにもつて侍 冥加の尽きざるゆえ、譜代相伝の御主に巡りあい、殊にはまた、先時の害を免れし事、これと申すも八幡宮の御加護にや。君御運を開かせ給わん御瑞相、あらめでたしめでたし」

と、ごうを始め御母上諸共に、御喜びは限りなし。

その時牛若、

「いかに弁慶、いつまでかくてあるべきぞ。平家を亡ぼすべき思案はいかが」

と仰せらるれば、武蔵 承り、

「さん候。平氏の運命盛んなれば、帝都にて旗を上げん事、なかなかかないがたく候べし。ひとまず御供申し奥州へ下り、秀衡を頼ませ給い、奥方の軍兵をもよおし、討つて上る程ならば、おそらく日本半分は御味方に属し申すべし。各々この儀はいかに」

とあれば、いずれも「もつとも」と同じける。牛若「げにも」と思し召し、

「しからば東に下るべし。用意せよ方々」

「まことに、侍冥利に尽きる思いがいたします。我が家が代々お仕えしてきた御主君に巡り会うことができまして、さらにまた、あやういところを救っていただきました。これというのも八幡宮の御加護でございます。これらはみな、御曹司の御運がこれから開けようというよい先触れでございます。なんとめでたいことでございます」

と、牛若や母上ともども喜んでおりました。

さて、牛若が、

「ところで弁慶、いつまでもこうしてはおられぬが、平家を亡ぼす名案はあるか」と尋ねました。弁慶は、

「はあ、それが、まだ平氏の勢いは当分尽きる心配がございません。ですから、都で旗をあげることはなかなかむづかしいかと思われまます。とりあえず、奥州に下り、藤原秀衡を頼つて行くのがよろしかろうと思われまます。そこで、奥州方の軍勢を集めたいうえで、都に攻め上るということにすれば、おそらくこの日本の半分は御味方になってくれるはずですが、いかがですか、この考えは」

と提案しました。皆も「もつともなこと」と賛成しました。牛若も、なるほどそのとおりである、とお考えになり、

「では、東に下ることにいたそう。さあ、すぐに用意せよ」

- ① 尼になった貴婦人の敬称。尼君。戦死した鎌田兵衛正清（初段参照）の妻。
- ② 社寺にまいること。
- ③ よそおい。身ごしらえ。
- ④ 東国へ行く道へむかつて。

- ⑤ 大したことではない。
- ⑥ どれほど。
- ⑦ うれしくて出る涙。午王姫は牛若と夫婦になる願いがかない、喜んでいる。
- ⑧ 雪と雨がまじって降ってくるもの。「見」にかける。以下、降る・雪・朝風・寒きなどの縁語で文をかざる。
- ⑨ 雪のように白い肌。
- ⑩ うつとりと心奪われるようす。
- ⑪ 朝、強く吹く風。
- ⑫ 京都市の東部を流れる川。
- ⑬ 川の水流や流れてくるものをせきとめるように、杭（くい）を打ち並べ、これに横木などを渡した設備。
- ⑭ いかにもするどいように。
- ⑮ 菅（すげ）や藁（わら）などで編んで作った笠。「編み」は漁夫の縁語。
- ⑯ 愛想がない。義経の様子を表現するとともに「すげの笠」を言い出す言葉となっている。
- ⑰ 心引かれ、かわいいと。
- ⑱ 二重染めの帯。一度染めた上に他の色で模様を染め出したもの。二重にまわした帯とも。「二人」の意をかける。
- ⑲ 昔の旅は夜がまだ明けない内に出発した。
- ⑳ 京都市左京区を流れる川。夜がしらじらとあける意をかける。以下、川づくしとなっている。
- ㉑ 男女の浮いたうわさ。
- ㉒ 立てるな。「な・て」は禁止を表わす。

「承り候」

と、熊井ゆうけん、幼き者を鎌田の尼公に預け置き、牛若夫婦、熊井兄弟、武蔵坊、物詣でのいでたちにて、はや寺々の鐘の声、鳥の鳴く音と諸共に、東路さしてぞ行く道の、

牛若ごうの姫 道行

露はものかは。いかばかり、うれし涙の袖に余りてみぞれ降る、雪のはだえも惚れ惚れと、わきの下吹く朝嵐、誘われ出ずる鴨川や、瀬々のしがらみするどげに、漁夫の営み寒き夜に、編み笠うち上げ眺めやり、すげなきすげの笠深く、いとしらしいといとしいと、手に手をとりて二重帯、じつと締めつつ結びさげ、君が初めて旅の空。

雲間に星のちらちらと、夫を尋ねて恋心、人目しのべば闇こそよけれ、都の内は何とぞし、明けぬ先にと思えども、夜はほのぼのと白川や、波は立つとも浮き名な立てそ。

と命じました。「承りました」と、老いた熊井ゆうけんと幼い辰若は鎌田の尼公のところまで世話になることになり、牛若と午王姫夫婦、熊井兄弟、武蔵坊弁慶は参詣者に姿をかえ、寺々から聞こえる鐘の音や鳥の鳴く音とともに東路をさして出ていきました。

牛若午王姫の姫 道行

午王姫は牛若と連れだつて旅のできるのがうれしくてなりません。草の葉に置く露をものともせず出ていきます。うれしい涙が降らせるみぞれなのでしょうが、雪もちらちら降り出してきましたが、わきの下を吹いていく嵐に誘われるようにして鴨川のあたりに出てきました。川のごみをせき止めるしがらみは鋭くのがっており、今日一日の寒さが思われますが、編み笠を少しあげて、牛若の方を見つめます。しかし、牛若の方は笠と同じようにすげない様子、笠を深くかぶったままです。いとしい思いを胸に秘めつつ手に手を取って二重帯を締め、初めていっしょに旅に出るのです。雲間に星がちらちらと見えています。恋しい人を探ねて行くときは、人目をはばかりますから、闇夜の方がいいのです。なんとかして明けぬ先に出ようと思えますが、白川のあたりで夜はほのぼのと白みはじめました。川には波が立っていますが、浮名は立てないようにしたいもの。

- ① 橋や縁側の縁に設けた欄状の設備。人の墜落を防ぐため。また装飾のためのもの。
- ② 奈良県北西部の生駒郡を流れる川。紅葉で有名。
- ③ 紀ノ川の、奈良県を流れる部分の称。流域の吉野山は桜で有名。
- ④ 京都盆地北西隅、嵐山の下を流れる川。それより上流を保津川、下流を桂川という。いかだで木材や燃料用の木炭を上流から京都の市街へ運んでいた。
- ⑤ 夫婦または男女の間柄を川にたとえた言葉。「蹴上」は地名。蹴上の清水は京都市の粟田口神明山(＝日向(ひむかい)大神宮)東南麓にあったというが、今は所在不明。牛若丸が東に下ったとき、ここで平家の侍、関ヶ原与市の一行の馬が水を蹴上げて、その泥が牛若丸にかかったことから争いとなり、牛若丸はこれを斬り、馬を奪って去ったという話があり、泉の名も地名もこれに基づくという。
- ⑥ 清水の落ちる様子を表す語。あとの早く早くの意の「とくとく」を引き出す語となっている。
- ⑦ 尊敬語。「はやくいらっしゃい」「ござる」は「来る」の京都語。
- ⑧ 京都市の地名。山科盆地にあり東海道の出入口に当たる。
- ⑨ 京都市の地名。東海道の京都への入口に当たる。
- ⑩ 馬をひいて人や荷物を運ぶのを仕事とする人。寒い。また曆上の二十四節季の一。小寒と大寒。一年で最も寒い時とされる。馬子の歌の文句は「日を暮らす」まで。馬子唄を歌い込んだ民謡などに見える。
- ⑪ 十二月の異称。
- ⑫ 京都市東部にある地名。恋が山のように多い意をかける。
- ⑬ 京都市南部の地名。諸羽神社がある。
- ⑭ 道が十字に交わっているところ。
- ⑮ 「もろはの宮」を引き出す語となっている。
- ⑯ 四の宮河原にある神社。
- ⑰ たどりゆくにも手がかりがない。
- ⑱ 「横木」は滋賀県大津市にある地名。「繩手」は田の中のまっすぐな長い道。また、単にまっすぐな道にもいう。こは、横木へ向かう繩手道の意か。
- ⑳ さあこちらへ。
- ㉑ 「言う」の尊敬語。
- ㉒ 四の宮河原付近の地名。
- ㉓ 馬場で走らせた馬を留めるところ。
- ㉔ 二・三・四段に登場。本作の悪役。
- ㉕ 六波羅で行なう警護の役。
- ㉖ 道の途中。
- ㉗ 小さい鷹。ハイタカ・コノリ・ツミの類。鷹狩りに用いる。
- ㉘ 「はしたか」の転。小鷹の一。
- ㉙ 一定の場所に留まらせ。

橋の欄干に手をうち掛けて、龍田川には紅葉を流す。花をく
 だすは吉野川、大堰川にはいかだを流す。君と我とが妹背の川
 は、憂さと辛さの思いを流す。流れ落ちくる蹴上の清水、しづ
 しぶとくとくとくとくととござれ。

後や先やと行く道の、はや日ノ岡も粟田口。上り下りの馬子
 の歌に、「寒の師走も日の六月も、駒の手綱で日を暮らす」。

これも誰ゆえ妻子のために、胸には恋の山科や。藪の下道分け
 行けば、四の宮河原四つの辻。夫婦うち連れ諸共に、諸羽の宮
 を伏し拝み、たつきも知らぬ山道の、横木繩手に差しかかり、
 人の見る目もいかなれば、うち連れ立ちて行くべきに、いざ
 こなたへとこのたまいて、十禪師の馬場先にて、後より来たる
 人々を、今や今やと待ち給う。

待ちぬる武蔵は見えもせで、美濃の国の住人、関ヶ原の与市
 親子諸共、六波羅の一番を務めて帰る道すがら、小鷹 鷓 据え
 させ、あたりほとりの小鳥どもを追立て蹴立てさんざめかいて
 通りける。御曹司は御覧じ、

「さてもゆゆしき大名かな。源氏東の門出に、平家方の郎等に

橋の欄干に手をかけて、龍田川には紅葉が
 流れ、桜の花が流れてくるのは吉野川、大井
 川にはいかだを流す、などと思いつつ、あな
 たと私の夫婦の川には憂さと辛さの思いを流
 すのでしょうか。その流れが落ちていく先は
 蹴上の清水、雫がとくとくと流れ落ちていま
 すが、早く来てくださいたいと言うようです。

後になつたり、先になつたりしつと行くと、
 もう日岡の粟田口です。上り下りの馬子の唄
 う馬子唄が聞えてきます。「寒の最中の師走
 も日の六月も、駒の手綱で日を暮らす(寒い
 十二月も暑い最中の六月も馬の手綱を取って
 一日を過ごしている)」。これも誰のためでも
 ありません、かわいい妻や子のためでしょう。
 午王姫の胸のなかには恋心でいっぱいです。や
 がて山科に着き、藪の下道を分けて行きます
 と、四の宮河原の四つ辻に出ました。夫婦連
 れだつて、諸羽神社の神を拝み、案内も知ら
 ぬ山道を越え、横木繩手に差しかかったあた
 りで、人通りも多くなってきましたので、人
 目をはばかり、「こちらへ」と招き寄せ、十
 禪師馬場で、後から来る人々を今か今かと待
 っておりまして。

が、待つていた武蔵坊弁慶の一行があらわ
 れる先に、美濃の国の住人関ヶ原の与市が親
 子いっしょに六波羅の一番を勤めて帰るとこ
 ろに出会いました。小鷹ハイタカを据えあた
 りの小鳥を追立て蹴立てて大きわざをして
 通り過ぎていきました。御曹司はその様子を
 御覧になり、
 「なんともえらそうにしている大名じゃ。」

31 「さんごめかして」の音便形。大勢でにぎやかに声を立てて騒ぎながら。
32 こは、うとましい、の意。
33 広大な所領を持ち、武家の統領として地位のある者。
34 武士で、主人と血縁関係のない家来。血縁関係のある家来を「家子（いえのこ）」とし、区別した。

1 あやしいこと。あつてほしくないこと。
2 まあよい。
3 よく言われたいくらいすばらしい。なみー通りではない。
4 きつと。
5 わけ。
6

7 家来となって主人のために働くこと。
8 そうならば。
9 私。
10 できるだけ。
11 家来として雇い、俸禄を与えること。またその俸禄。
12

12 困ったための苦しさ。
13 伊勢神宮。
14 神社にお詣りすること。
15 いたす。「…する」の謙譲語。

16 なんとも言えないくらいすばらしい。

17 人情味があふれている様子で。または、魅力的で。
18 驚いたときに発する言葉。もと、皮膚が白色となる癩（ハンセン病）。誓いを破るときはこれにかかってもかまわない、ということに誓いの言葉となり、さらに驚きを表現する言葉となった。
19 ひどく驚いた。もと、生きている動物などの肝をえぐり取られる意。

遭うたる事こそ奇怪なれ。よしよし、時世に従うならいぞ」

とて、小松の影に立ち寄り給い、夫婦諸共笠をかたづけおわします。与市馬上ながらつくづく見て、

「さてまあ若者ども、いかさま由あるものならん。いかにそれなる旅人、汝らが体を見るに、いかさま兄弟と見ゆる。もし奉公の望みにてやある。さもあらばそれがしが成程扶持して得さすべし。いかにいかに」

と問いかくれば、牛若なおも笠をかたづけ、聞かぬ顔にてましませば、ごう余りの切なさにて、

「さん候。我々は左様の者にては御座なく候。心中に深き念願候いて、大神宮へ参宮 仕るものにて候が、連れもあまた御座あれば、それを待つて」

とうち笑い、ちらと見上げしその顔ばせ、どうも言われぬ笠の内、見るより早く関原も、馬よりひらりと飛び降りて、やがて御手をしかと取り、

「さてさて、姿と言い顔ばせと言い、御志の情らしきに、白癩生き肝を取られたり。いかなる御願か知らねども、物も言われぬ神

源氏が東に向かうという門出に、平家方の侍に会うのはうとましいことじゃが、これも時世に従えということか」

と言いつつ、小さい松の木蔭に寄り、夫婦ともに笠で顔を隠しておりました。与市は二人を馬上からじつと見て、

「さて、見なれぬ若者たちじゃ。きつとわけのある者であるう。おい、そこにいる旅人よ、そなたらの様子を見るに、どうも兄弟のように思われるが、もし奉公の望みでもあるなら、わしが召し抱えてやつてもよいが、どうじゃな」

と問いかけてました。牛若は笠をかたむけて、聞かぬような顔でいましたが、午王姫は困って、

「いえ、我々はそのような者ではございません。深く願うことがございまして、伊勢の大神宮へ参詣に参るところでございます。連れもたくさんおりますので、それを待つているところでございます」

と笑いながらちらりと見上げたその顔たちはなんともいわれず美しいものでした。それを見るなり、関原与市は馬からひらりと飛び降り、午王姫の手をしっかりと取って、

「いやいや、その姿といい顔だちといい、まことに美しい方じゃ。もう私は魂を抜かれたような気持ちでおる。どんな願いがあるのかは知らぬが、物言われぬ神や仏を頼りにするよりも、

① 当面する。

② 栄えているのをたとえる。

③ ほんとうに。「神ぞ」または「真ぞ」で、神に誓っての意という。

④ この世。

⑤ 命を取るもの。美人のこと。

⑥ 「世界」は遊興の場・廓の意。与市は午王姫と自分を廓から遊女と抜け参りするのになたえる言葉。

⑦ 笑うべきことですな。

⑧ 物事の道理をわかつていないこと。

⑨ 思わせぶり。

⑩ びっくりして立ち上がれないで。

⑪ 不意のことに驚いて発する語。笠をとつたら牛若が美男だったので与市は驚いている。
⑫ なんともいえず。
⑬ 午王姫と牛若をならべおいて。美しい午王姫と牛若をそれぞれ花と紅葉にたとえている。
⑭ 幹が二またに分かれている木。気持ちが二方向(男色と女色)に分かれていることを表す。
⑮ 切ない恋心を風が身にしみるのになたとえた語。
⑯ 脳天をどっかといためつけられ。

⑰ そなた。男性が同輩または身内に対して用いた。

や仏を頼まんより、まず差し当たりたるそれがしを頼まれよ。

何事(なにごと)にてもこの花(はな)が望(のぞ)みをかなえて参(まゐ)らせん。しんぞ浮世(うきよ)の命(いのち)

取り、これぞ世界(せかい)の抜(ぬ)け参(まゐ)り。どうもならぬ」

と抱(いだ)き付(つ)く。ごう振(ふ)り放(はな)ち、

「さてさて笑止(わらじ)や、旅(たび)のとの、兄弟(けいだい)の見(み)る前(まえ)もあり。訳(わけ)なき事(こと)

な遊(あそ)ばしそ」

と、恥(は)ずかしげに口覆(くちおお)い、持(も)たせ振(ふ)りなる目(め)もとにぞ、与市(よいち)は

なおも腰(こし)を抜(ぬ)かし、

「ふふ、さてはこの子(こ)が兄(あに)なるか。対面(たいめん)せん」

と、笠(かさ)引き上(あ)げ、弓矢(ゆみや)八幡(はちまん)どうも言(い)われず、花(はな)と紅葉(もみじ)と並(なら)べ置(お)

き、ふた木(き)の枝(えだ)の恋風(こいかぜ)に、なずきをどっか(ど)つかとやまされ、行(い)くも

行(い)かれず、

「これ兄者(あにじゃ)人(ひと)、兄弟(けいだい)諸(もろ)共(とも)それがし(が)が召(め)しかかえん。望(のぞ)みはいか

ようになるとも、御辺(ごへん)たち(た)が心(こころ)のままに致(いた)すべし。さあ返事(へんじ)は

いかに」

と言(い)いかくれば、牛若(うしわか)聞(き)こし召(め)し、

「まず御心(おこころ)ざし(が)ありがたく存(ぞん)じ候(こう)。さりながら最前(さいぜん)も申(もう)すとお

まずは目の前にいるこの私を頼りにする方がよくはないか。どんな願いであれ、このわしが望みをかなえてさしあげよう。ほんとうに、このわしの命を取ってしまいたいそうやつ、いつしよにこのまま駆け落ちしたいくらいじゃもう、我慢ができません」

と抱き付いてきました。午王姫は振り放し、

「さてさて、困ったお方ですこと、兄弟が見ております。わけのわからぬことをなさいますな」

と、恥ずかしそうに口元を押さえ、思わせぶりの品を作る目もとに、与市はさらにメロメロになつてしまい、

「ふふ、さてはそなたがこの子の兄か。では、対面しよう」

と、笠を引き上げると、もうなにも言えませんが。花と紅葉を並べて置いたような二人の美しい姿にすっかり心を奪われてしまい、脳天を打ち砕かれたようで、どうにもならなくなり、

「これ兄者人、兄弟ともにわしが召しかかえてやろう。どんな望みであれ、そなた達の思うままにかなえてやるぞ。さあ、返事はどうか」

と言いかけました。牛若はこれを聞いて、

「その御心ざしはまことにありがたいのですが、さきほど申しあげましたとおり、

① 神仏に参詣して帰ること。還向(げこう)。

② じゃまをし。

③ 話しかけた。「申す」は謙讓語。

④ 与市の本国。領地。

⑤ 一緒に行くこと。同行。

⑥ そうでないなら。

⑦ 自分自身が苦痛に思うこと。困ったことだ。

⑧ うしろへ。来た道をもどることをいう。

⑨ 乱暴で無礼であること。

⑩ 役小角。奈良時代の人。修験道の祖。葛城山(かつらぎやま)に住み、呪術にすぐれた人物とされる。中世以来修験道が活発化するにつれ、各地の霊山が役行者により道を開かれたという伝説を持つようになる。
⑪ 六尺の中の道を二つに分けること。
⑫ 二つに分けた内の左側三尺の分。「弓手」は弓を持つ手で、左側の意。
⑬ 朝廷に仕える人々。朝臣。武家に対する語。
⑭ 二つに分けた内の右側三尺の分。「馬手」は馬の手綱を持つ手で、右側の意。
⑮ とんでもない。

⑯ 利口ぶっている。相手を見下して言うことが多い。
⑰ 男の子。ののしって言うときの語。
⑱ 恋愛。いろごと。
⑳ とげとげしく。
㉑ 樊噲と張良。ともに中国の漢初の武将で劉邦の臣。劉邦を助け、項羽を平らげるうえで大いに武勲があった。

り、心中しんちゆうに深ふかき思おもいの候さむらひいて参宮仕さんくうつかまつり候さむらひ。下向げこうの折おりにゆると御目おめにかかり申もうすべし。ただ御許おゆるし」

とばかり言いい捨すて行いかんとし給たまえば、道みちをさえぎり、

「どこへどこへ。かく申もうしかかりし事ことなれば、ぜひ国元くにもとへ同道どうどうすべし。さなくばここを通とおさぬぞ」

「さて氣きの毒どくな。しからば後あとへ」

「いや、後あとへもなかなか戻もどさぬなり」

牛若御覽うしわかごらんじ、

「さて狼藉ろうぜきな方々かたがた。往來おうらいをふさぎ給たまうは何事なにことぞ。かたじけなく

もこの道みちは、役行者えんのかみょうじやの六尺二分ろくしゃくにぶんに踏ふみ分け給たまいて、弓手三尺一分ゆんでさんしゃくいちぶんは公家殿上人けてんじやうびと、御身おんみの様ようなる大名だいみやうの通とおる道みち、また馬手三尺一分うめでさんしゃくいちぶんは上下じやうげの商人物乞あきびとものごい、また我々風情われわれふぜいの通とおる道みちなるを前後左右ぜんごさゆうを

止とめ給たまうは以もつての外ほかの狼藉ろうぜきなり。誠まこと止とめなば切り割わって通とおるべきが、それにて止とむべきか」

与市よいち聞きいて、

「さてさて、さかさかしきわっぱかな。濡ぬれの道みちは、左様さようにと

がとがしくは通とおらぬものぞ。たとえ汝なんじが樊噲はんかい張良ちやうりやうが勇力ゆうりきを励はげ

心中しんちゆうに深く願ねがっていることがございますので、参詣さんぎいたすのでございます。参詣さんぎした帰かえりに、ゆつくりお目めにかかりたいと思おもいますので、いまはお許ゆるしてください」

と言いって行いこうとしました。が、与市よいちはそれをさえぎつて、

「どこへ行いこうというのじゃ。こうして話わしかけた以上いじやう、ぜひ国元くにもとへ連れて行いきたいもの。そうでなければ、ここを通とおさぬぞ」

「さて困こりました。では、後あとへもどりましよう」

「いやいや、戻もどることもならぬぞ」

牛若うしわかはその様子ようすを見て、

「さてさて、乱暴らんぼうな方々かたがたじゃ。われらの往來おうらいをふさぐとはどういうことでしょう。恐れ多おそくもこの道みちは、役行者えんのかみょうじやが六尺の広ひろさの道みちを踏ふみ分わけて以来いらい、左側ひだりの三尺は公家殿上人けてんじやうびとの通とおり道みちですから、あなた様あなたさまのような御大身おんたいしんの方かたが通とおる道みち、また、右側みぎの三尺は、往來おうらいする商人しやうじんや物乞ものごい、あるいは我々われわれのような下々げげの者ものが通とおる道みちになつております。なのに、前後左右ぜんごさゆうどちらへも行いかせぬというのは、まことに

もつて乱暴らんぼうなことでございます。ほんとうに我々われわれを通とおさないおつもりならば、あなた方を切きって押し分わけて通とおるつもりですが、それ

でもなお、通とおさぬと言いいますか」

ときっぱりと言いいました。与市よいちはこれを聞きいて、

「さてさて、生意氣しやういきな口くちをきく小僧こそうめめ。恋こひの道みちというものは、そのように角かくを立てていうものではない。たとえそなたが樊噲はんかいや張良ちやうりやうの

- ① 言い出した。
 ② 約束・命令・条約などを守らず、それにそむくこと。
 ③ 不服を言うなら。文句を言うなら。

- ④ 力づくで取り押さえること。
 ⑤ あとへ引きさがって。

⑥ 刀の手で握るところ。

- ⑦ 無礼である。
 ⑧ おまえら。「おのれ」は目下の者をののしって呼ぶ語。「ばら」は複数を表わし、また相手を軽視する気持ちを含む。
 ⑨ 何を隠そう。実は。
 ⑩ 平安初期の武将。初段参照。
 ⑪ 牛若は義朝の八男であるが、叔父八郎為朝の名をはばかり九郎と称した。
 ⑫ 作法。
 ⑬ ばかものたち。
 ⑭ 思い知らせよう。ひどい目にあわせてやろう。

- ⑮ とり逃がす。
 ⑯ 生きたままつかまえる。

- ⑰ これはどうしたことだ。
 ⑱ 間に強引に入ると。
 ⑲ 天の意志。儒教などで、天は常に道理にかなった道を示し、それにそって生きるのが正しいとされる。
 ⑳ そのこの。「そこなる」の転で、対等以下の人に用いる。
 ㉑ 山中に根城をもち、旅人や市中の人を襲う盗賊。
 ㉒ 平重盛のこと。初段参照。
 ㉓ 他人の身につけているものをくように奪い取ること。

むとも、当時天下にこの関ヶ原の与市などが言い掛かりし事を違背せん者、天が下には覚えぬ。異議に及ばば侍ども縄を掛け引つ立て来たれ」と言いつける。

「承る」

とて侍ども、すでに手ごめにせんとする。牛若しきつて、太刀の柄に手を掛け、

「やあ、推参なり、おのればら。今は何をかつつむべき。源氏左馬守義朝の八男、牛若とは我が事なり。法をも知らぬ愚人ばら。目に物を見せん」

とのたまえば、与市聞いて、

「何、牛若とや。それ余すな、生け捕れ」

と、太刀長刀の鞘を外しひしめく所に武蔵坊、友治兄弟馳せ来たり、「こはいかに」と割って入れば、人々始め終わりを語らせ給えば、友治聞いて、

「これ天道のお引き合わせ。やれそこな山賊め、よき所にて巡り合うたり。おのれいつぞや小松殿の御供し、行き来の者をは

ように力があるといつても、いまこの天下で、この関ヶ原の与市の仕官の誘いに背こうというようなものはおらぬはず。文句があるなら、侍ども、縄を掛けて引つ立てる」と言いつけました。

「承知しました」

と侍たちは、もう牛若と姫を捕まえる構えでいます。牛若は飛び去って刀の柄に手を掛け、「生意気な奴らめ。もう隠してはおられぬ。」

私は、源左馬守義朝の八男牛若丸である。作法も知らぬ無礼なばかものどもめ、目に物を見せてくれよう」

と名乗りを上げました。これを聞いて与市は、「なに、牛若とな。それ逃がすなよ、生け捕りにしろ」

と、太刀や長刀の鞘を外し、ひしめきあっているところに武蔵坊と友治兄弟が駆けつけて来ました。「これは、何事」と割って入り、人々に事の次第を尋ねました。友治は、

「これも天のお引き合わせじゃ。やれそこの山賊め、よい所で巡り合った。」

①きつと。
②身につけている。

③京都三条の刀工。二段参照。

④戦いに備えて身仕度し。

⑤刀の刃の先端。

⑥ほのおを出し。勢いの強いことをたとえる。
⑦むごたらしいことだなあ。

⑧武家の従者。若い屈強の侍。戦いするとき馬に乗る資格がない。

⑨追いつき。
⑩獣の尾の付け根。与一親子の乗った馬のしっぽの付け根をいう。

⑪刃物の切れ味が非常によいことのとえ。みごとに切り落とすさまをいう。
⑫いくさの守り神。ここでは八幡神。
⑬戦争を始めるとき、縁起のため敵方の者を殺したりすること。また、戦場などで最初に敵を討ち取ること。

⑭源氏が繁昌し、そのまた子孫も繁昌すること。
⑮言葉に出して言い尽くせないほどだ。古浄瑠璃などの語り物の最後にしばしば用いられる常套文句。

ぎ取^とったる、定^ためて覚^{おぼ}えあるべし。おのれが今^{いま}佩^はいたる太^た刀^ちは、それがしが家^{いえ}に伝^{つた}わったる三^{さん}条^{じょう}小^こ鍛^か冶^じが打^うち物^{もの}。思^{おも}い知^しったか盗^{ぬす}人^{びと}め、一^{ひとり}人も余^{あま}すまじ」

と、高^{こう}声^{しょう}にののし^こったる、その暇^{ひま}に人^{ひと}々^{びと}傍^{かたわ}らにて装^{しょう}束^{ぶく}し、抜^ぬき連^つれて切^きって掛^かかれれば、与^よ市^{いち}が侍^{さむらい}ども、「我^{われ}も我^{われ}も」と出^いで立^たちて切^きつ先^{さき}より火^か炎^{えん}を出^だし、火^ひ花^{ばな}を散^ちらして戦^{たた}うたり。無^む残^{ざん}やな、与^よ市^{いち}が若^{わか}党^{とう}多^{おほ}くは討^うたれ、多^{おほ}くはまた皆^{みな}散^ちり散^ちりに逃^にげ失^うせたり。与^よ市^{いち}も「今^{いま}はかなわじ」と、親^{おや}子^こ諸^{もろ}共^{とも}馬^まに乘^のり、美^み濃^のをさして落^おち行^ゆくを、武^む蔵^{ざう}喜^き三^{さん}太^たぼつ^つつき、お^おつ^つを取^とって、大^{だい}地^ちへどうと引^ひき据^すえ、親^{おや}子^こ諸^{もろ}共^{とも}水^{みづ}もた^たまらず打^うち落^おとし、「い^いく^くさ^さ神^{がみ}の血^ち祭^{まつり}なり。門^{かど}出^でよし、め^めで^でたし」

と、東^{あずま}路^じさして下^{くだ}らるる。
源^{げん}氏^じ繁^{はん}昌^{しょう}末^{すえ}繁^{はん}昌^{しょう}、め^めで^でた^たかりと^とも^もな^なかな^なか申^{もう}す^すば^ばかり^りは^はな^なかり^り。

お前は、いつぞや、小松殿の御供をしたおりに、往來のもの刀やお金を奪い取ったことがあるはず、覚えておろう。おまえがいま差しているその太刀は、我が家伝來の家宝、三条小鍛冶が打った刀じゃ。思い知れ、盗人め、一人も残さず、やつつけてくれる」

と、大声で叫びました。その間にみなは用意を調べ、刀を抜いて切り掛かっています。与市の侍たちも、「我も我も」と出てきて、刃先から火花を散らすようにして戦いました。残りは散り散りに逃げていきました。与市も「もうこれはかなわない」と、親子ともども馬に乗り、美濃の領地へと逃げていこうとしたのですが、弁慶と喜三太が追いつき、つかまえて、大地へ引きずり下ろし、引き据えて、親子一緒に首を切り落としました。門出にあたり、いくさ神へのよいお供えになりました。

「これは、幸先のよい、めでたいことである」と意気揚々と東路をさして下っていきました。このうち、源氏は繁昌していき、まことにめでたいことこのうえないものであります。

尾口のでくまわし教材作成委員会

木越 治（金沢大学人間社会学域歴史言語文化学系教授）

道下 甚一（東二口区文弥人形浄瑠璃保存会会長）

中内 幹雄（深瀬のでくまわし保存会事務局長）

村上和生雄（白山市教育委員会文化課主査）

協力者

木越 秀子（金沢大学大学院人間社会環境研究科博士後期課程在学）

丸井 貴史（金沢大学大学院人間社会環境研究科博士前期課程在学）

国指定重要無形民俗文化財 尾口のでくまわし

熊井太郎孝行之巻

発行 平成二十二年三月

編集 尾口のでくまわし教材作成委員会

発行 加賀の民俗文化財活用委員会

委員長 喜田 紘雄

石川県白山市殿町三十九

白山市教育委員会事務局文化課内

TEL 〇七六―二七四―九五七三

印刷 能登印刷株式会社 金沢市武蔵町七番十号